

# 松本市島立条里的遺構

——県道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書——

1988・3

松本市教育委員会



5地区  
検出中  
(北から)



長野自動車道より県道を望む



第10号住居址  
(東から)



第12号住居址  
(西から)



第14号住居址  
周溝1  
(西から)

# 松本市島立条里的遺構

——県道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書——

1988・3

松本市教育委員会

## 序

島立条里的遺構は、島立地区の水田地帯に所在し、隣接する新村地区的条里的遺構とともに古代からの計画開発の跡ではないかと言われておりました。広範囲に分布するこの遺構は、大型の開発事業に伴って過去何回も調査されてきました。今回の調査は、中央自動車道長野線の開通に合せて工事が進められている、県道新田・松本線の付替え工事に伴い、松本建設事務所から当教育委員会に委託され実施したものです。調査は2年度にわたり行われ、市教委職員を中心に地元考古学研究者、地区的みなさまの協力により、多大な成果をおさめ、無事終了することができました。その結果は本文で詳述してあるとおりですが、奈良時代から中世にかけての住居跡などとともに土器などの遺物が多数発見され、周辺地域を含む広範囲に拡がる古代の村の様子をうかがう事ができました。

折しも周辺では中央自動車道建設工事や場整備が大規模に行われ、これらに伴って発掘調査も行われており、近い将来には地区の様相も一変してしまう時、その歴史的記録をとどめておくことは私達に課せられた責務と考えております。又今回の成果と今後の周辺調査とにより、一層島立地区的歴史的解明がなされる事と信じております。

最後になりましたが、この調査にあたり多大なご理解とご協力をいただきました島立土地改良区をはじめ、島立公民館、地元のみなさまに心から感謝いたしまして序といたします。

昭和63年3月

松本市教育委員会

教育長 中 島 俊 彦

## 例　　言

- 1、本書は昭和61年11月14日から翌年5月29日にわたり実施された新村島立条里的遺構の緊急発掘に関する報告書である。
- 2、本調査は松本市が長野県松本建設事務所より委託をうけ、松本市教育委員会が行なったものである。
- 3、本書の執筆は第1章事務局、第2章2節太田守夫、第3章2節—3土橋久美子、同第3節—1直井雅尚、その他の項目は高桑俊雄が担当した。
- 4、本書作成に関する作業分担は次のとおりである。  
遺構図トレース：石合英子  
遺物・図整理：丸山恵子  
遺物実測・トレース：岩野公子　土橋久子　藤井尚子（土器）　神沢昌二郎（鉄器）  
写真撮影：宮崎洋一  
一覧表作成：土橋久美子（遺構、鉄器等）　竹内忍（土器）
- 5、本書の編集は事務局が行ない、滝沢智恵子の助力を得た。
- 6、遺物整理に関しては、勤長野県埋蔵文化財センター調査研究員　原明芳氏より助言を得た。記して感謝申し上げる。
- 7、出土遺物及び図類は松本市立考古博物館が保管している。

# 目 次

## 第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査体制.....	1
第3節 作業日誌.....	3

## 第2章 遺跡の環境

第1節 調査地の位置.....	7
第2節 地形と地質.....	10
第3節 周辺遺跡.....	16

## 第3章 調査結果

第1節 調査の概要.....	19
第2節 遺構	
1 住居址.....	20
2 小堅穴.....	39
3 建物址、櫛列.....	41
4 ピット、溝、周溝.....	48
第3節 遺物	
1 土器.....	50
2 鉄器、土製品、その他.....	89
第4章 まとめ.....	91

## 挿 図 目 次

第1図 造跡範囲と調査地	2	第23図 建物址3・4・5	43
第2図 施工、調査地区	8	第24図 建物址6・7、櫛列1・2	44
第3図 主造構と土層	9	第25図 建物址8・9	45
第4図 土層図1	12	第26図 ピット、溝、周溝	49
第5図 土層図2	13	第27図 器種・器形一覧(土師器1)	51
第6図 土層図3	14	第28図 器種・器形一覧(土師器2)	52
第7図 土層図4	15	第29図 器種・器形一覧(須恵器)	53
第8図 周辺遺跡	17	第30図 造構別器種・器形重量一覧(1)	57
第9図 造構配置	18	第31図 造構別器種・器形重量一覧(2)	58
第10図 第1号住居址	20	第32図 土器底部拓影	70
第11図 第2・3・4号住居址	22	第33図 器種組成の変遷	73
第12図 第5号住居址	23	第34図 出土土器(1)	75
第13図 第6・7号住居址	25	第35図 出土土器(2)	76
第14図 第8号住居址	26	第36図 出土土器(3)	77
第15図 第9号住居址	27	第37図 出土土器(4)	78
第16図 第10号住居址	29	第38図 出土土器(5)	79
第17図 第11・13号住居址	32	第39図 出土土器(6)	80
第18図 第12号住居址	34	第40図 出土土器(7)	81
第19図 第14号住居址	35	第41図 出土土器(8)	82
第20図 第15号住居址	38	第42図 出土土器(9)	83
第21図 小堅穴1・2	40	第43図 出土鉄器・土製品	90
第22図 建物址1・2	42		

## 表 目 次

表1 建物址一覧表	46
表2 櫛列一覧表	47
表3 土師器器種・器形一覧表	54
表4 須恵器器種・器形一覧表	55
表5 ピット出土土器器種・器形一覧表	67
表6 供膳形態壺・碗・皿類出土量ならびに出土比率一覧	69
表7 出土土器観察表	84
表8 鉄器・土製品一覧表	89

# 第1章 調査経過

## 第1節 調査に至る経過

高速道長野線建設に関連して県単事業として道路改良工事が島立地区内で行われることとなり、昭和60年に現地協議を行った。当該地点に隣接する中央道敷地内の調査では多量の遺構を検出しているため、市では工事の都合に合わせて2年次にわたって調査を行うこととし、昭和61年11月10日に委託契約を締結して11月11日より永田から三の宮に至る道路の南北地点の発掘調査に着手した。

昭和62年度は前年度調査地点の前後を調査することとし、昭和62年4月1日に委託契約を結び4月22日より発掘調査に入ったが、特に調査地区北側については遺構がなく、そのため委託料の減少を生じたので昭和63年1月19日に変更委託契約を結んだ。

## 第2節 調査体制

調査団長：中島俊彦（教育長） 調査担当者：神沢昌二郎（市立考古博物館長）

現場担当者：高桑俊雄（社会教育課嘱託）

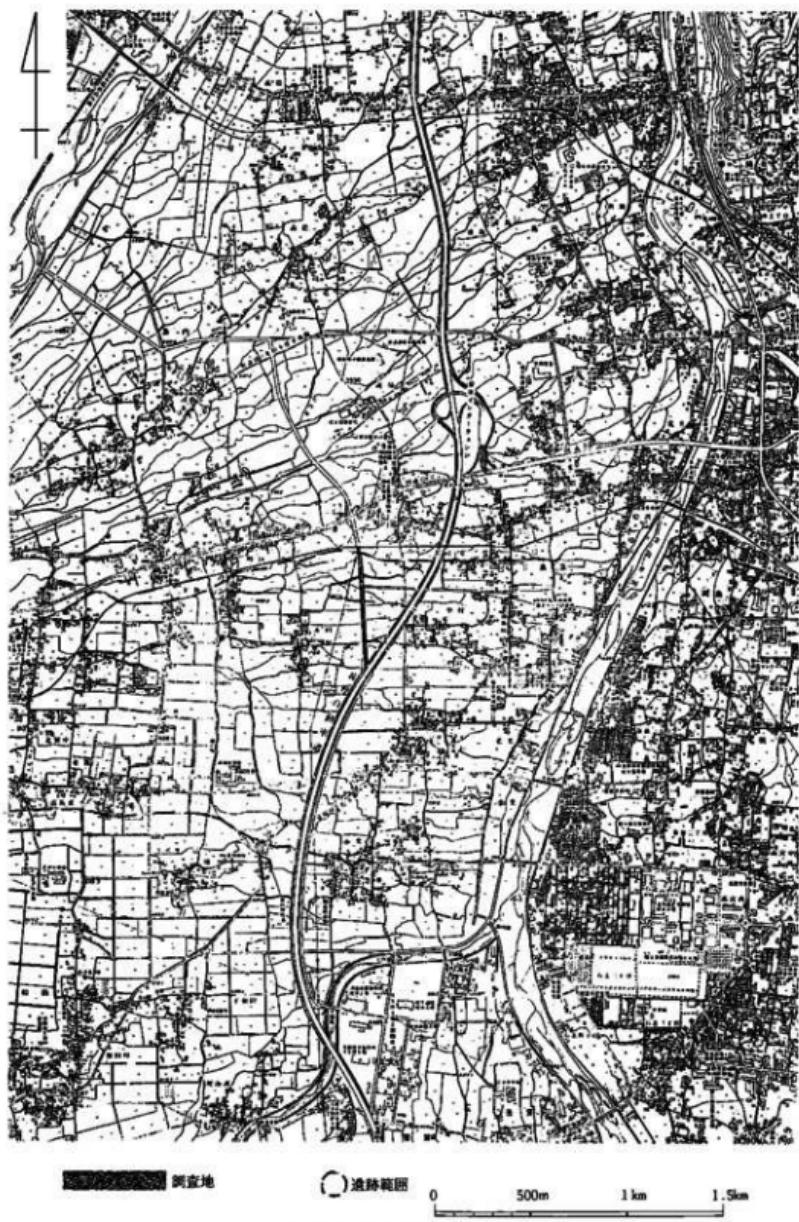
調査員：太田守夫、土橋久子、横田作重

協力者：青木良彦 浅野房子 石合英子 市川今朝男 乾靖子 大出六郎 大久保幸子 大島澄子 小沢清人 小沢静子 小野勝近 小野いつ美 小原義人 開崎八重子 金子富人 上条茂子 北野みきあ 倉田芳雄 小松和茂 佐々木登弘美 塩原久和 下沢恵子 住吉琢磨 濱川長広 田口吉重 竹内靖長 竹中東 田多井うめ子 田多井亘 塚田文子 土橋久美子 鶴川健吾 鶴川登 中島新晴 中村安雄 萩原愛子 巾崎助治 原重治 原てるみ 原一二三 松森幸子 丸山恵子 百瀬一子 百瀬二三子 百瀬義友 村山三七 役田昭子 矢島利保 若井七十郎

事務局：浜憲幸（前社会教育課長） 浅輪幸市（社会教育課長） 岩渕世紀（前文化係長）

小松晃（文化係長） 柳沢忠博（主査） 大村敏博（主査） 熊谷康治（主事）

直井雅尚（主事） 岩野公子 洞田睦子



第1図 造跡範囲と調査地

### 第3節 作業日誌

- 昭和61年11月11日 (火) 曇 発掘作業下準備。 作業員：中島新網（以下員数のみ記載）
- 11月12日 (水) 晴 重機による削平、(3地区) 以下22日迄2地区へ移り継続。 作業員：2名
- 11月13日 (木) 曇 ブレハブ設置。
- 11月14日 (金) 晴 トイレ設置。テント設営。発掘用機材搬入。 作業員：9名
- 11月15日 (土) 曇 検出作業開始。 作業員：12名
- 11月17日 (月) 曇 検出作業。土層観察面削平。 作業員：27名
- 11月18日 (火) 晴 検出作業。 作業員：27名
- 11月19日 (水) 晴 3地区土層図作成。検出作業。 作業員：24名
- 11月20日 (木) 晴 3地区トランシットによる測量。検出作業。 作業員：8名
- 11月21日 (金) 晴 3地区トランシット測量継続。同平面図作成。 作業員：7名
- 11月22日 (土) 晴 2地区に土層観察用トレーンチ設定。 作業員：7名
- 11月25日 (火) 曇 重機による削平、検出。2地区検出作業。 作業員：26名
- 11月26日 (水) 曇 2地区検出作業。 作業員：26名
- 11月27日 (木) 晴 重機による削平、検出。2地区検出作業。 作業員：27名
- 11月28日 (金) 晴 1地区検出作業。2地区平安時代面まで重機により削平。 作業員：26名
- 11月29日 (土) 曇一時雨 重機による削平。5地区検出、トレーンチ掘り下げ作業。 作業員：25名
- 12月1日 (月) 晴 1、2地区検出作業。4、5地区西際トレーンチ掘り下げ。2地区トランシットによる測量。 作業員：29名
- 12月2日 (火) 晴 2地区トランシットで測量継続、4、5地区トレーンチ掘り下げ。1地区1号住居址（以下○住とする）より遺構掘り下げ開始。 作業員：29名
- 12月3日 (水) 晴 2地区トランシット測量終了、同1地区開始。1地区遺構掘り下げ継続。2地区6～8住および小窓穴1、1地区よりピット掘り下げ開始。4地区土層図作成。 作業員：29名
- 12月4日 (木) 曇一時雨 1地区トランシットによる測量継続。1、2地区遺構掘り下げ継続。雨のため午後作業中止。 作業員：30名
- 12月5日 (金) 晴（朝小雪舞う） 1地区トランシットによる測量終了。1、2地区遺構掘り下げ継続。各地区の位置関係を知るための角測量。 作業員：29名
- 12月6日 (土) 晴 1、2地区遺構掘り下げ継続。 作業員：29名
- 12月8日 (月) 曇 1～4住土層図作成。9～10住掘り下げ開始。ピットより平面図作成開始。 作業員：34名
- 12月9日 (火) 晴 小窓穴1土層図作成、1住平面図作成、写真撮影。6、7住切合不明のため床面まで掘り下げる。5、10住プラン不明瞭のためベルト残し掘り下げる。 作

業員：36名

- 12月10日 (水) 晴 5、9、10住土層図、2～4住平面図作成。 作業員：12名
- 12月11日 (木) 晴 6、7、10住掘り下げ継続。6～8住土層図作成。 作業員：35名
- 12月12日 (金) 晴 5地区再び重機により削平。小堅穴1平面図作成。6～9住掘り下げ終了。5、10住床面精査。 作業員：34名
- 12月13日 (土) 晴 2地区南端部再び重機により削平、検出。11～13住、小堅穴2掘り下げ開始。2～4、6～9住平面図作成。2～4住遺物取上げ。1～4住床面精査。5地区検出作業。 作業員：34名
- 12月15日 (月) 雨 雨のため作業中止。
- 12月16日 (火) 晴一時曇 4地区平面図作成。6～8住、小堅穴1床面精査。11～13住、小堅穴2掘り下げ継続。2地区ピット掘り下げ、ほぼ終了する。 作業員：14名
- 12月17日 (水) 晴 11～13住掘り下げ継続。10住平面図作成。9住床面精査。2～8住、小堅穴1写真撮影。 作業員：37名
- 12月18日 (木) 曇 (風強し) 11～13住、小堅穴2土層図作成。5、10住床面精査。5住ピット半剖。3住カマド、10住壁際配石状況写真撮影。 作業員：37名
- 12月19日 (金) 雨 雨のため作業中止。
- 12月20日 (土) 晴 11、13住、小堅穴2平面図作成。11住、小堅穴2床面精査。9～11住写真撮影。11住カマド半剖、断面図作成。5地区検出作業。 作業員：35名
- 12月21日 (日) 晴 12住掘り下げ継続。9、10住煙道掘り下げ土層図作成。13住、小堅穴2写真撮影。 作業員：33名
- 12月22日 (月) 曇 建物址土層図、平面図完成。5住柱穴半剖、土層図作成。5地区検出作業継続。9、10住カマド写真撮影。 作業員：33名
- 12月23日 (火) 晴 5、12住平面図作成。10住柱穴掘り終了。配石状況平面図作成。2地区北側平面図ほぼ終了。 作業員：11名
- 12月24日 (水) 晴 12住内磚を除去、平面図作成。2地区再び北より重機にて削平。 作業員：11名
- 12月25日 (木) 晴 2地区重機による削平継続。12住掘り下げ終了平面図作成。5住カマド平面図作成。2～4住測量。5地区土層図作成。 作業員：12名
- 12月26日 (金) 曇 2地区重機による削平終了。再び検出作業、ピット半剖開始。12住床面検出、カマド精査、平面図作成、写真撮影。5地区平面図作成。4、5地区調査終了全体写真撮影。 作業員：38名
- 12月27日 (土) 晴 2地区下部検出面トランシットによる測量、ピット掘り下げ、土層図、平面図作成。西隣土層図作成。ブレハブ撤去。テント撤収。機材搬出。 作業員：11名

冬期のため現場作業一時中止

- 昭和62年3月25日 (水) 晴 発掘下準備。 作業員：1名
- 3月26日 (木) 晴 重機による削平。検出作業。以下30日迄継続(1、6～9地区)。ピット多出。  
作業員：7名
- 3月27日 (金) 晴 発掘機材搬入。テント設営。14住掘り下げ開始。 作業員：6名
- 3月28日 (土) 晴 14住掘り下げ継続。 作業員：10名
- 3月30日 (月) 晴 1地区北側検出作業。 作業員：9名
- 3月31日 (火) 晴 14住掘り下げ継続。 作業員：8名
- 年度切替の為、現場作業しばらく休止。
- 4月21日 (火) 曇 発掘資材、テント搬入。市教委：高桑(以下同)
- 4月22日 (水) 曇 発掘作業再開。14住掘り下げ再開。土鍤出土。14住ピット、他ピット掘り下げ  
開始。 作業員：15名
- 4月23日 (木) 晴 溝、トレンチ掘り下げ。14住掘り下げ継続。1地区ピット掘り下げ。6地区テ  
ント設営。 作業員：17名
- 4月24日 (金) 晴 14住床面まで掘り下げ。溝トレンチ掘り下げ。1地区南・北側ピット掘り下げ。  
6～9地区写真撮影。 作業員：16名
- 4月25日 (土) 晴 ピット掘り下げ。溝写真撮影。 作業員：14名
- 4月27日 (月) 晴 トランシットによる測量。ピット掘り下げ継続。南側ピット土層図作成。作業  
員：15名
- 4月28日 (火) 晴 14住土層図作成。トランシットによる測量終了。 作業員：3名
- 4月30日 (木) 晴 14住遺物出土状況写真撮影、平面図作成。南側ピット完掘。北側ピット土層図  
作成。 作業員：15名
- 5月1日 (金) 曇後雨 14住平面図作成、南側ピット平面図作成、測量。風と雨のため3時にて作  
業中止。 作業員：6名
- 5月7日 (木) 晴 発掘地区的散水。 作業員：1名
- 5月8日 (金) 晴 北側ピット、14住平面図作成。 作業員：2名
- 5月9日 (土) 晴 発掘地区的散水。 作業員：1名
- 5月11日 (月) 曇 発掘地区的散水。 作業員：1名
- 5月12日 (火) 曇(風強し) 1地区ピット掘り下げ、土層図、平面図作成、写真撮影。14住カマ  
ド精査、ピット検出。8、9地区散水。周溝掘り下げ。 作業員：10名
- 5月13日 (水) 曇後雨 14住ピット検出。9地区検出作業。1地区測量。 作業員：17名
- 5月14日 (木) 雨 雨のため作業中止。
- 5月15日 (金) 曇 14住雨水汲み出し。7、8地区検出作業。7～9地区平面図作成。 作業員：  
16名
- 5月16日 (土) 晴 周溝再度掘り下げ、土層図、平面図作成。14住ピット掘り下げ。7、8地区ト  
レンチ掘り下げ、土層図作成。 作業員：14名

- 5月18日 (月) 曇 14住写真撮影後再び掘り下げ、更に床を壊し旧ピットを調査する。 作業員：16名
- 5月19日 (火) 晴 1地区北測量。 作業員：2名
- 5月20日 (水) 晴後曇 14住ピット測量。 1地区北測量。 6地区平面図作成。 1地区南東部重機にて削平開始。 作業員：2名
- 5月21日 (木) 晴 重機にて削平、検出発見。 15住、ピット検出、掘り下げ開始。 1地区北部西際土層図作成。 南東部トランシットによる測量。 作業員：20名
- 5月22日 (金) 曇 15住、南東部ピット掘り下げ、土層図作成。 平面図作成。 作業員：20名
- 5月25日 (月) 晴時々曇 南東部ピット、15住平面図作成。 15住遺物取り上げ。 作業員：3名
- 5月26日 (火) 曇時々雨 15住土層図、平面図作成、写真撮影。 南東部ピット測量。 6～9地区土層名及び図確認。 雨のため4時に作業中止。 作業員：7名
- 5月28日 (木) 曇 15住西側土層図作成。 15住カマド半剖、煙道部断面図作成。 作業員：3名
- 5月29日 (金) 曇 本日にて現場作業終了。 テント撤去、発掘資材搬出。 作業員：3名
- 5月30日 (土) 晴 本日より図面等整理、報告書作成に向けて、次の作業を順次行なっている。 遺物洗浄、注記、復元、整理、拓影、実測、トレース、図版整理、原稿執筆、校正等。 作業員：1名



1地区 南側  
(長野自動車道から)



2地区 表土除去



2地区  
(南から)



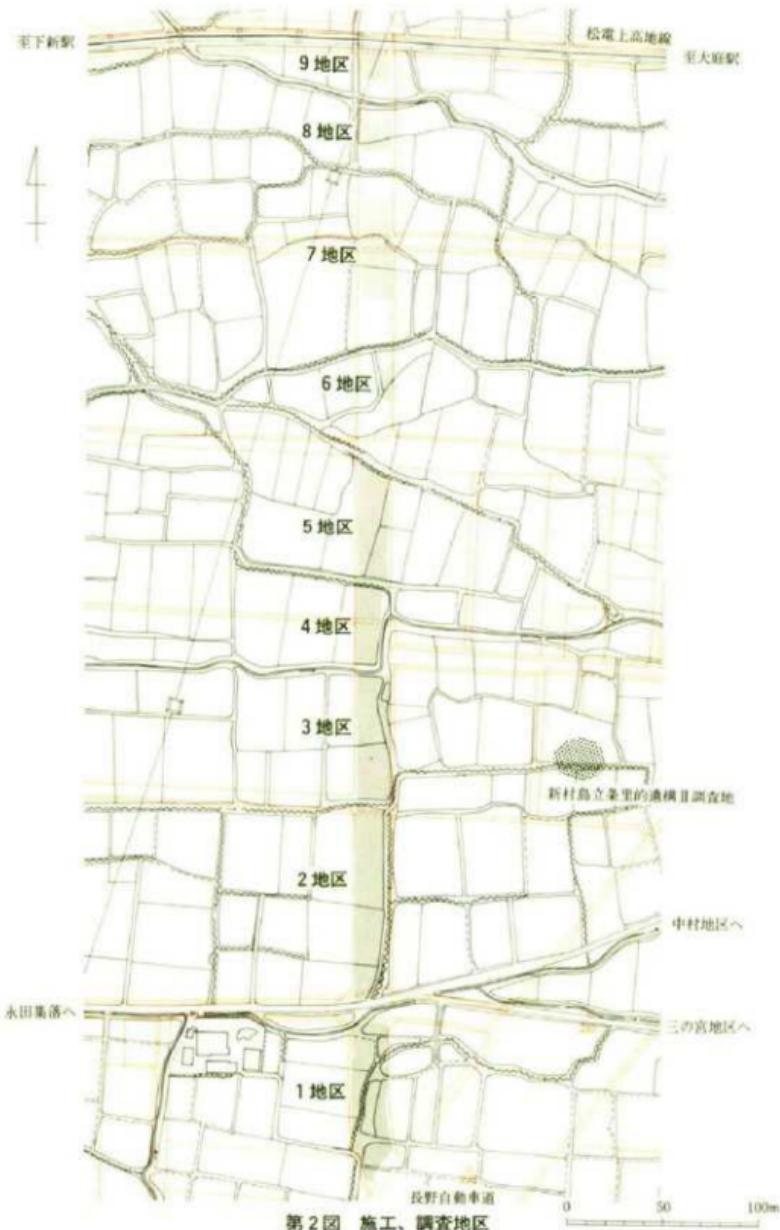
5地区  
(南から)

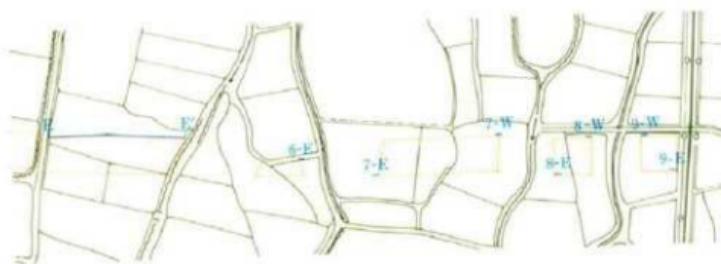
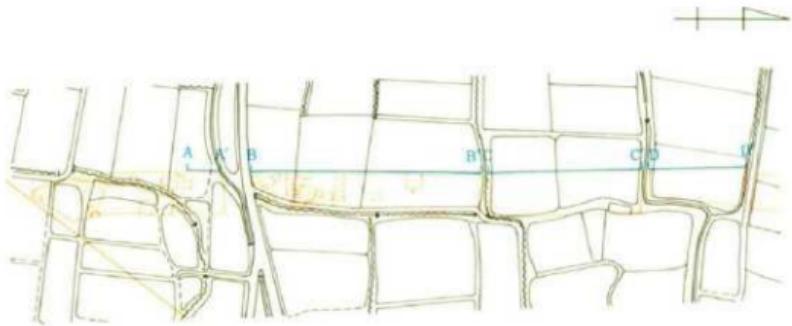
## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 調査地の位置

今回調査した県道新田松本線バイパスは長野自動車道〔STA・238+80〕付近の側道から分岐して真北へ向かって伸びている。約600mで松本電鉄上高地線、更に150m弱で国道158号線に達しそこから北西へ緩やかに曲がり樽木川を越え、1.1km程で島内小宮地区の東にて工事中の県道倭北松本停車場線へと連絡する。ここは從来新村島立条里的遺構とされていた範囲のはば中央にあたり、今回の調査はその北半部に途切れ途切れであるが巾15m、長さ600m弱にわたりトレソチを入れた格好となった。

調査地は現状水田でその両脇もは場整備事業の最中、もしくは予定地となっている場所である。地勢を見ると東西では標高にかなり高低差があるが、南北については三ノ宮から永田集落への市道を隔てて南側がやや高く、北側は各地区により若干の高低差が認められるのみで全般的には平坦と言える。これは水田への水利現況でも分かることで1地区で擗沢、2~4地区で宮沢、5、6地区で堂沢、8、9地区内に梅沢などの小水路があるがどの水路も南・北へと複雑に分流させて導水している。ここは眺望も良く西に永田集落を経て遠くに南は朝日、鉢盛山から梓川の渓、北西には北アルプスを望むことができる。又東には本来中村集落が見える筈であるが長野自動車道の土盛のため今は遠くの美ヶ原、高ボッチの嶺が見えるのみとなっている。





0 50 100m

第3図 主遺構と土層

## 第2節 地形と地質

### 1、位置と地形

本遺跡は松本市島立永田集落の東に位置し、中央道長野線のアクセス道路の新設県道に当る。発掘地の南端は新設県道と中央道長野線の交差点、北端は松本電鉄上高地線との交差点で、距離は約650mとなる。標高598m前後、平均傾斜 $\frac{9}{1000}$ 東ないし東北東へ傾く平坦な面上にある。

地形上は梓川扇状地に属する、沖積扇状地性の堆積で、押出面に続く地形面と考えられる。松本電鉄上高地線を越えた150m先の国道沿いからは、現河床のはん濫原に変わる。

この付近一帯は、土壌深度60cm以上と報告されている水田地帯で、条里的遺構の地域として、関心をもたれている所もある。

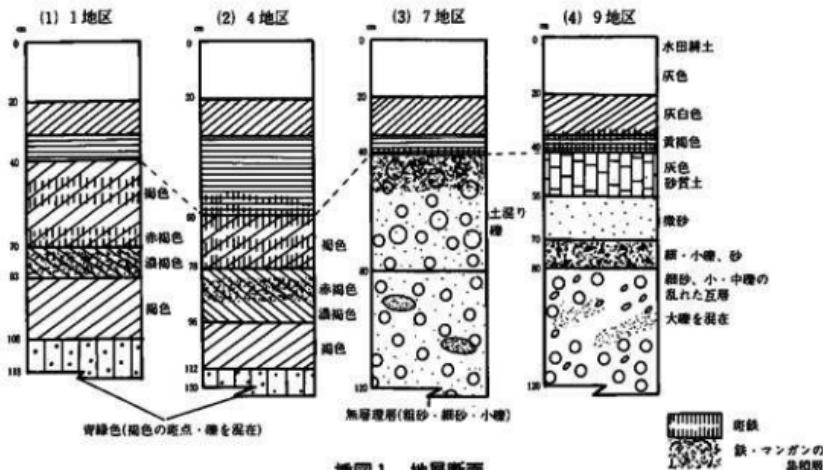
発掘面は扇状地の扇尖に当り、地下自然水位が-10mを越える。水田耕土の下は、はん濫原状の堆積で、同時異相の砂礫層と土層が介在し、表層では想像のできない状態が展開する。従って介在する土層に当る場所では、表層の土層が加わり、厚さが1mを越えることになる。礫の大きさは、小・中礫が中心で、大礫が混在する。

### 2、堆積層と礫・遺跡の立地

発掘面(遺跡面)は南北に長く、東西性の梓川扇状地を切っている状態のため、約650mにわたりはん濫原の地層を見ることができる。1地区から9地区までの地層断面は、前述の同時異相の砂礫層と土層の介在が繰り返され、はん濫原の規模と複雑さを知ることができる。

まず、発掘面に現れた礫層についてみると、1~9地区を通じ、N60°Eの方向を示している。これを島立遺跡群やその周辺遺跡と比較してみると、それぞれ北東遺跡N60°W、永田南の条里的遺構N60°W、三の宮遺跡N40°~50°E、島立条里的遺構(1986)N60°E、島立小新設グランド東遺跡(1987)E-W+N75°W、小柴遺跡(1987)N80°E、新村条里的遺構E-9を示している。すなわち新村地域で東西性であったものが、梓川のはん濫原が南から北に移るにともない、流れの方向にも変化が生れたとも考えられる。

礫層の分布を発掘地区で見ると、1地区-1、2地区-0、3地区-3、4地区-1、5地区-3、6地区-2、7地区-2、8地区-2、9地区-1である。これらは土層の厚さと関係をもち、1・2・4地区は特に厚く、住居跡・土壤が多く見られた(地層断面図(1)(2))。これに5・8地区が続き、3・9地区は礫層がやや高かった(地層断面図(4))。6・7地区は礫層が高く、古い五万分の一地形図(国土地理院)では畠地として現され、実際の耕作者も耕土が浅く水引きのよい田であったと語っていた(地層断面図(3))。これは長く続いた河流のあとか、あるいははん濫原の礫のたまりかと思われ



挿図1 地層断面

れる。遺跡はこのはん疇原の堆積物を切って存在するので、はん疇原の堆積はそれ以前と考えられる。

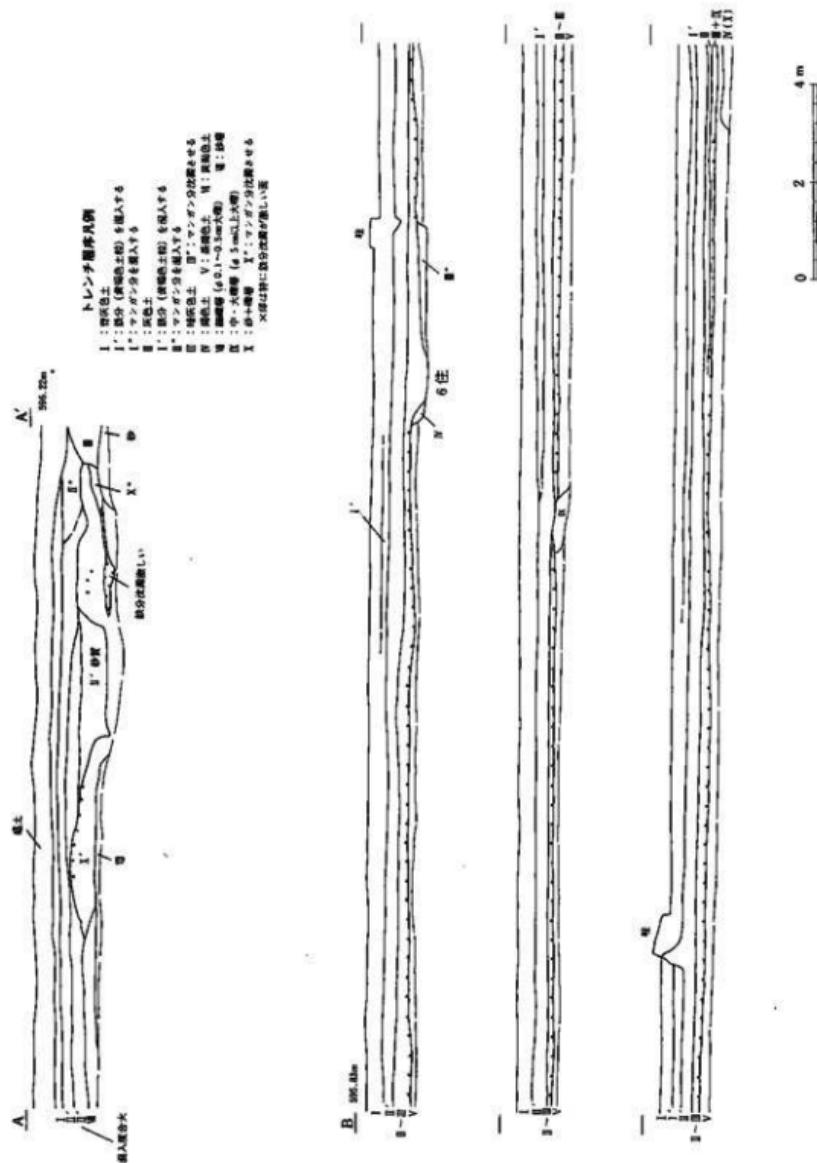
挿図1は代表的な地層断面を示したものである（連続断面図は別掲）。

中世の遺構・遺物は班鐵を含む黄褐色土に、平安時代の遺構・遺物は、Fe・Mnの集積層（赤褐色）及びその下層の淡褐色・黒褐色の土層に及んでいると報告されている。

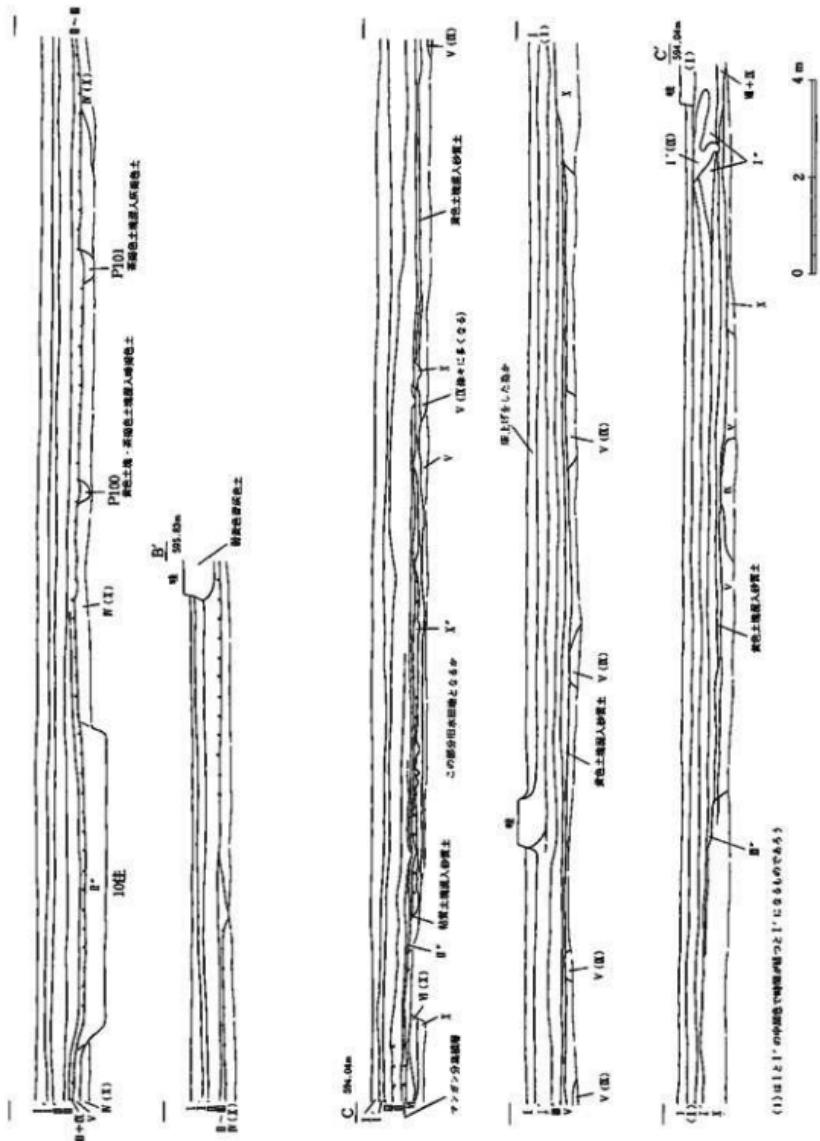
Fe・Mnの集積層は表層より70~80cmの深さで見られるが、島内地区に比べると、一般に薄く底盤にならない。土層の薄いところでは、礫層の上部に汚染が及んでいる。

これらの地区の中で、1地区は堆積層が最も複雑である。地区の南半部は地層断面図(1)に示すように、厚い地層の堆積で深さ70~80cmには、住居跡やほぼ南北性の遺構が見られた。しかし北半部は発掘面上に、他と違った堆積状態が現れた。まず中央から北に、東西に延びる幅2.5mの砂層、さらにその北側に幅3mの砂混り細・小・中礫層が見られた。さらにこの礫層から土層中を北へ延びた、幅2.5mの礫層があり北壁の断面下に続いた。北壁の断面ではこの礫層の上部に、60cmの土層が載る。またこの砂層・礫層の延びた西壁の断面は、砂・礫の入り乱れた互層の上に50cmの土層が載る。東壁の断面でも同様で、Fe・Mnの汚染はいずれも深さ60cmにあった。これは地下はん疇原の流れの方向の変換を示すものか、あるいはこの場所に流れている、は場整備前の東西性のせぎ（河床）につながるものか判断ができなかった。

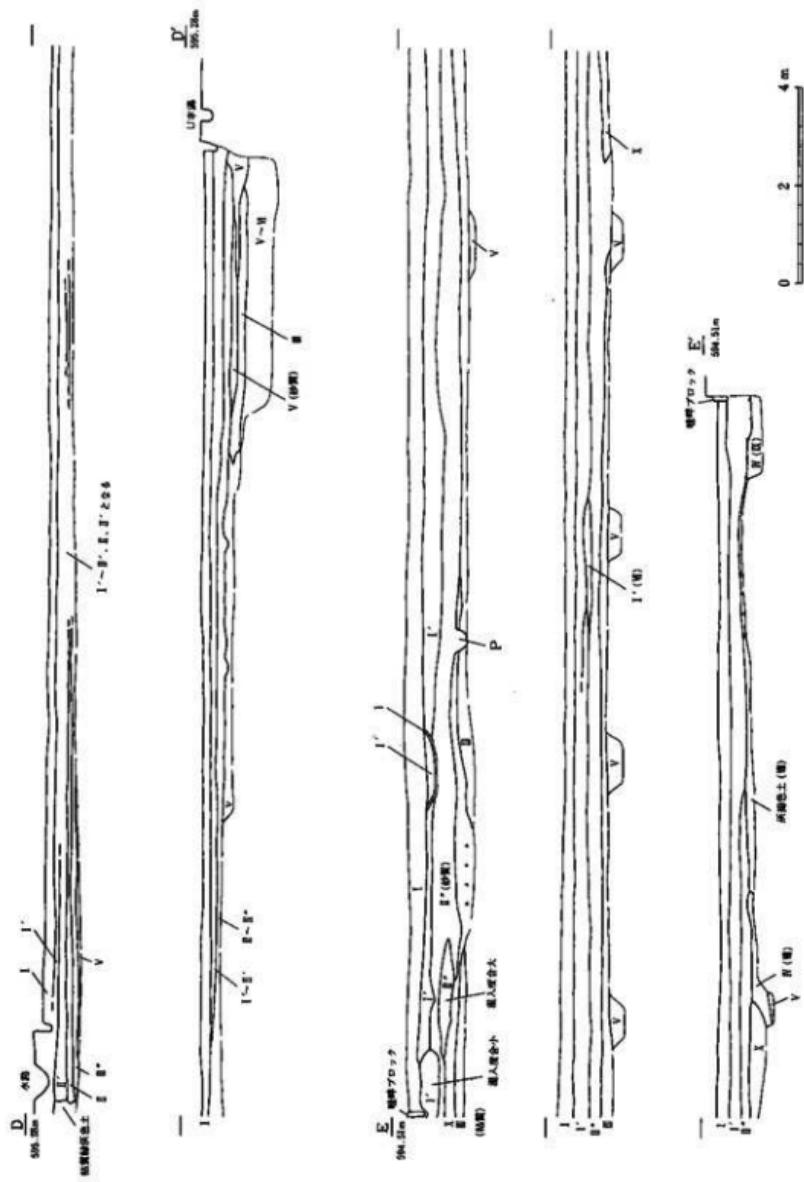
礫層の礫の種類は、硬砂岩・砂岩・チャート・砂岩粘板岩のホルンフェルス・礫岩・花こう岩・安山岩の円礫で、その中でも砂岩が多く、梓川系統のものであった。礫の大きさは最大径20×20cm、大多数は小・中礫からなっている。



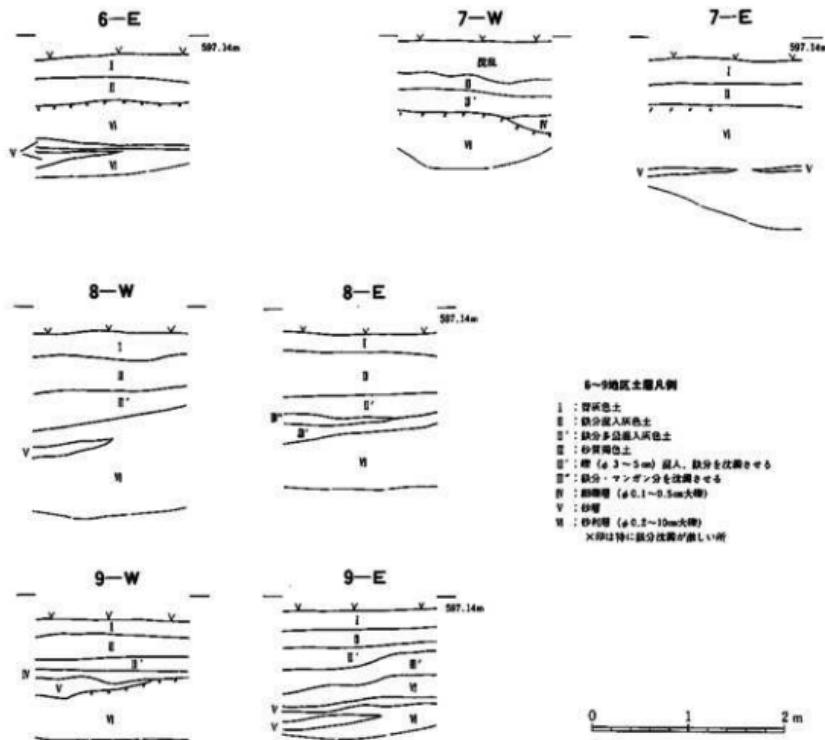
第4図 土層図 1



第5図 土層図 2



第6図 土層図 3



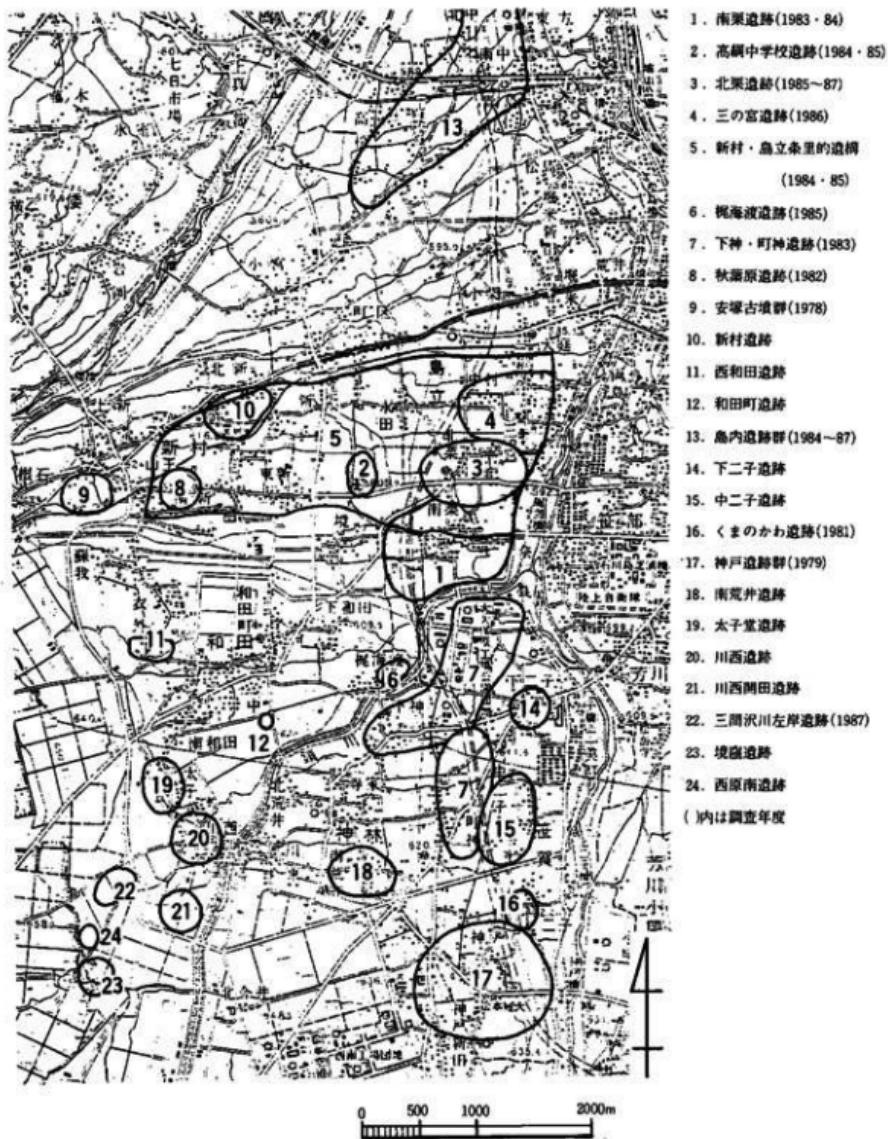
第7図 土層図 4

### 第3節 周辺遺跡

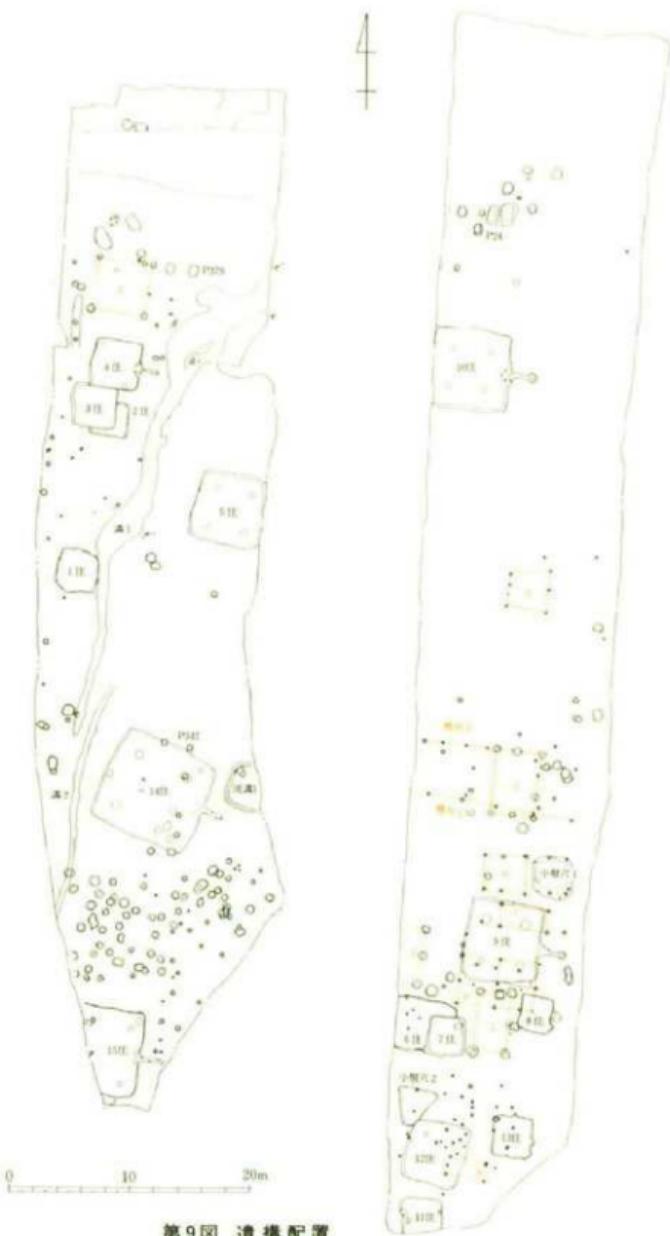
島立地区より西を望めば新村地区がある。ここは過去に調査され末期古墳で知られる秋葉原遺跡、安塚古墳群がある。又額川を越え南を望むと下神、町神、下二子、中二子遺跡（いずれも奈良～平安時代）と続き更にくまのかわ（縄文、奈良、平安時代）、神戸遺跡（縄文、平安時代）が奈良井川の左岸上に位置する。これらはすでに当市教育委員会、助長野県埋蔵文化財センターなどにより調査された遺跡である。又遠く南西部を望めば、川西開田（縄文、平安時代）、境窪遺跡（弥生、平安時代）などが立地する。この周辺では62年度に三間沢川左岸遺跡の調査が実施され、平安時代中期を中心とする住居址130、建物址11、土壙40、溝4などを検出、多量の縁釉陶器と銅製印鑑などの出土を見た。また範囲確認調査では住居址16などが確認され大規模な遺跡となる。尚この南西400mには縄文中期と平安時代の住居址が確認され西原南遺跡と命名されている。

島立地区内における62年度の調査では「新村島立条里的遺構III」として3箇所が調査された。永田地区は当2地区西隣で東西100m、南北30m余の範囲から奈良～平安時代住居址17、他に中世迄の土壙・ピットなどを検出した。永田地区の北西部堂沢添いには「永田屋敷」という小字名が残り、ここでは南北38m×東西33mの方形に廻る溝と池に囲まれた堅穴状遺構、土壙など25、ピット315を検出、これらは中世末～近世初頭に属するものと思われる。小柴地区は通称仁科街道添い松電上高地線手前西一帯である。耕作が浅く遺構は検出できなかった。東方島立小学校々舎東側のグランド造成に關わる調査では古墳時代後期4、平安時代後期3などの住居址と、建物址9、同時期から中世迄の堅穴状遺構と土壙を計15、溝3などの成果を得た。又この60m東側では奈良時代と平安時代の住居址3、ほかに堅穴状遺構、土壙など計7、ピット48、溝4を調査、更にその下部において土壙14、ピット82などを確認調査した。これらの中には縄文時代や古墳時代前期の遺物も見えている。

又61年度に調査した三の宮遺跡では平安時代住居址2、建物址35、中世から近世の堅穴状遺構と土壙計201、ほかに墓址、溝などを調査、更にその下部からは弥生時代末期の住居址12、建物址3、土壙34、溝などを検出し今回報告している。尚この東の長野自動車道部分は埋文センターが三の宮として、以下南へ北栗、南栗として整理中である。膨大な遺構と遺物を得ており報告が待たれる。



第8図 周辺造跡



第9図 遺構配置

## 第3章 調査結果

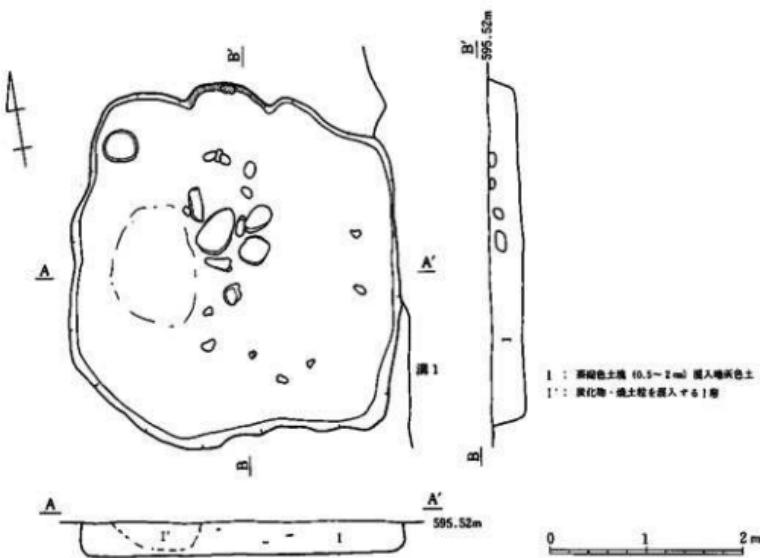
### 第1節 調査の概要

この調査は用地の買収と排土置場等の関係で2年度に亘り実施されたものである。用地内には市道、農道、水路がありこの部分を除外しての調査のため各地区が離れている。南側は長野自動車道の側道から分岐する。ここを1地区とし、松電上高地線際に至る9地区迄順次番号を付した。

面積でみると初年度では1地区1346.7、2地区1534.0、3地区1450.8、4地区552.1、5地区888.7m<sup>2</sup>計5472.3m<sup>2</sup>。次年度には6地区110.6、7地区793.7、8地区253.1、9地区237.5m<sup>2</sup>計1394.9m<sup>2</sup>を調査することができた。遺構検出面は総じて鉄分の沈殿する褐色土面直下乃至それよりやや深いレベルである。1地区から5地区南半部までは耕作土から地山の疊層まで自然堆積が厚いが、5地区北端部以北については耕土が浅く重機で削ると一面疊層となっている。これは遺構にも関連しており、ほとんどの遺構は1地区と2地区的南半部に集中する。これ以外では5地区西際トレンチに於てピットと灰釉陶器を若干、3地区で炭化物を少し見たにすぎず、6地区以北については9地区で磨耗した土師器片3点を見たのみでありこれを除くと全く遺物を見ていない。

発掘成果としては、住居址15、小堅穴2、建物址9、櫛列2、溝3、周溝1などで他にも本来土壤といわれる規模のものも含めてのピット約321基などであった。これらを時期的にみると住居址は6基が古墳時代末期から奈良時代後期に属し、暫く時間を経て平安時代前半から中期頃に9基が存在する。又建物址は4基が奈良時代中期頃、2基が櫛列1基を含め平安時代中期以降、残る2基と櫛列も後者に近い時期と考えている。遺物には各種の土師器、須恵器等の土器があるが、14、15号住居址からの平瓶、甕などは特記すべきものであろう。又鉄器としては斧、刀子など、ほかには土鍤が1点見られる。

尚3地区南部の東方約90mの地点に狭い範囲で「新村島立条里的遺構II」としてここと併行して調査を行なった。その成果は平安時代前期の住居址2、中世の墓址1、土壤・ピット12、溝6などである。又このうち2地区の西側一帯を「新村島立条里的遺構III」として調査している。この成果は前節周辺遺跡で触れている。



第10図 第1号住居址

## 第2節 遺構

### 1、住居址

#### 第1号住居址

1地区中央部やや西寄りに位置する住居址である。検出面は鉄分を沈殿した褐色土中で、東には砂礫を覆土とする溝1が南から北へと通するが本址東壁の一部がこれを破壊している。覆土は周囲の鉄分を沈殿させた褐色土とは異なりやや灰色を呈し非常に明瞭で、上層から中央部床面上にかけて計10余個の小児頭大~大人一人がやっと抱えられる程の川原石が存在し、その西側には焼土と炭化物が散在して見られた。規模は東西3.45m・南北3.75mを測る。プランはかなり不整な方形を呈し、主軸方向はN-11°-Eを示す。壁はやや堅さがあり覆土が剥落するように検出できた。又床面も周囲では少し軟弱になるものの、中央部からカマド内にかけては非常に堅い。遺物はほとんどがカマド内から中央部にかけて出土、前述した石の下に埋されているものも見える。又北西隅には大きさ37×33cmの平石が床面上に設置してあった。

カマドは北壁中央部に位置する。特に施設は見当らず壁の一部を内側に掘り残し小規模な袖とし、

又中央部を掘り凹め燃焼室としている。焼土はこの壁面に見られたのみである。ピットは全く検出できなかった。

遺物は土器（土師器坏・塊・皿・甕・小形甕、須恵器坏・蓋・壺・甕）が出土しており、これらの土器より見て本址は南栗XII期の遺構と考えられる。

#### 第2号住居址

1地区中央やや北西寄りにあり3号住居址に大きく切られている。プランは方形で規模は東西3.20m・南北2.85mを測る。検出面から床面迄は10~15cm余と浅く壁、床面とも起伏が目立ち歎弱である。遺物はほんの僅かで覆土中に散見する程度、焼土あるいはカマド、柱穴などは全く見当らない。覆土は灰色土であるが白色が強くこの土色は他の住居址では見られないものであった。以上の様子から見ると本址は住居址として扱ったが、堅穴状遺構として分類する方が妥当であろう。

遺物は土器（土師器坏・甕、須恵器坏・壺・甕）があるが量的に少ない。切合関係よりみて南栗IX期以前の遺構と考える。

#### 第3号住居址

本址は南東部で大きく2号住居址を切り、北部を4号住居址に切られている。規模は東西3.82m・南北3.50~3.60mで方形を呈する。検出面から床面迄は50~60cmを測る。北西隅は周囲の土が崩れ込んだものと考える。又南壁の一部に小規模な突出があり入口としての施設を考え事ができる。床面は自然堆積の砂礫質土上にあり全く堅さは見られない。壁も同様であった。覆土中には上層から下層迄拳大~小児頭大の礫が、又もう少し大きな人頭大~馬頭大程の礫は床面上に迄達している。後者のものは焼土をとり巻くようにしてあるが埋没時の所産と考える。遺物は覆土中に一様に見え、焼土内とその周辺からは土師器甕が特に多く出土した。

カマドは床面上に多量に検出した焼土から北壁中央部に存在し、後述の4号住居址により壊されたものと推定。主軸方向はN-6°-Eを測る。

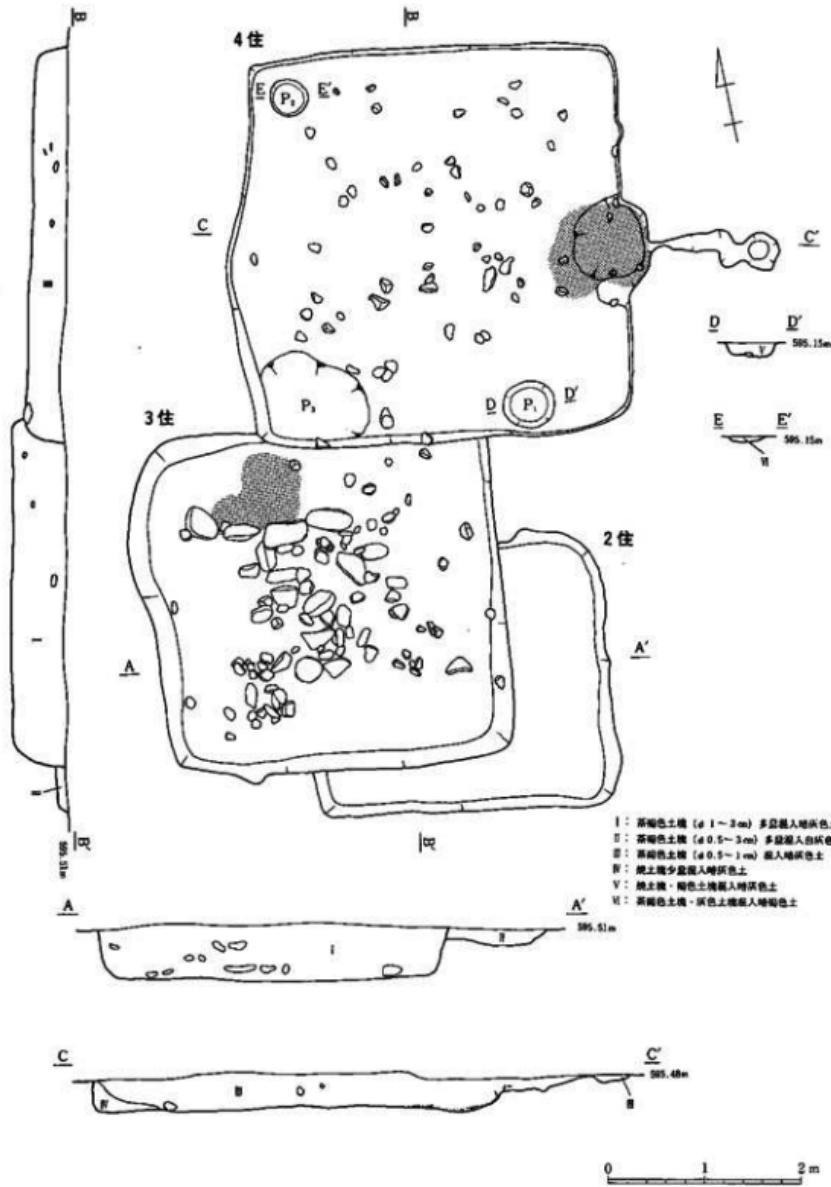
遺物は土器のみ見られ、器種は土師器坏・塊・皿・鉢・甕、須恵器坏・壺があり、南栗IX期の特徴を示している。

#### 第4号住居址

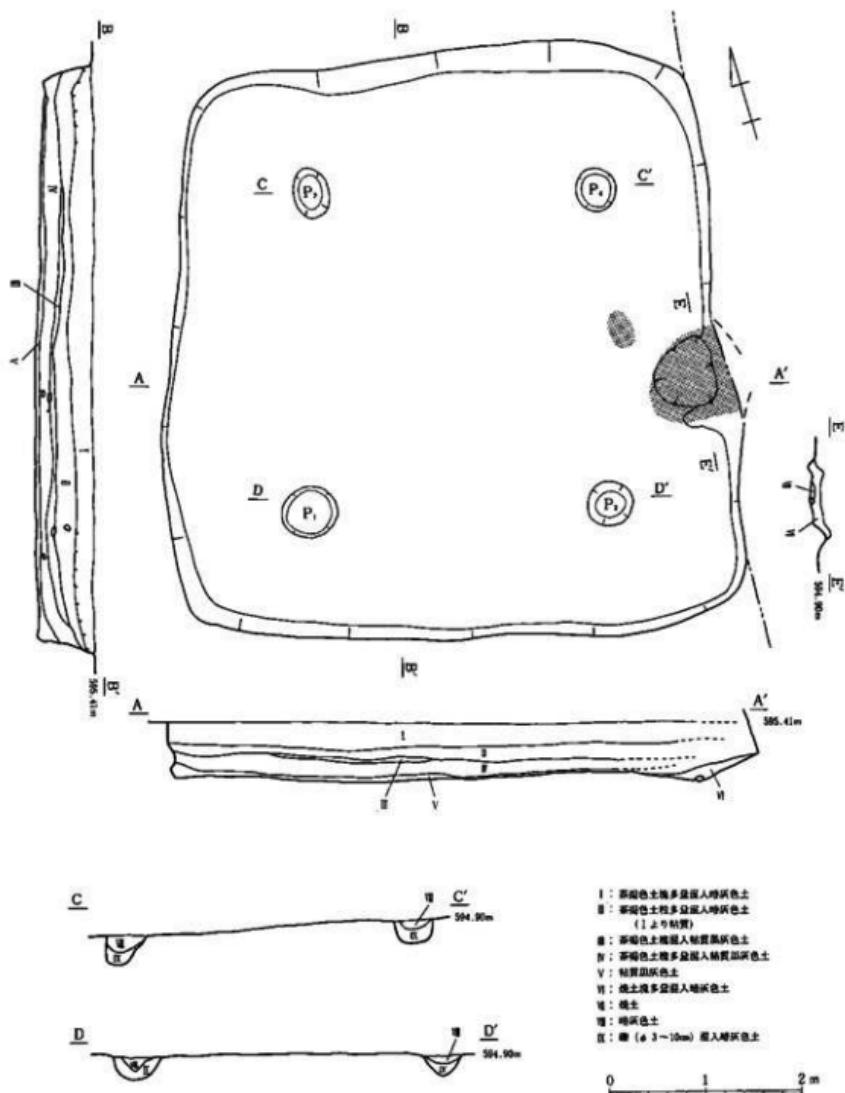
本址は表土置場の関係で北壁部分を翌年に調査することとなった住居である。方形を呈し規模は東西4.15m・南北4.06m、主軸方向はN-98°-Eを示す。壁高は33cmで直状を呈し西壁は緩やかに外側へ膨らむ。床面は鉄分が沈殿し部分的に堅い所が見られた。覆土は3号住居址同様暗い灰色土であるが重金属の沈殿が疎となりどうにか切合をつかむ事ができる。又拳大~小児頭大の礫が全体的に散在した。

カマドは曲りくねった長い煙道(135cm)をもち南側には土質の袖が設けられている。中央部は床面より約5cm程浅く掘り凹められここを中心として焼土も存在する。

ピットは3基ありP<sub>1</sub>(53×48×14cm)、P<sub>2</sub>(39×37×6cm)は深さからしていずれも柱穴とは



第11図 第2・3・4号住居址



第12図 第5号住居址

考え難い。又P<sub>3</sub>(122×84×10cm)、は本址に先行する3号住居址のカマドが位置したと考えられる所で、焼土も見られることからその施設を破壊した痕跡なのかも知れない。遺物は少ないながらもカマド周辺から比較的まとまって出土した。

これらは土器のみ見られ、それより見て本址は南栗IX期の遺構と考える。

#### 第5号住居址

1地区中央東部に位置する。西に検出した1～4号住居址が容易にプランを確認できたのに比べ、同レベルの検出面は本址にとって約10cm程高すぎ、手作業により削平しようやく本址を検出した。覆土は暗灰色及びそれより黒い灰色土で、覆土上層に鉄分が多く沈澱する。この状態は後述する9、10号住居址も同様であった。平面形は隅丸台形様で、規模は東西6.00m・南北6.10mを測り、主軸方向はN-105°-Eを示す。壁はやや緩やかな北部を除き直状を呈し、その高さも50cm(北壁)、60cmと高い。床面は自然堆積の中小礫上にあり鉄分が沈澱して壁際を除き堅く良好で特に東半部は顯著である。覆土最下層は粘質の黒灰色土が約5cm程一様に被っていた。又他の住居址に見られるような大小の礫の投棄は全く見られず、遺物の少ないと合せ特記すべきことと見える。遺物は深い覆土であるにもかかわらず量的に少なく、床面上、カマド及びその周囲を見ても同様に少ない。

カマドは東壁中央やや南寄りに検出したが用地外へ伸びており、周囲の床面よりやや掘り凹めた燃焼室と南袖を見るにすぎないが、恐らく長い煙道を有するものと推測する。

ピットは4隅に位置する。P<sub>1</sub>(59×54×23cm)、P<sub>2</sub>(50×48×20cm)、P<sub>3</sub>(53×37×30cm)、P<sub>4</sub>(45×43×24cm)と小形で浅いがこれを主柱穴と考える。

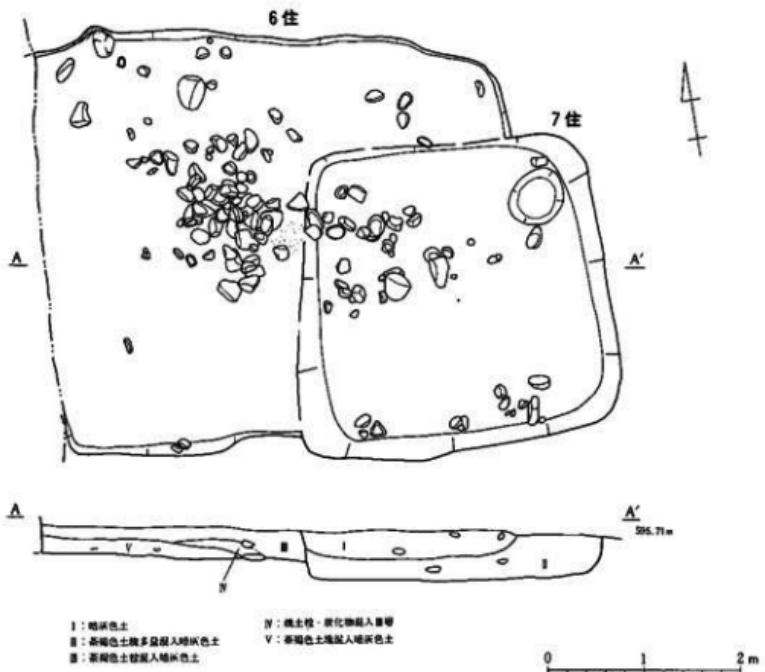
遺物は土師器・須恵器・鉄製品があり、土器は南栗IV期の特徴を示している。

#### 第6号住居址

2地区南側に位置し東部を7号住居址に切られている。検出面は鉄分を沈澱する褐色土である。本址西側は用地外へ伸びているが僅かで既に南西隅が見えている。規模は南北4.40mで東西は5.10m程と推定、不整な長方形を呈する。主軸方向はN-0～5°-Eを示す。中央部には覆土中層から床面上にかけて拳大～小児頭大の礫が混入し同レベルに遺物も存在する。壁は直状をなし30cm前後の高さを測る。床面は自然堆積上にあり鉄分が沈澱、中央からカマド部にかけて堅く良好である。

カマドは北壁西隅に近く、壁の一部を小さく突出させ内側を床面より5cm程凹めたピットを設けている。焼土も僅かで奥壁部に若干見られる程度である。

遺物は土器のみ見られ、土師器・須恵器・灰釉陶器がある。量が少なく時期の決定は困難であるが、南栗X～XI期の住居と考えられる。



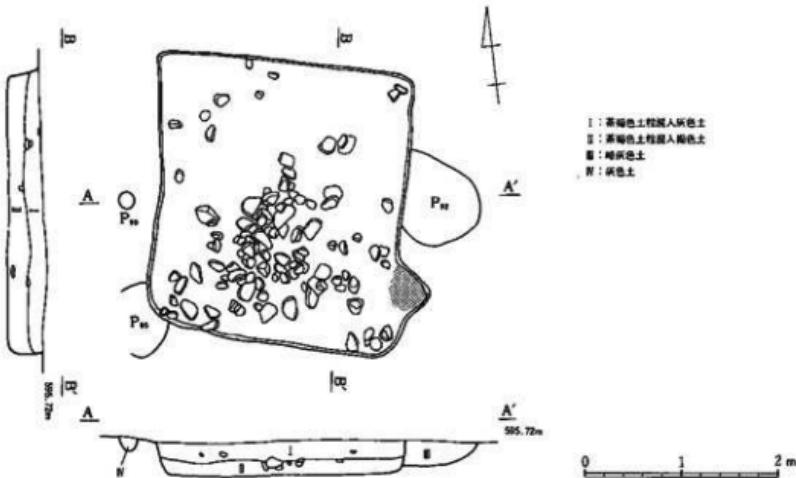
第13図 第6・7号住居址

#### 第7号住居址

6号住居址を切り検出された。この両者の覆土は良く似ており、切合い部分で土層を観察、両者の床面を追ってプランを確定した。規模は東西3.35m・南北3.15mと小形で平面形は隅丸台形様を呈する。覆土中にはやはり礫を含み南壁際と、中央から西側にかけてやや集中する。床面は6号住居址より10~15cm程低く自然堆積の小・中礫上で特に堅くない。

カマドは6号住居址覆土中に少量の焼土を認めている西壁中央やや北寄り外部で、これをカマドと仮定すると、主軸方向はN-87°-Wを示そう。柱穴としては東北隅に62×52×15cmのビットを検出したが主柱穴としては認め難い。

遺物は土器の他に鉄器（刀子1・不明品1）が出土している。土器は土師器（杯・碗・短頸壺・甕・小形甕、須恵器杯・壺・甕、灰釉陶器、綠釉陶器）が出土しており、南東XII期の特徴を示す。



第14図 第8号住居址

#### 第8号住居址

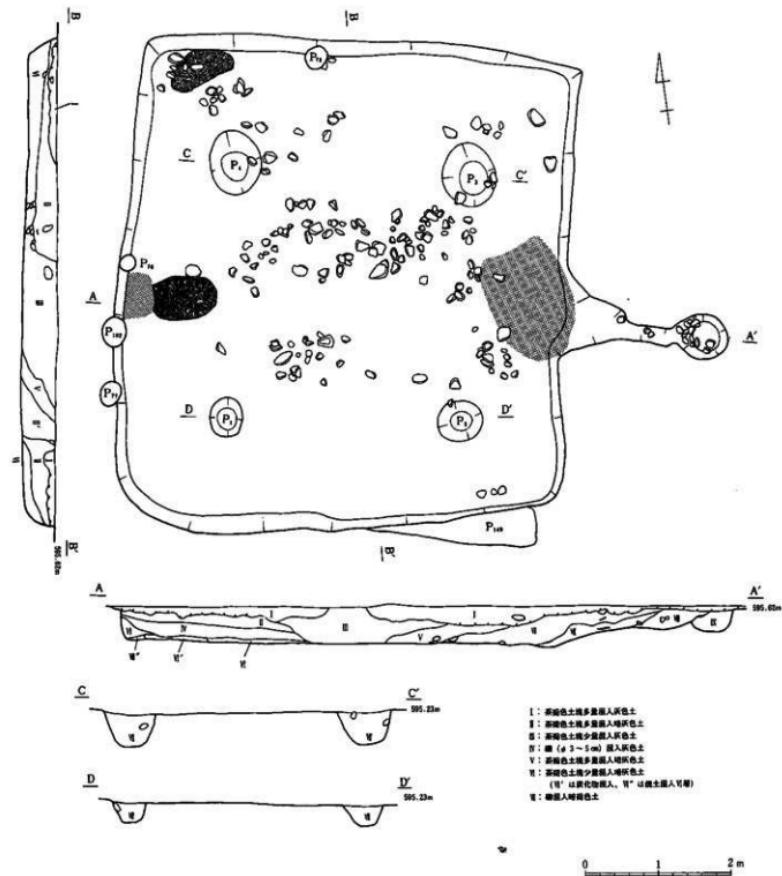
2地区南側に位置する。方形で規模は東西2.60m・南北2.88m。これは今回調査した住居址のうちで一番小形のものである。覆土は上層が灰色土、下層は褐色土となり、南、東壁側はプランがつかみにくくサブトレーンチを入れて確認した。切合は東側にP<sub>ss</sub>、南西隅にP<sub>ss</sub>があり両者共本址に先行、埋没後建物址8の9本組のピットのうち1基が覆土中に位置した。主軸方向はN-102°-Eを示す。壁は直状をなし壁高は32~35cmを測る。床面は砂質土上にあり堅さは全く見られない。又中央部から南側にかけて拳大~小兒頭大の礫が覆土中層に混入し遺物も多くがこれらの礫と共に出土した。

カマドは東壁南寄りに位置する。壁の一部を突出させただけのもので6号住居址のそれと形状が良く似ている。焼土も狭い範囲にまとまり検出できた。

遺物は土師器(杯・壺・短頸壺・甕・小形甕)、須恵器(壺・甕)、灰釉陶器(碗・皿・長頸瓶)、があり、これらよりみて本址は南栗XII期の構造と考えられる。

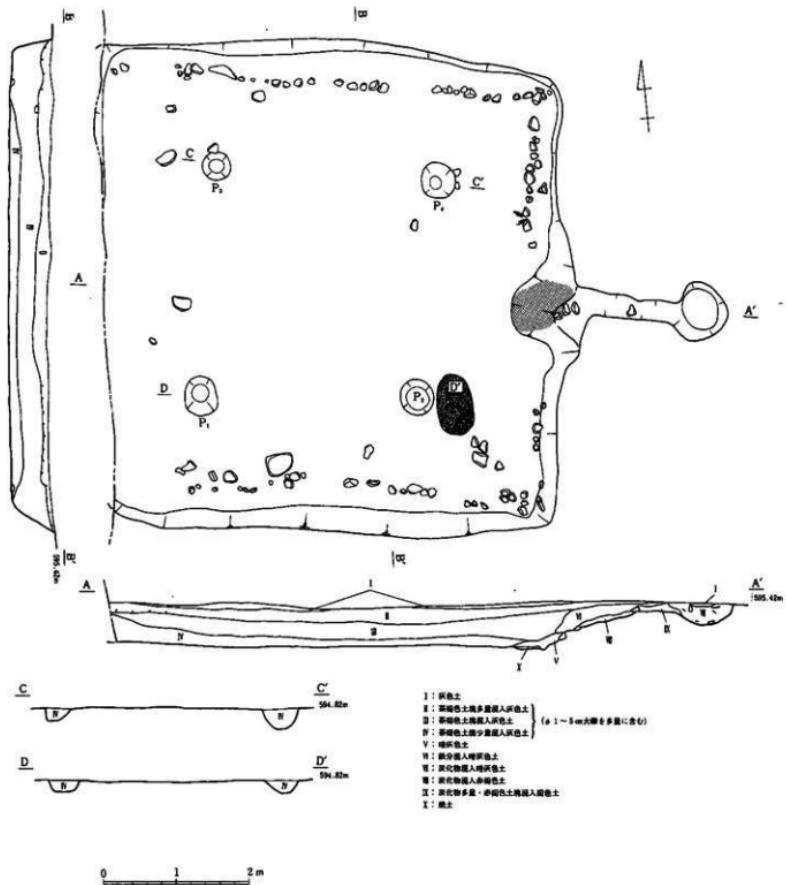
#### 第9号住居址

2地区南側に位置する。周囲の6~8住、小窓穴の検出面は本址にとってはレベルが高すぎ手作業で5~10cm削平しプランの全容を捉えている。又南側には長方形のP<sub>ss</sub>を切り本址埋没後、建物址7、8のピットを含め計10基が存在した。規模は東西6.12m・南北6.67mで方形を呈し、主軸方向はN-99°-Eを示す。覆土は灰色土と暗灰色土であるが、両者の間には鉄分が多く沈澱し堅くなっている。更に拳大~小兒頭大の礫が暗灰色土中に混在し掘り下げ作業は大変であった。下層に至っては西壁際で焼土と炭化物、北壁際にも炭化物を検出し、この炭化物は薬様のものであっ



第15図 第9号住居址





第16図 第10号住居址



た。壁は比較的緩やかな立ち上がりで壁高は40cm程、床面は自然堆積の砂利層直上にあり中央部が茶褐色に変じて堅く良好な状態である。

カマドは煙出しのピットを含め奥壁から2.25mと長い煙道が見られる。袖はなく、焼土は床面上焚口周囲に薄く広がる程度でその密度は低い。

ピットは南側にP<sub>1</sub>(53×45×29cm)、P<sub>2</sub>(62×55×29cm)、北側にP<sub>3</sub>(87×73×46cm)、P<sub>4</sub>(88×70×47cm)の4基があり、その覆土中に拳大の多量の礫を持っている。南側2基と北側2基とでは規模が異なるが、この4基を主柱穴と考える。

遺物は土器が豊富に出土しており、他に不明鉄器が1点ある。土器は土師器・須恵器が多く、南栗V期の様相を示している。

#### 第10号住居址

2地区中央北寄りに位置する。西側が用地外へ伸びるが北西隅をほぼ検出、その結果規模は東西6.40m・南北6.67m、主軸方向はN-98°-Eを示し方形を呈すと思われる。遺構周囲は礫を混入する褐色土で覆土はやや暗い灰色を示し上層部は軟らかであるが、鉄分を沈澱し鬼板状になっている所では土が堅くしまり9住同様途中から検出には苦労した。壁は南半部が緩やかで北半部は急傾斜となり壁高は54~58cmと高い。床面は自然礫上にあり鉄分が沈澱して堅く良好、又壁際に拳大~小児頭大の礫が約80コ並び廻っている。これらの石は周囲に多く見られる堆積岩がほとんどで半分程度床面に埋められ安定している。尚この配石外では堅さは認められない。遺物は大部分が覆土上~中層より出土している。

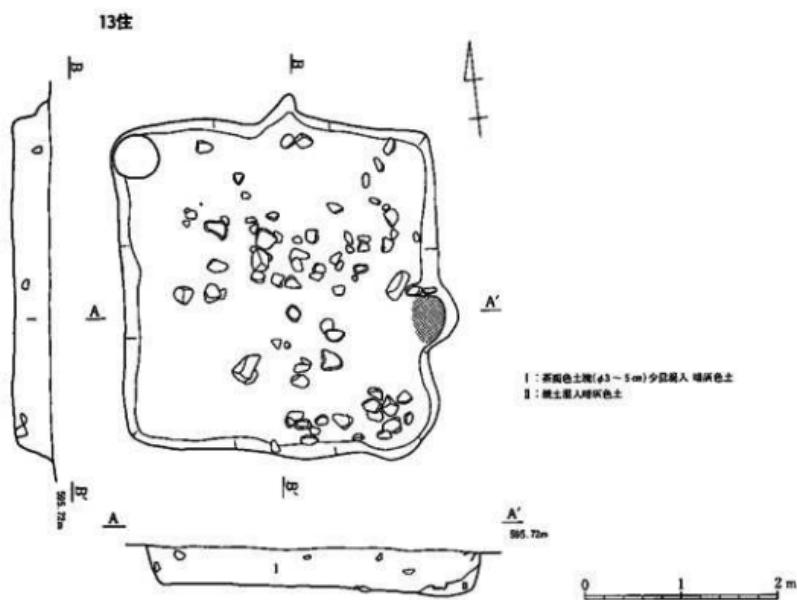
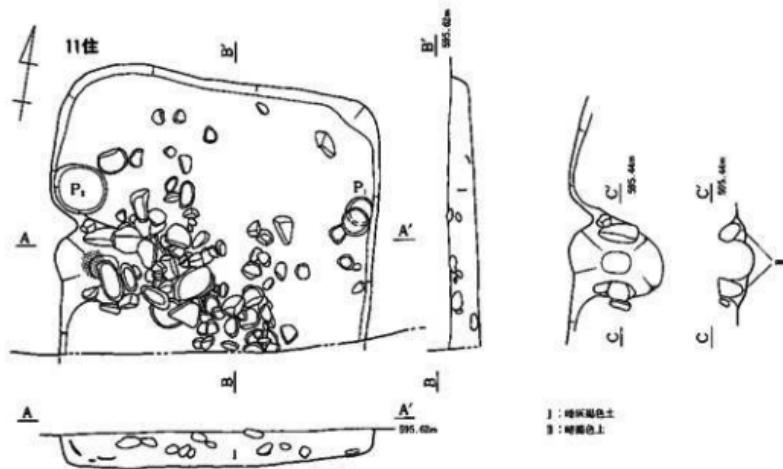
カマドは袖もなく長い煙道と煙出し用のピットを設けている。燃焼部は床を少し掘り凹め、焼土も狭い範囲にとどまる。

ピットはP<sub>1</sub>(54×43×16cm)、P<sub>2</sub>(49×46×17cm)、P<sub>3</sub>(39×38×17cm)、P<sub>4</sub>(52×48×28cm)があり小形でさほど深くもないが、位置からして主柱穴と考えるのが妥当であろう。

遺物は土師器を主体として他に須恵器がある。これらの様相より本址は南栗V期の遺構と考えられる。

#### 第11号住居址

2地区南端にあり市道を隔てて1地区となる。南側四半部が調査できなかったが規模は東西3.42m・南北3.50m程度と推測する。主軸方向はN-96°-Wを示す。検出面は鉄分を沈澱するレベルよりやや低いマンガン分が多量に集積する褐色の土(茶褐色土)で、暗灰色土を覆土としている。この覆土中にはカマド前部から内側にかけ人頭大前後の大きさの礫が上層から下層にわたり多量に混入する。これらの礫は他の住居址に投入されたものよりやや大ぶりなもので床面迄は達していない。壁は拳大程度の自然礫を露出させており壁高は18cm(北側)、25cm(東側)、30cm(西側)を測る。床面は鉄分の沈澱からそれと分かる程度で堅さは見られず、壁際から中央部にかけ緩やかに傾斜している。遺物はカマド内にやや多く見ることができる。



第17図 第11・13号住居址

カマドは西壁に設けられ壁の一部を掘り残し、土で石を固めた石芯カマドである。中央部は周囲より15cm程低く掘り凹められ、少ないながら焼土も検出した。

ピットは東にP<sub>1</sub>(31×28×36cm)とカマド右袖際のP<sub>2</sub>(55×48×22cm)がある。両者とも拳大の礫が入り住居址の覆土と同色の土を充填させていた。

遺物は土器類(土師器・須恵器・灰釉陶器)のみあり、これらは南朝XI期に属している。

#### 第13号住居址

2地区南東部にあり、検出面は11、12号住居址と同様茶褐色土面であるが、それより10cm程高いレベルで本址覆土中にピット数基を検出している。規模は東西3.20m・南北3.40m、平面形は方形を呈し北壁中央部を小さく突出させ、南東隅を若干膨らませている。主軸方向はN-99°-Eを示す。壁は直状に高ち上がり壁高は37~39cmを測る。又北壁の突出部は小さな階段状となっている。床面は自然礫直上にあり平坦で鉄分が沈澱し、中央部では非常に堅くなっている。覆土中には西壁際を除き拳大~人頭大の礫が上層から床面上に至るまで混在している。

カマドは東壁中央やや南寄りに位置する。壁の一部を掘り込みその左隣には長さ15cm程の石2ヶを置き袖としている。焼土は狭い範囲ではあるが厚く堆積し、多量の破損した土器類がこの中及び周囲から出土した。又本址に伴なうピットは全く検出できなかった。

遺物は土器(土師器杯・壺・甕・小形甕・須恵器杯・壺・甕・灰釉陶器皿)があり、南朝XI期の新しい段階に属しており、本址の所属時期を示している。

#### 第12号住居址

2地区南部に位置する。プラン検出時建物址9を含め13基の小ピットが本址覆土上に存在した。又北西隅には小窓穴2が重複する。土色は両者共に暗い灰色土で新旧は分からぬが床面は本址の方が低い。規模は東西5.08m・南北5.16mで隅丸方形を呈し、主軸方向はN-102°-Eを示す。覆土中にはやや大きめの拳大礫が非常に多く、これらは住居址中央の床面上と覆土上部に少量、その周り覆土中から上層にかけ密となる状態で、自然埋没時短期間のうちに投入されたものと考える。壁高は34~42cmを測りやや斜めに立ち上がる。床面は自然礫直上にあるが特に堅さもなく辛うじて分かる程度である。遺物は礫と共に小片が多く西壁中央隣より出土した土器甕が少ない床面上遺物である。

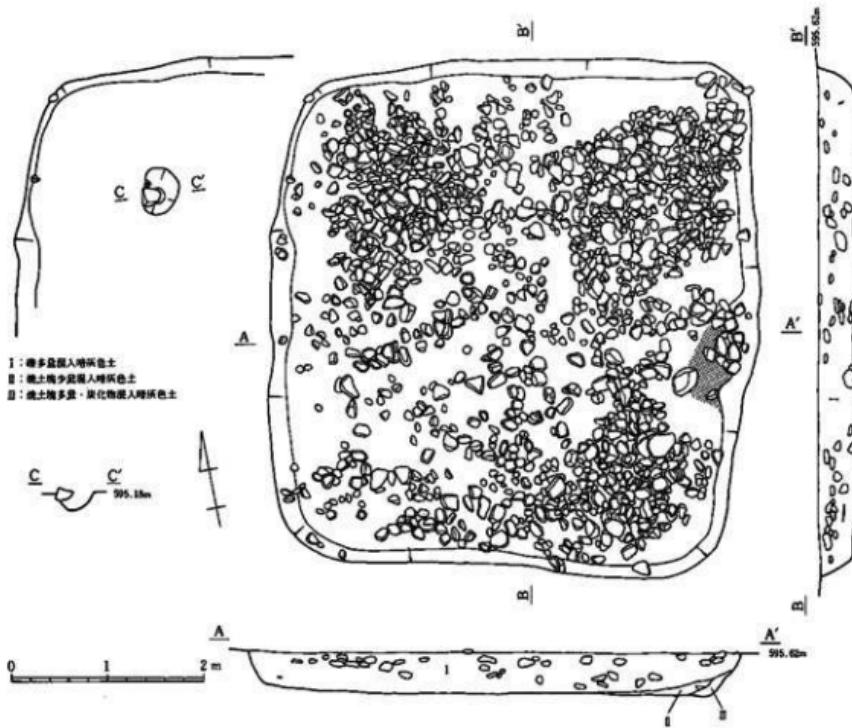
カマドは東壁ほぼ中央にあり小規模な両袖をもち焼土は狭い範囲ながら多い。

ピットは48×36×18cmの1基がある。4本組のうちの1つならば良い位置であるが他には検出できなかった。

遺物は土器(土師器・須恵器)、鉄器(刀子)があり、土器は南朝IV期の特徴を示している。

#### 第14号住居址

1地区中央やや南寄りに位置する。東西8.48m・南北8.16mとその規模が今回の調査で最大のものである。前年に鉄分沈澱面で検出したが高すぎプランがつかめず翌年更に15cm程検出面を下げ

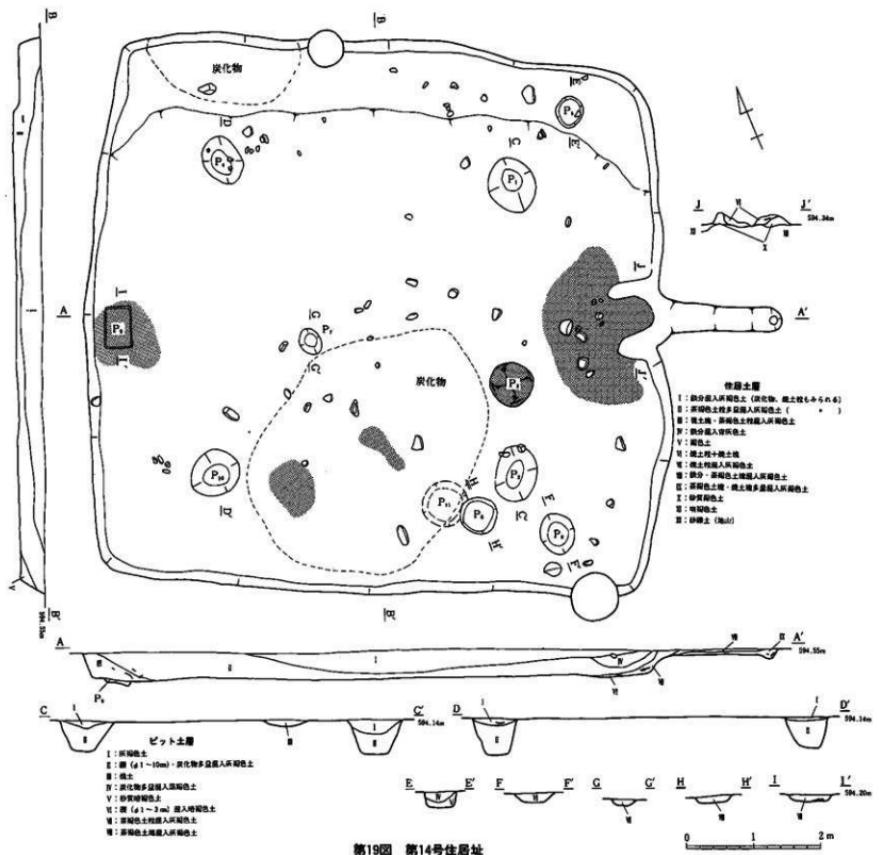


第18図 第12号住居址

確認した遺構である。覆土上層から炭化物や部分的に焼土粒が見え、1~5 cm 大小礫がやや黒っぽい灰色土に含まれていた。遺構は方形を呈し、主軸方向はN-113°-Eを示す。尚 P<sub>343</sub>、P<sub>350</sub>は本址より新しいものである。壁高は35~37cm、北側では33cmを測る。床面は自然堆積した小・中疊層より10cm 程高いレベルにあり灰褐色を呈する。中央部が厚く周囲は軟弱である。又北壁際は8 cm 程高くベット状をなしている。

カマドは長い煙道と低い土製の袖をもつ。焼土は袖部を越え広範囲に広がり、P<sub>1</sub>(66×64×9cm)にはカマドから掘り出したと思われる焼土を充填していた。

ピットはP<sub>1</sub>(84×70×45cm)、P<sub>2</sub>(81×60×51cm)、P<sub>3</sub>(73×54×54cm)を検出、更に床面に複数のトレンチを入れP<sub>10</sub>(77×66×45cm)を認めこれら4基を主柱穴としてとらえた。又他にもP<sub>5</sub>~P<sub>9</sub>まで6基、床面下にはP<sub>11</sub>を検出したがいずれも浅くて柱穴としてはふさわしくない。唯長方形のP<sub>6</sub>(62×39×11cm)は位置からみて入口施設の為のピットと考える。遺物は覆土上層に多く、



第19圖 第14号住居址



床面にはカマド部分、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>内に若干みられる程度である。尚北壁際炭化物は覆土上層に、中央やや南寄りに広がった炭化物と焼土、P<sub>1</sub>上の焼土等は同じく中層から下層に存在し、本址埋没途時に残された痕跡であろう。

遺物は多量の土師器・須恵器に加え、鉄器（斧・刀子・針・不明品）の出土が目立っている。また唯一土鍤が出土している。本址は土器よりみて南栗II期の住居と考えられる。

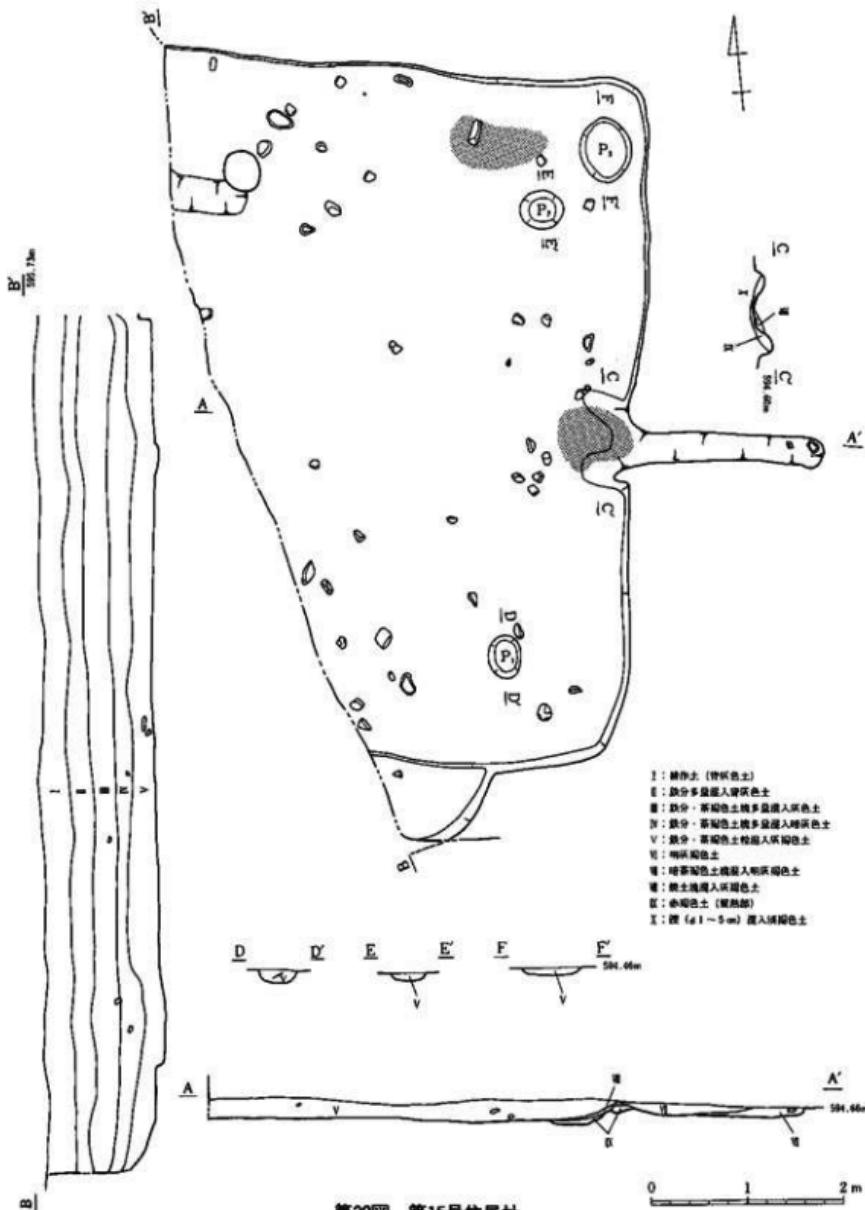
#### 第15号住居址

1 地区南端にあり一部用地外へかかる為、その7割程を検出した遺構である。検出面は砂質茶褐色土で覆土は灰色が強く明瞭にプランを捉えることができた。規模は南北7.12m、東西はそれよりやや大きくなろう。方形であるが南側に半円形の突出部が付属する。主軸方向はN-98°-E程となる。壁は低く北側13cm、東側20cmを測る。床面は中央部が黄褐色を呈し非常に良好、南側の張り出しは付近の床面より7 cm 程高く段をなす。又北壁やや内側に巾35cm、深さ4 cm の凹みがあり更に西に伸びている。遺物はカマドの焼土周辺、煙出し部分、カマドから南東隅にかけての床面上に主たるものがある。

カマドは2 m 以上の長い煙道と土製の袖をもち焼土も見られる。

ピットはP<sub>1</sub> (44×34×13cm)、P<sub>2</sub> (45×39×8 cm)、P<sub>3</sub> (67×54×7 cm) があり P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>は柱穴として格好の位置にあるが浅いものである。

遺物は土師器・須恵器・鉄器（刀子・不明品）が出土しており、南栗III期の遺構と考えられる。



第20図 第15号住居址

## 2、小堅穴

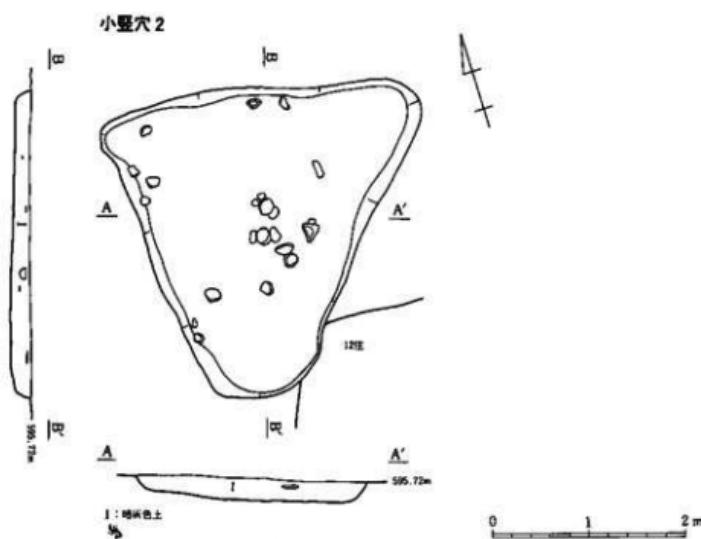
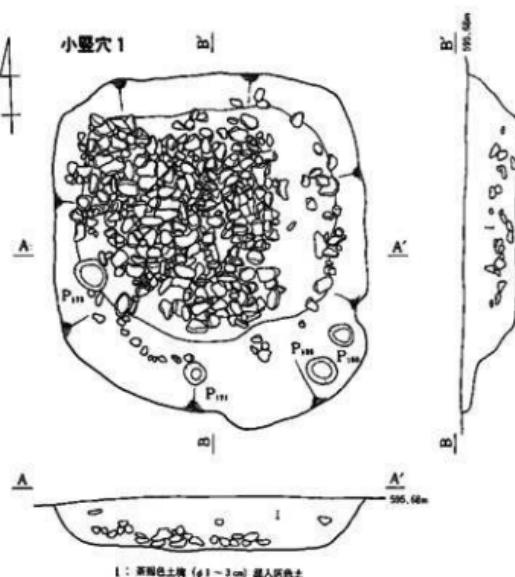
### 小堅穴 1

2 地区南部北東寄りに位置する。本址検出面は南接する9号住居址より約30cm程高いレベルで極めて明瞭にプランを捉えることができた。東西3.24m・南北3.63mを測り13号住居址とはほぼ同じ規模で隅丸方形様を呈するが、南東隅が外側へ張る。覆土は単層でやや白い灰色土、2号住居址としたものに良く似る。その中層から床面上迄礫が多量に混入する。これは12号住居址に投入せられたものよりやや大きめの礫が主体となり粗密程度もほぼ同じである。壁高は46~56cmと高いが住居址よりは緩やかに落ち南東隅はテラス状のものが設けられ入口部と考えることができる。床面は自然堆積の礫上にあり堅さは見られないが、壁の立ち上がり部分、北東~東・南・南西部迄石を置き廻らせてている。遺物は覆土の礫中より極小片がわずか得られたのみである。

ピットは壁中及び床から立ち上がる部分に、覆土と同様の土を含むものが4基ある。これらは或いは本址に先行するものかも知れない。このうちP<sub>17</sub>は斜めに穿たれていた。

### 小堅穴 2

2 地区南部に位置し南側では12号住居址の隅を切る。平面形は一辺が3.3m程の長さの三角形を呈する堅穴である。検出面は12号住居址と同様茶褐色土層中であり、暗灰色土を覆土とするがプランは不明瞭なものであった。壁高は16~21cmと低く、床面に堅さは全く見られない。覆土上層から床面にかけて拳大~小兒頭大の石が混入しこのうち10余個が住居址中央部にまとまっている。埋没時の転入物であろう。遺物は住居址と同程度の密度であり床面にも見ることができる。尚焼土、ピット等は全く検出されていない。



第21図 小竪穴 1・2

### 3、建物址、櫛列

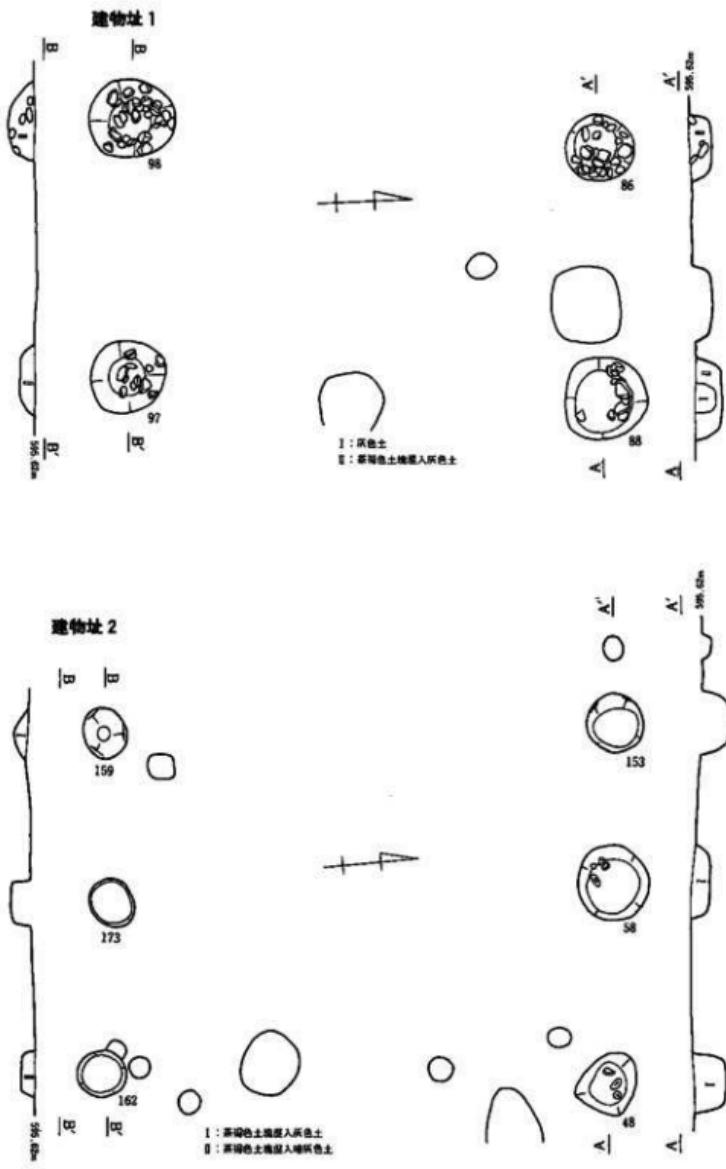
今回の調査で検出された建物址は1地区1、2地区8と計9棟でその他に櫛列が2基2地区にある。9棟の建物址は規模で分類すると1×1間が4棟(1、4、7、9)、1×2間が1棟(2)、2×1間が1棟(6)、2×2間が1棟(8)であり、3は東側列を認めるのみで西に続くと思われるがこれが梁か桁かは分らない。5は付近にもう1基ピットがあるがこの7基が覆土を全く一にしていた為組合せを考えたものである。東・西に梁に相当しよう。3(2)×1間と理解する。

構造でみると8が総柱式で他はすべて側柱式である。

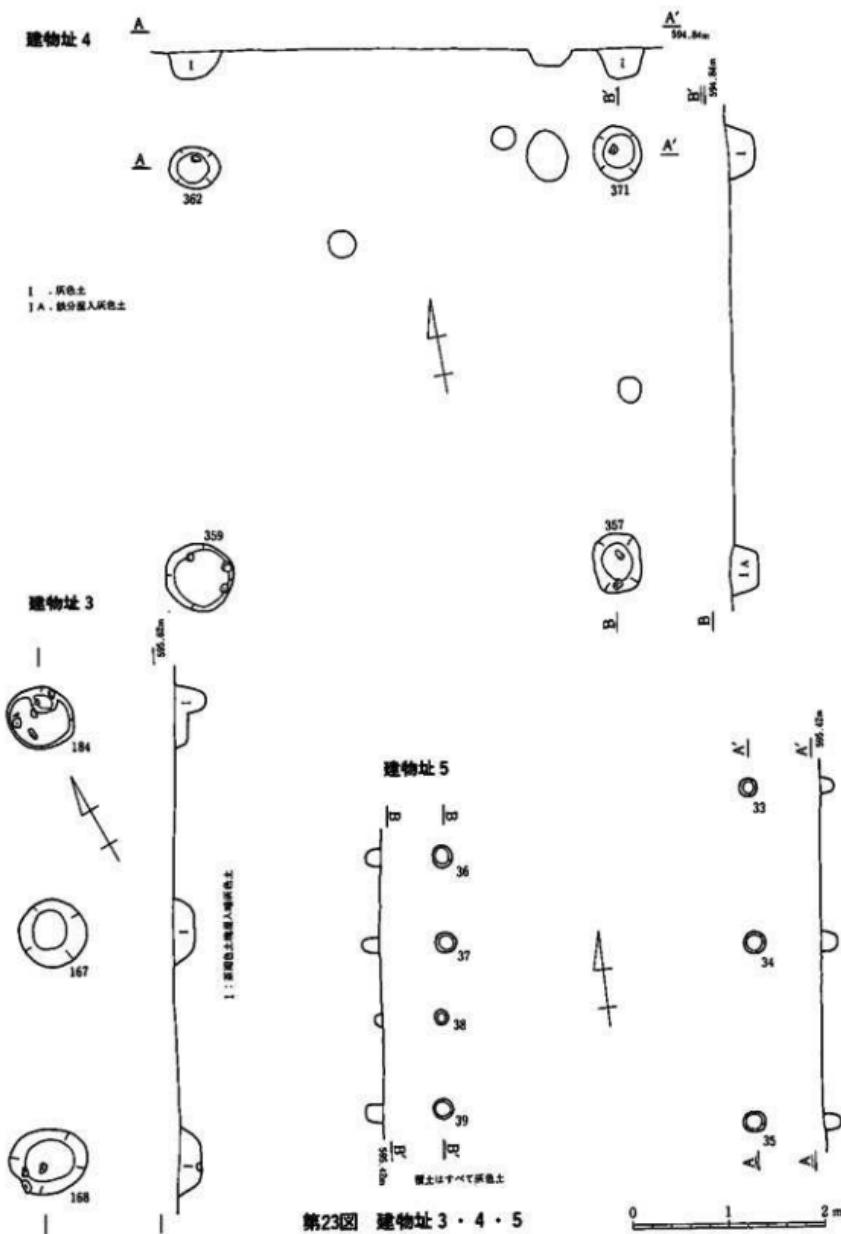
個々のピット規模についてみると建物址1～4が直径85～50cmの規模をもつ大形のものに対し、5～9、櫛列などは直径28～15cm前後とかなり小形のものである。又1、2は梁を南北に向け東西に梁を向けた5～9とは棟方向が全く異なる。検出時の所見をみるとこの2地区南部では小形のピットは住居址検出可能なレベルに至る直前に確認することができ、このことから概して小形のピットの建物址は大形の1～4より後むる時期のものと考えて良いであろう。ではこれら小形の5～9について主軸方向を見ると6、8はN-82°-W、7、9はN-77°、78°-Wとなり2群に分けられる。ここで櫛列と比較するならば、櫛列1はN-78°-W、2はN-84°-Wとなり前者は建物址7、9と後者は建物址6、8との数値が近いことがわかる。

ではこれらの時期についてであるが、遺構内の切り合いでまずみるならば、建物址7、9などは各々9、12号住居址を切っており奈良時代後期以降としか言えない。8は住居址のうちでもかなり新しい8住を切っておりここから平安時代以降と言うことができる。又これらとは棟の向きを違える建物址2のうちのP<sub>48</sub>、P<sub>162</sub>に遺物がありそれによると古いものから新しいものまで時期差があり、古い方で奈良時代中期頃と考えている。

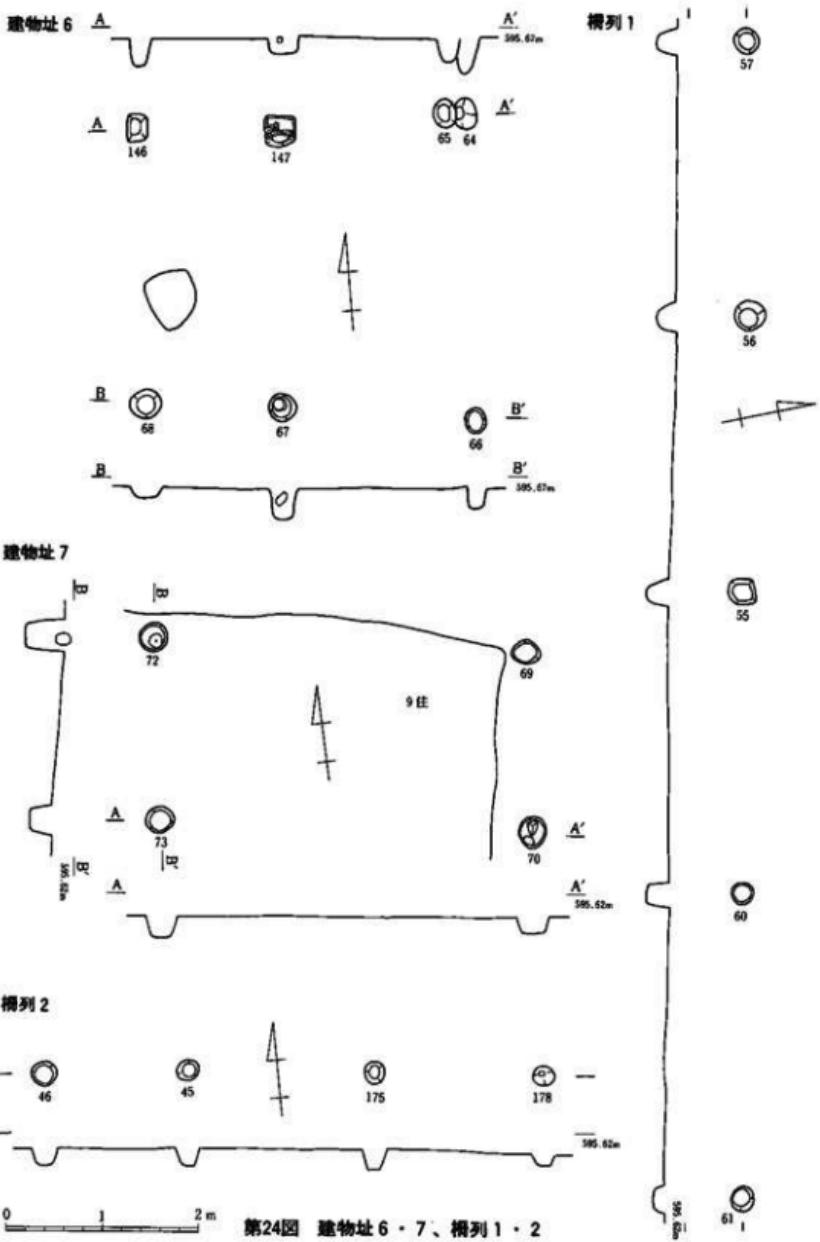
用途としては1～4の大形のものは高床にして物を乗せても良いであろうが、小形の5～9はどうであろうか。8は総柱とは云えピットの直径は22(P<sub>74</sub>)～30cm(P<sub>48</sub>)、利用した材木を考えると倉庫としても余り重い物は乗せられないよう思える。また他の側柱式のものは平地式の建物址と考え、小形の7、9は非居住用の小屋、大形の2は居住用にでも用いたものか。

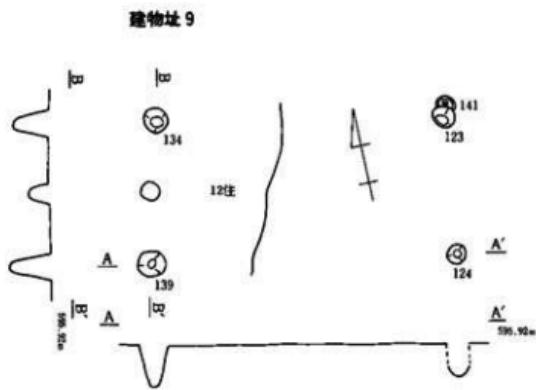
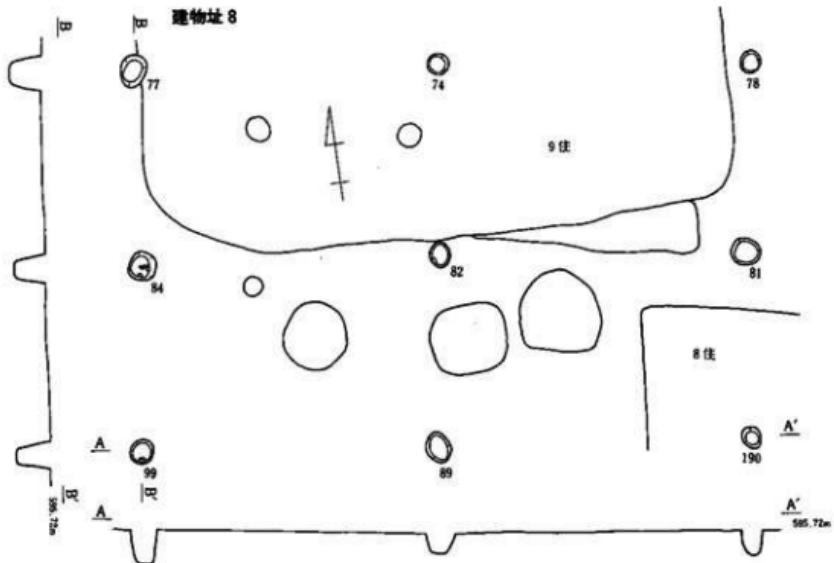


第22図 建物址 1・2



第23図 建物址 3・4・5





第25図 建物址 8・9

A horizontal number line starting at 0 and ending at 2 m. The line is divided into 10 equal segments by tick marks. The first tick mark is labeled 1.

建物址一覧表

No.	平野形 柱配り	主軸方向	奥 幅(cm)	柱間寸法(m) 乗	柱穴実測(cm)			柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見
					長径	短径	厚さ			
1	長方形 側柱式	N-6'-E	1間×1間 5.0×2.6	桁 乗	5.0	86	70	68	30 円形	9往南に位置する。ピット中に廻廊。 軒高が長い。
					2.6	86	85	26	不整円形	
					97	76	72	18	不整円形	
					98	92	78	29	不整円形	
2	長方形 側柱式	N-6'-E	1間×2間 5.4×3.7(3.5)	桁 乗1.6~2.0	5.4	48	66	54	33 不整円形	遺物あり。P <sub>III</sub> は XII 期。 P <sub>IV</sub> は XI~XII 期
					1.6	58	80	74	19 円形	
					2.0	153	60	58	20 円形	
						159	54	46	15 楕円形	
						162	54	46	13 円形	
						173	50	44	22 椭円形	
3		N-8'-E	2間 4.6	桁2.2~2.4	167	72	70	24 円形	遺物址であろう。	
					168	80	68	23 不整円形		
					184	70	66	14 円形		
4	長方形 側柱式	N-82'-W	1間×1間 4.5(4.3)×4.2	桁4.3~4.5 乗4.2	4.3	357	62	28	33 長方形	4往に脚跡、乗・桁数進近似
					4.2	358	72	72	24 円形	
						362	52	44	36 椭円形	
						371	56	48	26 椭円形	
5	長方形 側柱式	N-82'-W	1間×2(3)間 3.3(3.1)×3.5(2.7)	桁3.1~3.3 乗0.8~1.9	3.1	33	18	18	13 円形	不規則性の並び。東西を乗と想える。
					3.2	34	24	22	18 円形	
						35	24	20	23 椭円形	
						36	24	22	23 椭円形	
						37	24	20	25 椭円形	
						38	16	12	9 椭円形	
						39	20	20	20 円形	
6	長方形 側柱式	N-82'-W	2間×1間 3.4(3.0)×3.2(2.8)	桁1.4~2.0 乗2.8~3.2	1.4	64	34	26	38 椭円形	遺物ありIV~VII 期 9往北側に位置する。
					2.0	65	30	26	25 椭円形	
						66	26	24	23 椭円形	
						67	32	28	32 円形	
						68	34	30	11 円形	
						146	28	22	27 方形	
						147	32	32	17 方形	
7	長方形 側柱式	N-77'-W	1間×1間 3.9×1.9	桁3.9 乗1.9	3.9	69	30	26	20 不整円形	9往を切る。
					1.9	70	34	30	25 椭円形	
						72	30	28	42 円形	
						73	38	30	23 円形	
8	長方形 側柱式	N-82'-W	2間×2間 6.4×3.9	桁3.0~3.2 乗2.0	3.0	74	22	22	37 円形	櫛く良好 8、9往を切る。連1との切合い不明。
						77	36	24	35 椭円形	
						78	24	22	20 円形	
						81	30	28	22 不整円形	
						82	28	22	28 不整円形	
						84	38	28	32 方形	
						89	34	26	21 不整円形	
						99	24	24	37 円形	
						190	24	20	29 不整円形	
						141	20		39 円形	
9	長方形 側柱式	N-79'-W	1間×1間 3.2(3.0)×1.5	桁3.0~3.2 乗1.5	3.2	123	26	20	41 不整円形	櫛く良好 12往を切る
					1.5	124	22	20	(11) 円形	
						134	26	26	39 不整円形	
						139	30	26	45 不整円形	
						141	20		39 円形	

表2

柵列一覧表

No.	主軸方向	渠 積(m)	柱間寸法(m)	柱穴底面(cm)			柱穴形状	柱穴番号	柵列所見
				No.	長径	短径			
1	N-78°-W	4間(楕状)	2.8~3.2 12.4	55	28	28	22	不整方形	間数は東面に伸びる可能性あり、段2との切合不明
				56	32	30	20	不整円形	
				57	28	26	22	円形	
				60	24	24	23	円形	
				61	26	24	13	円形	
				45	24	22	20	不整円形	
2	N-84°-W	3間(楕状)	1.4~1.9 5.2	46	28	28	16	円形	間数は西に伸びるか。
				175	24	22	22	椭円形	
				176	24	20	10	不整円形	

#### 4、ピット、溝、周溝

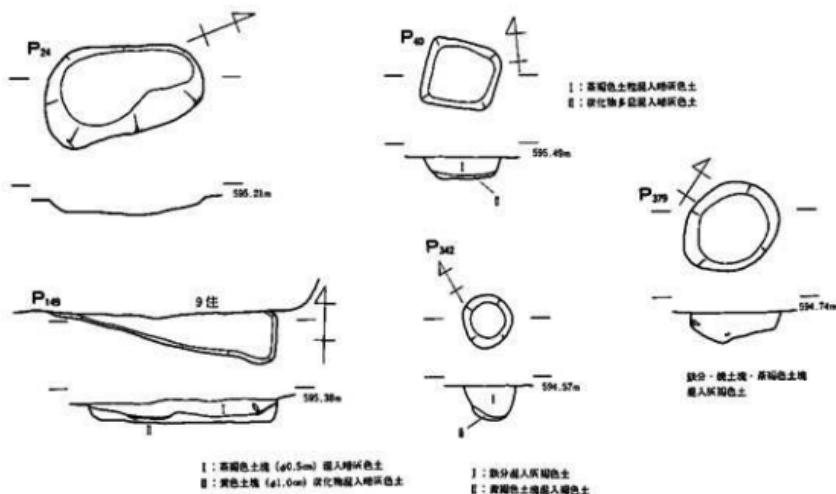
住居址、小堅穴以外の落込みはすべてピットとして扱った。その数は321基でこれらの中には最大 $60 \times 25\text{cm}$  (149) から小さいものは直径15cm のものまである。平均的なものを大別すると建物址1～4までに見られるものと、5～9、柵列のような小形のものとに分けられよう。1地区の南側、14、15号住居址の間には大形のものが多い。これらのうち310、325、326の土層断面に柱痕跡が見えているが遺物址として組合せが考えられなかった。この一帯の遺物は少ない乍ら14、15住の如くの古い遺物が見える。又2地区の南側にはピットの数こそ多くないが建物址、柵列として多数が検出できた。ここは住居址の密度も高い地区で切り合いもあり場所的に便利な所であったと考える。遺物には大雜把に奈良時代末期～平安時代後期のものが多い。同地区北側にも若干集中するが形状からみると土壤的なものである。付近には10住があり遺物も時期的に同様である。尚1、2地区以外では遠く離れた5地区の西際トレント部分においてピット1基確認している。近くから灰釉陶器が少量出土、多くはないが遺構はここにも存在する。

溝は1地区に3本検出した。1、2は現在境沢より北へ流れ出る支流の素型であろう。このうち2は覆土や砂質で1より20cm 程レベルが高く少し削ると消滅する。1は覆土に小礫が充満し僅かであるが1住に切られていたかのようである。この両者の前後関係は厳密には言えない。覆土中に須恵器、土師器、灰釉陶器を含み、部分的には水溜りがあったような深い箇所も見え、その流れは蛇行し自然流路と思われる。

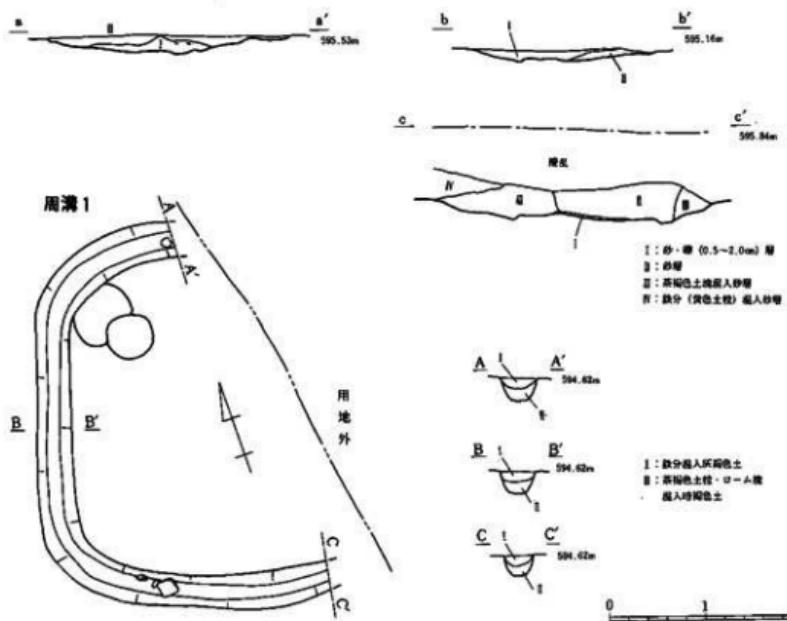
溝3は深さ3cm 程の凹みである。巾70cm で北側は丸く止まり南側に約4、5m を測りまだ続くようであるが検出できなかった。ただ底面は堅くピットが付属する。これらから水とは無関係なものであろう。とにかく浅い為遺物も見当らず全容は分らない。

尚1地区北部に東西に或いは北側へ疊が露出するが深く探る程下へ広まっており、これはこの地形を形成した梓川からの自然流路と思われる。

周溝は1地区南側、14号住居址の横に検出したが東側用地外へ続く為詳しくは分らない。延長6.6m、巾30～40cm の溝が平面形U字状をなし廻る。深さは検出面から20～25cm で底となり断面U字状をなし、遺物をもたないでピット1基を切る。覆土は2層であり上層は付近の14、15号住居址と同色で灰褐色土を示す。覆土中には図で示すように大ぶりな石1ヶと小ぶりな石3ヶが溝底部より出たのみで、遺物は土師器裏片1点を得たにすぎず、又付近からも本址に関連或いはこの用途、時期などを示す遺構、遺物は出ていない。



溝11



第26図 ピット、溝、周溝

## 第3節 遺物

### 1 土器

#### (1) 概要

各遺構の覆土・底面・検出面および遺構外の検出面から多量の出土をみた。そのほとんどが土師器・須恵器であり、これに若干の灰釉陶器、ごく微量の綠釉陶器・青磁・繩文土器が混じる。総量は、107.8Kg、整理用コンテナー約20箱分であり、このうち土師器が83.9Kg、須恵器が22.8Kg、灰釉陶器が1.1Kgを占める。これらは一部の混入品を除いて、概ね当地方の古墳時代末から平安時代中期にかけての土器に等しい。

出土土器の報告にあたっては図化提示を第一の方法としたが、墨書き器や特殊な器種を除き、残存度が低く図化の精度が落ちるものについてはこれを控えた。次に、各遺構毎に出来うるかぎり細かく器種・器形の分類を行い、それらの量を測ることにより（具体的な方法は重量の計測によった）各遺構出土の土器群として土器を捉えその様相を表および記述で示すように努めた。これは、出土土器は、土器単体として、また各遺構出土の土器群として、の二つの側面をもち、図化提示したものの説明のみでは後者に対しての視点を欠くという問題意識に基くが、一方で、過去4年にわたる島立地区の発掘調査で得られた膨大な資料により、当該時期の土器については器種組成などのあらましが判明し、模式化・記号化が図れるようになってきていることもそれを助けている。

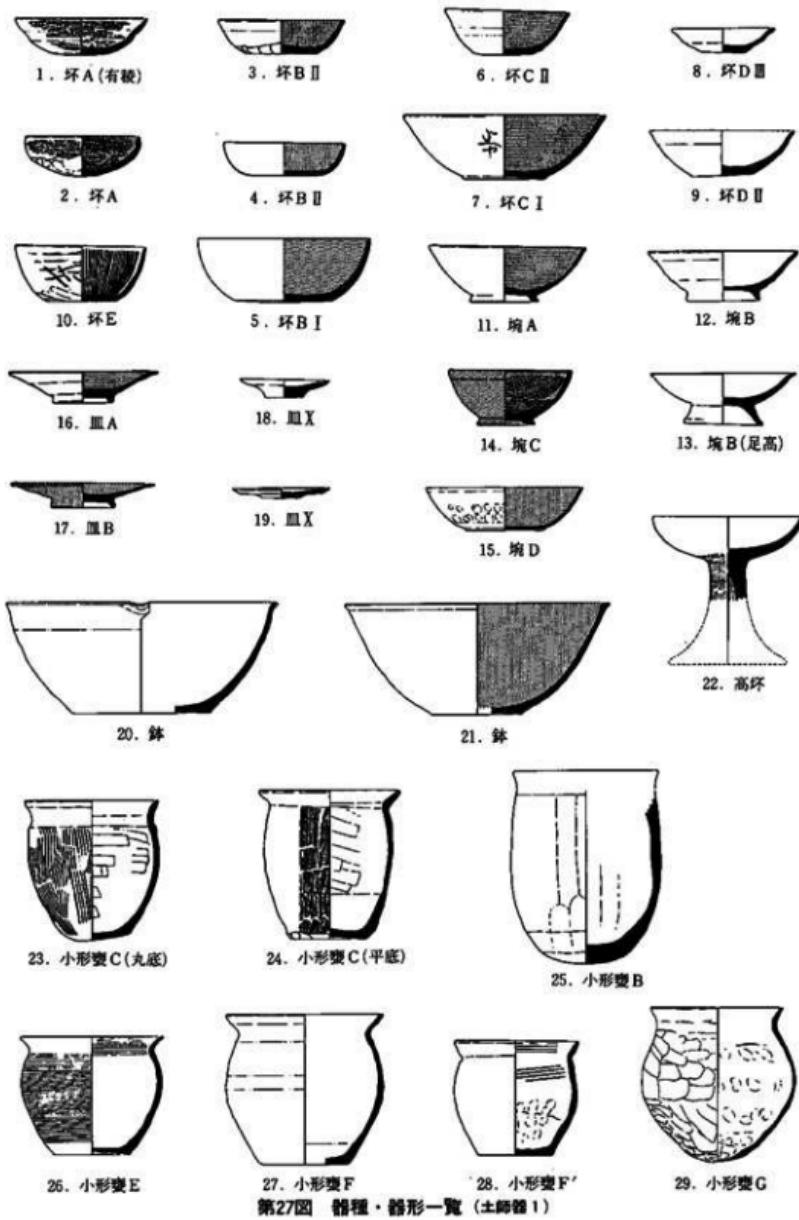
#### (2) 器種と器形

##### ① 分類と名称

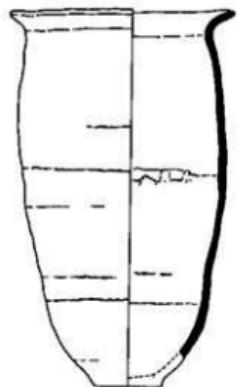
当遺跡の今回調査地点を含む島立地区の各遺跡から出土した、古墳時代末から平安時代にかけての土師器と須恵器に見られる器種・器形の分類とその呼称は第27~29図に、またそれらの器種・器形の簡単な説明と図に使用した土器の出典は表3・4に示すとおりである。以後の本文、各遺構出土土器群組成表、土器観察表（表7）などはこの分類の呼称を使用する。

この分類は、昭和59・60年に発表した島立地区の南栗遺跡第一次調査報告（文献5）および第二次調査報告（文献6）の内容を加えて、同遺跡第三次調査報告（文献7）で行ったものを基本とし、これに島立地区の北栗遺跡調査報告（文献8）で若干の追加をしたもので、文献7（昭和61年）以降松本市教育委員会が刊行した調査報告に共通している。従って分類の詳細については文献7を参照されたい。

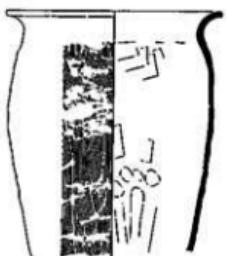
尚、灰釉陶器に関しては、当地方では土師器・須恵器に比して量が少なく器種の多様性が見極め難い他、生産地での研究が進んでいるので、その分類や名称に従う。



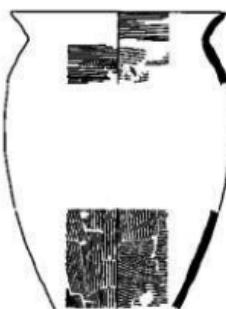
第27图 器種・器形一覽 (土器類 1)



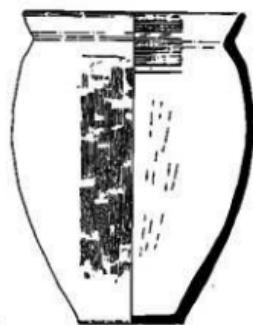
30. 壺A



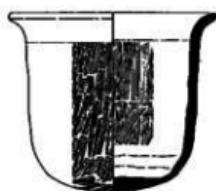
31. 壺A(内ハケ)



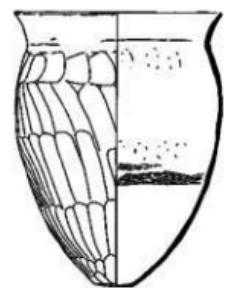
33. 壺D



34. 壺E



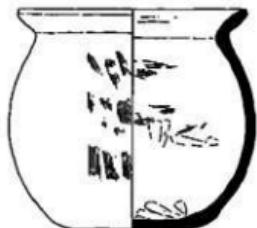
32. 壺C



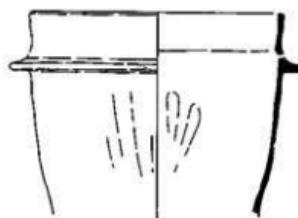
36. 壺F



35. 壺E(内ハケ)

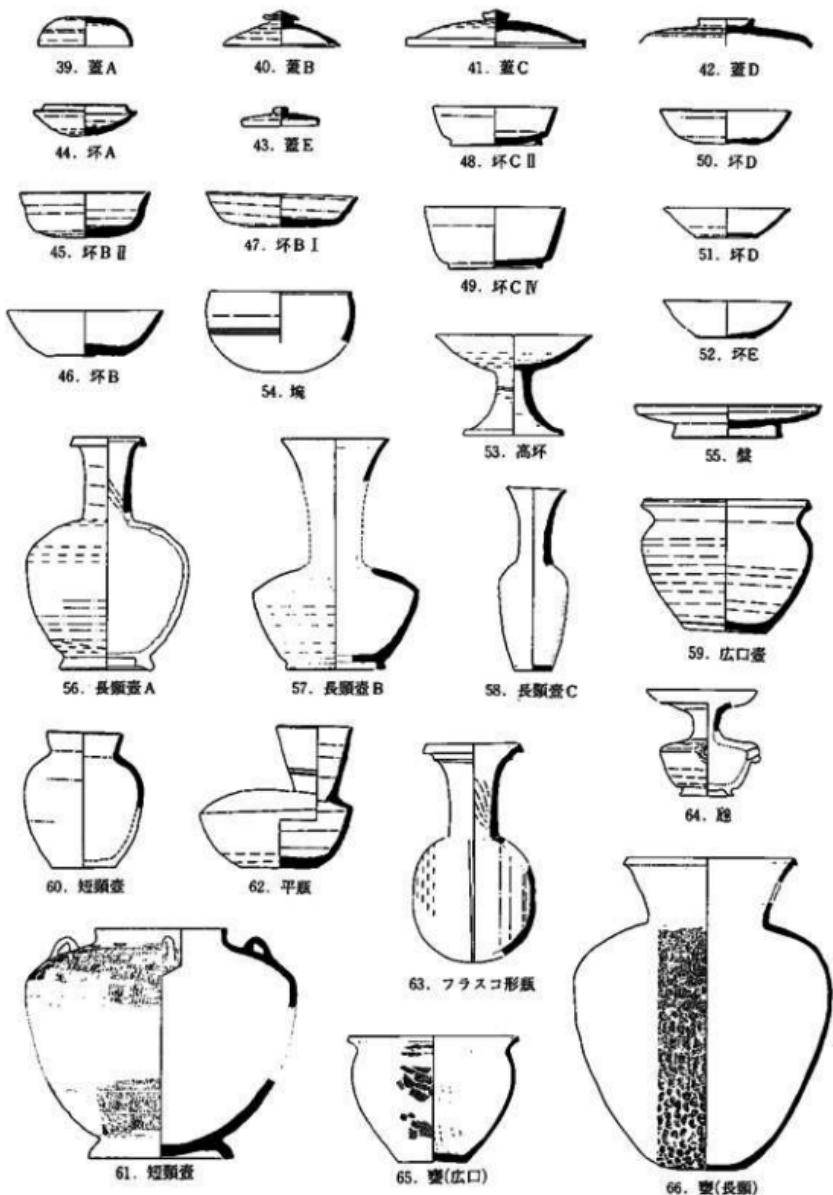


37. 壺G



38. 羽釜

第28図 器種・器形一覧（土師器2）



第29図 器種・器形一覧 (須恵器)

表 3

## 土器器種・器形一覧表

番号	器種・器形	製作技術等の特徴	出典・出土遺構
1	环A(有底)	ヨコナダ。体部外面下半ケメリの後、内外面にガキ。	文献 6 77住
2	环A	ヨコナダ。体部外面下半ケメリの後、内外面にガキ、内面用色处理。	文献 7 36住
3	环B II	ヨコナダ。体部外面下半および底面ケメリ。底面と体部の境界に縫を作る。	文献 7 18住
4	环B II	ヨコナダ。体部外面下半および底面のケメリにより境界の縫を失う。内面にガキ、黒色处理。	文献 7 19住
5	环B I	ヨコナダ、底面ケメリ。内面にガキ、黒色处理。	文献 8 13住
6	环C II	ヨコナダ、底面み切り底。内面にガキ、黒色处理。	文献 7 9住
7	环C I	ヨコナダ、底面み切り底。内面にガキ、黒色处理。	文献 7 9住
8	环D III	ヨコナダ、底面み切り底。	文献 8 20住
9	环D II	ヨコナダ、底面み切り底。	文献 8 20住
10	环E	ヨコナダ、底面中央に糸切り痕を残し外周ケメリ、体部下半ケメリ。体部内面縫：ガキ、外縫縫：ガキ。	文献 6 75住
11	壺A	ヨコナダ、底面み切り底・付け高台。内面にガキ、黒色处理。	文献 7 9住
12	壺B	ヨコナダ、底面み切り底・付け高台。	文献 8 23住
13	壺B(足高)	ヨコナダ、底面み切り底・付け高台。	文献 8 20住
14	壺C	ヨコナダ、底面み切り底・付け高台。内面にガキ、黒色处理。	文献 2 1住
15	壺D	型押しし、口縁ヨコナダ・付け高台。内面にガキ、黒色处理。	文献 8 29住
16	壺A	ヨコナダ、底面み切り底・付け高台。内面にガキ、黒色处理。	文献 7 6住
17	壺B	ヨコナダ、底面み切り底・付け高台。内面にガキ、黒色处理。	文献 7 6住
18	壺X	ヨコナダ、底面み切り底。	文献 8 20住
19	壺X	ヨコナダ、底面み切り底。	文献 8 20住
20	鉢	ヨコナダ、底面み切り底。内面にガキ。片口が一か所に付される。	文献 8 21住
21	鉢	ヨコナダ、底面み切り底。内面にガキ、黒色处理。口縁端部肥厚。	文献 7 6住
22	高杯	口縁ヨコナダ、脚部外縫：ガキ、環縫内面にガキ、黒色处理。	文献 3 2号墳
23	小形壺B	外縫縫：ガキ。	文献 7 8住
24	小形壺C(有底)	ヨコナダ。脚部外縫ハケメ・内面ヘラナダ。	文献 7 16住
25	小形壺C(平底)	ヨコナダ。脚部外縫ハケメ・内面ヘラナダ。底部下端ケメリ。底面に木葉压痕。	文献 7 5住
26	小形壺E	ヨコナダ、底面み切り底。脚部外縫と口縁内面にカキメ。	文献 8 檻出面
27	小形壺F	ヨコナダ、底面み切り底。	文献 8 19住
28	小形壺F'	ヨコナダ。脚部および口縫内面ハケメ・ナダ・指標圧痕。底面平若干あげ底。	文献 7 18住
29	小形壺G	ヨコナダ。脚部外縫ハケメ・内面指標圧痕。	文献 4 4住
30	要A	口縁強いヨコナダ、脚部ナダ・ヘラナダ。底面に木葉压痕。	文献 6 68住
31	要A(ハケメ)	ヨコナダ。脚部外縫ハケメ・ナダ・ヘラナダ。	今日 15住
32	要C	ヨコナダ。脚部外縫ハケメ。發掘くびれず、丸底。	文献 7 8住
33	要D	脚部外縫のハケメ・内面縫構のハケメ。口縫内面・脚部上半外縫カキメ。	文献 7 17住
34	要E	脚部外縫のハケメ・内面縫構のナダによる既底で長い溝状痕。口縫内面(一部脚部上半内面)カキメ。底面ナダ。	文献 6 4住
35	要E(内ハケメ)	脚部外縫のハケメ・内面縫のハケメ・口縫内面カキメ。	文献 8 2住
36	要F	ヨコナダ。脚部外縫ハケメ・内面指標圧痕(一部にハケメ)。非常に高い。	文献 4 4住
37	要G	ヨコナダ。脚部外縫ハケメ・ナダ・内面ハケメ・ナダ・ヘラナダ。	文献 6 11住
38	羽釜	ヨコナダ。脚部ナダ。	今日 6住

表4

須恵器器種・器形一覧表

番号	器種・器形	製作技術等の特徴	出典・出土遺構
39	蓋A	【坏蓋】ロクロナゲ、天井部回転ケメリ。肩部に後、口縁内側に直かな沈線。	文献7 11住
40	蓋B	【カニリ蓋】ロクロナゲ、天井部回転ケメリ後つまみ。口縁内側にかえり。	今田 14住
41	蓋C	ロクロナゲ、天井部回転ケメリ後つまみ。	文献8 14住
42	蓋D	ロクロナゲ、天井部回転ケメリ後つまみ。端部下方へや長く屈折	文献6 75住
43	蓋E	ロクロナゲ、天井部回転ケメリ後つまみ。	文献10 27住
44	坏A	【蓋坏】ロクロナゲ、底面回転ケメリ。蓋受部と立ち上がりを有す。	文献7 11住
45	坏B II	ロクロナゲ、底面へ切り廻または回転ケメリ。箱形。	文献6 11住
46	坏B III	ロクロナゲ、底面へ切り廻または回転ケメリ。逆台形。	文献8 13住
47	坏B I	ロクロナゲ、底面へ切り廻または回転ケメリ。	文献6 11住
48	坏C II	【有台坏】ロクロナゲ、底面回転ケメリまれに糸切り模を残し付け高台。箱形。	文献7 10住
49	坏C IV	【有台坏】ロクロナゲ、底面回転ケメリまれに糸切り模を残し付け高台。箱形。	文献8 騎1
50	坏D	ロクロナゲ、底面糸切り模。	文献6 75住
51	坏D	ロクロナゲ、底面糸切り模。	文献8 5住
52	坏E	ロクロナゲ、底面糸切り模。	文献8 23住
53	高坏	ロクロナゲ、坏部糸切り模。坏Dに似るが、胎土粗悪、燒成不良で欠質。 ロクロナゲ、坏部底面回転ケメリ。脚部中央に沈線、端部底く屈曲。蓋B・Cの作りかけに脚を付けたようなもの。	文献3 1号塙
54	塊	ロクロナゲ。口縁粗く外反。体部中央に沈線。	文献7 塚9
55	盤	ロクロナゲ、底面糸切り模。付け高台。	文献6 75住
56	長頸壺A	ロクロナゲ、三段成形。肩部と胴下部に回転ケメリ、底面糸切り模、付け高台。頸部内面しぶり底。	文献4 10住
57	長頸壺B	ロクロナゲ、三段成形。肩部に回転ケメリ、底面底模、付け高台。肩部に後。	文献3 2号塙
58	長頸壺C	ロクロナゲ、底面糸切り模。	文献7 塚80
59	広口壺	ロクロナゲ、底面糸切り模。胴部下端回転ケメリ。	文献11 1住
60	短頸壺	ロクロナゲ、底面糸切り模。	文献6 47住
61	短頸壺	タタキメ、一部ロクロナゲ、付け高台。胴部に沈線。把手(耳)4か所。	文献3 1号塙
62	平底	ロクロナゲ、底面一帯回転ケメリ。脚部に沈線。	今田 14住
63	フラスコ形壺	ロクロナゲ、胴部側面(或形時の底面)回転ケメリ。他方側面粘土板貼付け底。頸部内面しぶり底。ロ縫直下に既。	文献1 8号塙
64	壺	ロクロナゲ、胴部・底面回転ケメリ、付け高台。注口1か所貼付け。	今田 15住
65	壺(広口)	タタキメ、口縁ロクロナゲ。平底。	文献9 3住
66	壺(長颈)	タタキメ、口縁ロクロナゲ。	文献3 2号塙

## ②今回の調査でみられる器種・器形

第27~29図および表3・4は前述のように島立地区各遺跡での古墳時代から平安時代にかけての通有な器種・器形を示したものである。従って、今回の調査ではみられない器形がある一方、少量特殊なものは扱われていない。この点について若干補足をしておきたい。

まず第27~29図および表3・4に載っているが今回出土がないもの。土師器では、壺E、塊C・塊D、皿B、小形壺G、須恵器では、蓋A・蓋D、坏A、盤、長頸壺Cが挙げられる。欠落の原因は、これらの器種・器形自体比較的珍しいものであることが第一だが、今回発見された遺構の時期的な要因もあるろう。

次に同図・表にないが出土しているものとして、土師器の小形壺D(9住・12住)、短頸壺(7住・8住)、鉢形土器(6住)、須恵器の横瓶(12住)、提瓶(5住・14住:ただし口縁部のみの破片で平底と見分けがつかない)、がある。これらのうち土師器の短頸壺・鉢形土器はきわめて珍しい。またP<sub>10</sub>からは須恵器製の多口壺(多嘴壺)の嘴の部分とみられる破片が出ている。

土師器・須恵器以外の種別の焼物は、灰釉陶器・綠釉陶器・青磁・繩文土器が出土している。灰釉陶器は10か所の遺構から出土しており(1・6~9・11・13住、小堅2、P<sub>50</sub>・P<sub>100</sub>)、器種は碗・

長頸瓶および碗・皿の区別ができないもの、瓶類の一部としか分からぬものがある。縄釉陶器は碗の小片が6点出土している(6住:1点、7住:2点、検出面:3点)。住居址からの3点は胎土が軟質のものである。青磁は2片出土している(6住、12住検出面)。繩文土器は9住覆土から少量出土しているが混入品であろう。

### (3) 各遺構出土土器群の様相

各遺構から出土した土器の種別、器種・器形と重量は、第30・31図の円グラフに示すとおりである。一般に、遺構内から出土する土器群には、明らかに同時に廃棄・遺棄された関係にある状態を示しているものがまれに見られるが、ほとんどはそれが認められない傾向にある。今回の調査でも全く同様であり、第9号住居址のカマド周辺に意図的な廃棄の同時性が認められるものが数点あったほかは、各遺構の床面・底面から検出面まで、あまりまとまりもなく大小の破片、時に完形品が出土するという状態であった。このような形で得られた土器は、残存の度合いによって図化可能かどうかの観点でのみ見られやすい(即ち、土器単体で扱われてしまう)。しかし実際の出土状況に前述のように優劣がない限り、破片の大小にかかわらず均等に扱うべきである。その次元では数量的に表わされた土器群が存在するだけであり、そのなかで各器種・器形の占める比率により土器群の様相(性格)が示されるだけである。この視点に従い、以下に各遺構出土の土器群の様相をみてみたい。(各種構造土器群組成表の単位:g)

#### ①住居址出土の土器群

##### 第1号住居址出土土器群

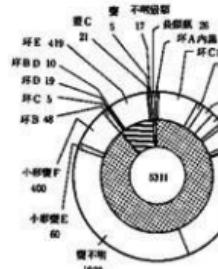
下表の内容で構成される。土師器「坏もしくは塊」欄の数字は坏Cと塊Aの双方に該当する可能性がある。土師器「甕 不明」欄は、すべて、摩滅したり部分破片ではっきりしなかった甕Eの破片である。

坏・塊類では、土師器坏C・坏D・塊A(坏C:31.0%、坏D:7.8%、塊A:7.9%)、須恵器坏E(26.7%)が主体を占める。土師器甕類は甕Eが、小形甕はFが主体となる。

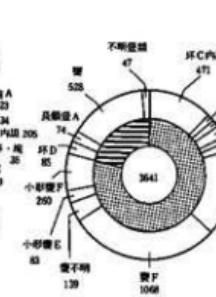
図示したものは、土師器坏C I 1点・坏C II 3点・坏D II 2点・塊A 1点・塊B 1点・皿形土器1点・小形甕F 1点、須恵器坏B 1点、の計11点である。

1 住	土 器 群											
	坏				塊		坏もしくは塊		皿		甕	
	A内皿	C内皿	C	D	A	C	内皿	—	X	E	不明	E
	40	420	65	122	123	34	205	36	19	1287	1930	60
須 惠 器												
坏					皿	甕	不明	瓶	灰陶器			
B	C	D	BD	E	C		壹類	長類				
48	5	19	10	419	21	5	17	26				

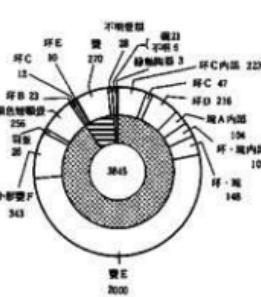
第1号住居址



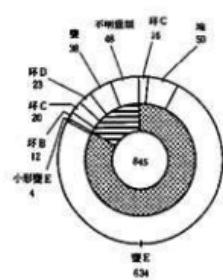
第4号住居址



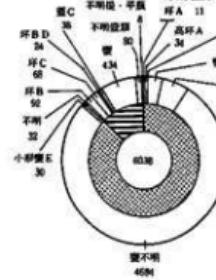
第7号住居址



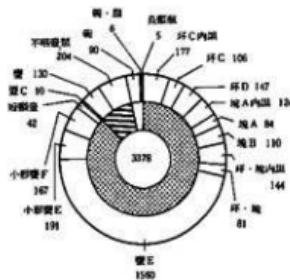
第2号住居地



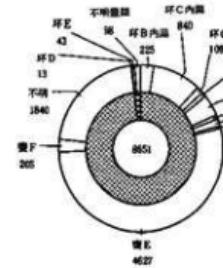
第5号住居地



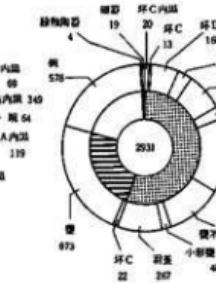
第8号住居址



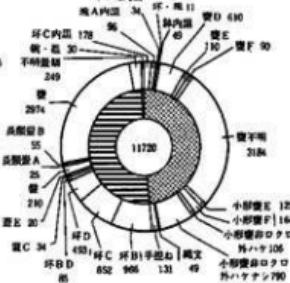
第3号住居址



第6号住居址

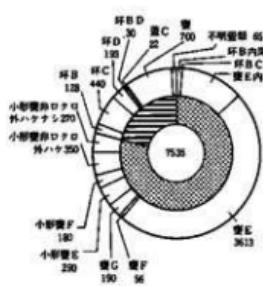


第9号住居址

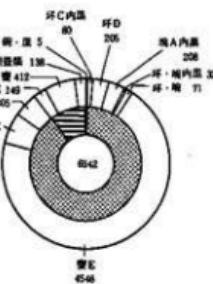


### 第30圖 遺構別體理・體形重量一覽(1)

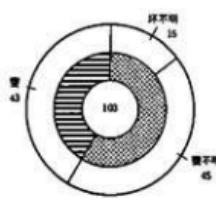
第10号住居址



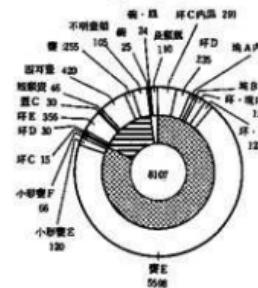
第13号住居址



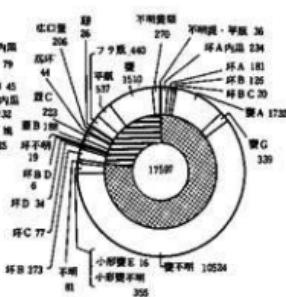
小型穴 1



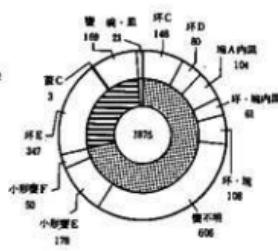
第11号住居址



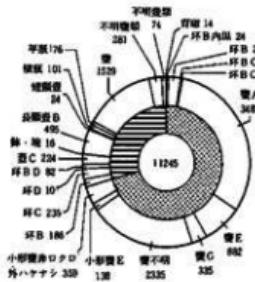
第14号住居址



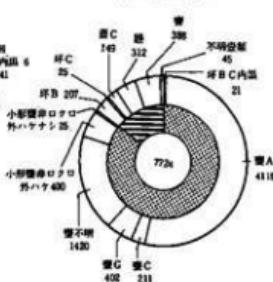
小型穴 2



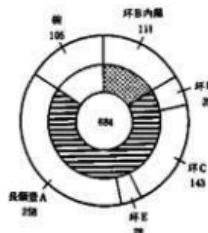
第12号住居址



第15号住居址



検出面



第31図 造柄別器種・器形重量一覧(2)

## 第2号住居址出土土器群

下表の内容で構成される。量が非常に少なく、土器群の統計的な分析は不可能である。壺・塊類は、土師器壺C・塊Aが、土師器甕類は甕Eが主体をなしている。図示できたのは土師器塊A 1点のみであるが、これが本址土器群の性格を示すものとすることは危険である。

2 住	土 師 器				須 恵 器				不明
	壺	塊	甕	小形甕	壺			甕	
	C	A内黒	E	E	B	C	D	E	
	16	50	634	4	12	20	23	38	48

## 第3号住居址出土土器群

下表の内容で構成される。土師器「壺もしくは塊」欄の数字は壺Cに該当すると推定する。土師器「甕 不明」欄は、摩滅したり部分破片ではっきりしなかった甕Eの破片が大半を占めるが、甕Dあるいは甕Gとみられる厚手の破片もかなりある。

3 住	土 師 器								不明		
	壺			塊	壺もしくは塊	皿	鉢	甕			
	B内黒	C内黒	C	A内黒	内黒	—	A内黒	内黒			
	225	840	109	69	349	64	119	50	4627	205	1840

須 恵 器		
壺		不明
D	E	甕類
13	43	98

壺・塊類は土師器壺C (50.3%) が半数を占めるが、土師器壺B (12.0%)・皿A (6.3%) も一定量があり無視できない。土師器甕類は甕Eが大半だが、甕Fの存在も注意を要する。

図示したのは、土師器壺B 1点・C I 1点・壺C II 4点・皿A 1点・甕E 3点、の計10点である。

## 第4号住居址出土土器群

次表の内容で構成される。土師器「壺もしくは塊」欄の数字は壺Cと塊Aの双方に該当するが、大半は前者であろう。土師器の「甕 不明」欄は摩滅によってはっきり判別できない甕Eの小破片と推定する。壺・塊類は、土師器の壺C (66.7%) が大半を占め、これに須恵器壺D (10.9%)、土師器塊A (6.5%) が少量伴う様相を呈する。土師器の甕類は、甕Fが甕Eを凌駕し、内面にハケメをもつ甕Eが若干伴う。

図示したのは、土師器壺C II 3点・塊A 1点・小形甕F 1点・甕F 2点、須恵器壺（短頸甕か）1点、の計8点である。

土 師 器											
4 住	坏		境		坏もしくは境		甕			小形甕	
	C内黒	C	A	内黒	—	E内ハケ	E	F	不明	E	F
	471	50	51	85	39	61	600	1068	139	83	260
須 惠 器											
	坏	長頸甕	甕	不明							
	D	A		壺類							
	85	74	528	47							

#### 第5号住居址出土土器群

下表の内容で構成される。土師器「不明」欄は摩滅が著しくどの器種か全く分からぬるもの、土師器「甕 不明」欄は摩滅や小片のため判然としないが、厚さからみて甕Aないし甕Gに該当すると推定される破片群である。須恵器「坏 BD」欄は全て坏Bに該当するとみたい。

坏・境類は、須恵器坏B・坏C（B：45.4%、C：33.5%）が主体で、少量の土師器坏A（9.3%）がともなっている。土師器甕類は、厚手の甕Gや甕Aが全てである。土師器高坏、須恵器提瓶もしくは平瓶などの今回の調査では珍しい器種が少量存在する。

図示したものは、土師器坏A 2点・甕G 1点・手捏ね1点、須恵器坏C 1点、の計5点である。

土 師 器										
5 住	坏		高 坏	手捏ね	甕			小形甕		不 明
	A内黒	A	A		A	G	不 明	E		
	8	11	34	8	171	316	4684	30	32	
須 惠 器										
	坏			甕	甕	甕	不 明	壺類		
	B	C	BD	C			不 明	壺類	壺もしくは平板	
	92	68	24	38	434	80	8			

#### 第6号住居址出土土器群

下表の内容で構成される。土師器「坏もしくは椀」欄の数字は坏Dや椀Bに該当する。土師器の「甕 不明」欄は摩滅して器形の判定ができないものである。土師器「甕C」は器肉の厚さにより判定したが、「甕X」との誤認の可能性もある。

坏・椀類は、灰釉陶器碗（65.8%）と土師器坏D（18.2%）で8割以上を占める。土師器甕類は、甕Eが主体であるが、羽釜も混じる。

図示したものは、土師器鉢形土器1点・羽釜1点、灰釉陶器碗3点、の計5点である。

		土 師 器								
住	坏			坏もしくは塊	特殊鉢形	甕			小形甕	羽 篦
	C内黒	C	D	—		C	E	不明	F	
	20	13	160	85	219	66	430	327	48	267
項 恶 器		灰釉陶器		綠釉陶器		罐 器				
坏		甕		美						
C										
22	673	576	4	19						

#### 第7号住居址出土土器群

下表の内容で構成される。土師器「坏もしくは塊」欄の数字は内黒のものは坏Cあるいは塊Aに、そうでないものは坏Dに該当する。灰釉陶器「不明」欄は小片のため碗・皿類か瓶頸かの見分けもつかないものである。

坏・塊類の構成は、土師器坏C・坏D・塊A（坏C：29.6%、坏D：23.7%、塊A：11.4%）が主体をなす。土師器甕類は、僅かに羽釜を混じるが、他は全て甕Eである。土師器製の短頸甕は非常に珍しい。

図示したものは、土師器坏C 1点・坏D 1点・短頸甕1点、の3点である。

		土 師 器							
住	坏			塊	坏もしくは塊	甕	小形甕	羽 篓	黑色短頸甕
	C内黒	C	D	A内黒	内 黒	—	E	F	
	223	47	216	104	109	148	2000	343	26
項 恶 器		灰 釉 陶 器		綠 釉 陶 器		罐 陶 器			
坏		甕		不明	美	不明			
B	C	E		甕類					
23	12	10	270	28	21	6	3		

#### 第8号住居址出土土器群

下表の内容で構成される。土師器「坏もしくは塊」欄の数字は内黒のものは坏Cあるいは塊Aに、そうでないものは坏Dあるいは塊Bに該当する。灰釉陶器「碗・皿」の欄は小片のためいづれか判断できなかったものである。

坏・塊類の構成は、土師器坏C・坏D・塊A・塊B（坏C：26.3%、坏D：13.8%、塊A：19.5%、塊B：10.3%）が主体をなす。灰釉陶器碗（8.4%）も比較的多い。土師器甕類は全て甕Eである。

図示できたものは、土師器坏D・塊B、灰釉陶器碗、各1点のみである。

		土 師 器											
住	杯			塊			坏もしくは塊		甕		小形甕		塊類
	C内周	C	D	A内周	A	C	内周	一	E	E	F		
	177	106	147	124	84	110	144	81	1560	191	167	42	
須 惠 器						灰 磁 陶 器							
蓋	甕	不明	瓶	瓶もしくは瓶	瓶								
C	蓋	甕			瓶								
10	130	204	90	6	5								

### 第9号住居址出土土器群

次表の内容で構成される。土師器「坏もしくは塊」欄の数字は坏Cや塊Aに該当する。土師器の「甕 不明」欄は小片や摩滅してよく分からぬものだが、厚さ、焼成などからみて甕Aと甕Eに大部分が該当する。土師器「小形甕 非ロクロ」欄については、「外ハケ」はすべて小形甕C、「外ハケナシ」790gは小形甕D140gと小形甕F'650gで構成される。土師器「その他 繩文」欄は本址覆土中から出土した少量の縄文時代中期の土器を便宜的にここに置いただけで、他意はない。

坏・塊類は須恵器坏B・坏C・坏D（B：34.6%、C：30.5%、D：17.6%）が主体を占めるが、その一方で土師器坏C・塊A（坏C：6.4%、塊A：3.4%）が少量ではあるが混じってくる点も混入品であるとして無視できない。その理由は、後述するように土師器坏C・塊Aは、先の須恵器坏類より新しい時期のものであること、本址からの坏塊類の出土量は2794gと今回調査遺構のなかでは最多で、そのなかで6.4%あるいは3.4%という数字は混入といふ「誤差」の範囲内では考えられないこと、の2点である。このことは、本址覆土中あるいは本址に重複して、土師器坏C・塊Aを坏・塊類の主な組成にもつ時期の小規模な遺構があったことを暗示している。土師器甕類は明確に器形の判別したものでみれば、甕Dを主体として甕E・甕Fが伴う形になるが、「甕 不明」欄にかなりの量の甕Aが含まれているものとみられ、それを併せると甕A・甕Dが主体になるといって間違いかろう。

本址では前述したように廐棄の同時性が認められる土器群が少量ある。これらはカマド脇の床面上からまとまって出土しており、須恵器坏B 2点（第37図50・54）・坏C 1点（同59）・坏D 1点（同55）、土師器小形甕C 1点（同63）などから成っているが完形品はない。

図示したものは19点と多い。土師器小形甕C 2点・小形甕D 1点・手捏ね 1点、須恵器坏B 5点・坏C 4点・坏D 4点・蓋E 1点・高盤1点となっている。

9 住	土師器											その他		
	坏	塊	坏もしくは塊		鉢	甕			小形甕					
C内黒	A内黒	内黒	一	内黒	D	E	F	不明	E	F	非ロクロ 外ハケ	外ハケナシ	縄文	手捏ね
178	96	34	11	49	610	110	90	3184	125	164	106	790	49	131
須恵器														
坏				甕		盤	長頸甕	甕	不明	灰釉陶器				
B	C	D	BD	C	E		A	B		盤類	甕もしくは皿			
966	852	493	85	34	20	210	25	55	2974	249	30			

#### 第10号住居址出土土器群

下表の内容で構成される。土師器「坏 B・C内黒」欄はすべて坏Bに該当する。土師器の「小形甕 非ロクロ」欄の「外ハケ」は全て小形甕C、「外ハケナシ」は全て小形甕F'である。

坏・塊類は須恵器坏C・坏D・坏B（C：49.3%、D：21.6%、B：14.3%）、土師器坏B（10.3%）で構成される。土師器の甕類は、甕Eと甕E内ハケのものが主体となり、少量の甕Fと甕Gが伴っている。

図示したものは、土師器坏B 1点・小形甕C 1点・小形甕E 1点、須恵器坏B 1点・坏C 4点・坏D 2点、の計10点である。

10 住	土師器											灰釉陶器				
	坏		甕			小形甕			非ロクロ 外ハケ		外ハケナシ					
B内黒	BC内黒	E内ハケ	E	F	G	E	F	E	F	非ロクロ 外ハケ	外ハケナシ					
92	10	906	3613	56	190	290	180	350	270							
須恵器																
坏				甕		甕	甕	不明	盤類							
B	C	D	BD	C			甕類									
128	440	193	30	22	700		65									

#### 第11号住居址出土土器群

次表の内容で構成される。土師器「坏もしくは塊」欄は、内黒のものは坏C・塊Aに、そうでないものは坏D・塊Bに該当する。灰釉陶器「碗もしくは皿」欄は小破片でいざれかの区別がつかなかったものである。

坏・塊類はおもに須恵器坏E（26.4%）、土師器坏C（21.4%）・坏D（17.3%）・塊A（5.8%）から構成されるが、少量の土師器塊B、須恵器坏C・坏D、灰釉陶器碗なども伴う。土師器甕類は全て甕Eである。

図示したものは、土師器坏C II 2点・甕E 1点・甕E内ハケ1点・小形甕E 1点、須恵器坏E 2点・四耳甕？ 1点の計8点である。

		上 師 器							
坏		壺		坏もしくは壺		甕	小形甕		
住	C内黒	D	A内黒	C	内黒	一	E	E	F
	291	235	79	45	132	125	5598	120	66

				須 恵 器				灰 粘 陶 器			
坏		蓋		短頸蓋	四耳蓋	甕	不明	碗	壺もしくは蓋	長頸瓶	
C	D	E	C								
15	30	356	30	46	420	255	105	25	24	110	

### 第12号住居址出土土器群

下表の内容で構成される。土師器「坏 BC内黒」欄および「坏 BC」欄は、いずれも坏Bに該当する。土師器「甕 不明」欄は甕A・甕Gおよび甕E（後述する、甕Aとの中間的なもの）の細片である。土師器「小形甕 非ロクロ 外ハケナシ」欄は全て小形甕Dである。須恵器「不明 甕類」欄は、恐らくは甕になるのであろうが焼成が不良で全く判別ができないものをまとめている。

坏・壺類の構成は、土師器坏B（35.9%）、須恵器坏C・坏B（C : 26.9%、B : 21.3%）が主要なところである。最多を占める土師器坏Bの中には、外形、調整とも全く須恵器坏Bに等しく、ただ焼成のみが土師器（須恵器の酸化炎焼成とは明らかに異なる）のものが2個体ある（第39図84・85）。土師器甕類は、甕Aが主体となり甕Eと甕Gが伴っている。ただし本址から出土する土師器甕Eは他の住居址からのものと異なり、第28図31に示した外面にハケメを持つ甕Aのハケメがより強くしっかりなされる、甕Aと甕Eの中間的なものである。

図示したものは、土師器坏B 2点・小形甕D 1点、須恵器坏B 3点・坏C 1点・蓋C 1点・長頸甕B 2点、計10点を数える。

		土 師 器								
坏		甕				小形甕				
住	B内黒	B	BC内黒	BC	A	E	G	不明	E	非ロクロ 外ハケナシ
	24	291	6	41	3487	882	335	2335	138	359

				須 恵 器								青 瓷	
坏				蓋	跡もしくは壺	長頸甕	短頸蓋	横瓶	平瓶	甕	不 明	甕類	蓋類
B	C	D	BD	C		B						甕類	蓋類
186	235	10	82	224	16	495	24	101	76	1529	281	74	14

### 第13号住居址出土土器群

下表の内容で構成される。土師器「坏もしくは壺」欄は、内黒のものは坏C・壺Aに、そうでないものは坏Dに該当する。灰釉陶器「碗もしくは皿」欄は小破片でいずれかの見分けがつかないものである。

坏・塊類の構成は、土師器坏A・坏D・坏C（坏A：27.6%、坏D：27.3%、坏C：10.7%）、須恵器坏E（19.9%）からなり、僅かに灰釉陶器の碗・皿類が伴う。土師器甕類はすべて甕Eである。図示したものは、土師器小形甕E 1点・小形甕F 1点・甕E 4点、須恵器坏E 1点、の計7点となっている。

13 住	土 師 器							須 恵 器			灰釉陶器 最もくは皿	
	坏		甕		坏もしくは塊		甕	小 形 甕		坏	甕	
	C内底	D	A内底	内底	一	E	E	F	E		甕類	
	80	205	208	32	71	4546	391	305	149	412	138	5

#### 第14号住居址出土土器群

下表の内容で構成される。土師器「坏 BC」欄は全て坏Bに該当すると推定するが、小破片でよく分からぬ。土師器「甕 不明」欄は摩滅の進んだ厚手の小破片で、甕Aおよび甕Gに該当すると考えられる。土師器「小形甕 不明」欄は大半がハケメを持たない厚手の小破片で、小形甕Bになると推定する。土師器「不明」欄は摩滅が著しく土師器であるとしか分からぬものである。須恵器「坏 不明」欄は摩滅して器形の判別ができないものである。

坏・塊類は、土師器坏A・坏B（A：43.1%）、須恵器坏B・坏C（B：42.3%、C：7.2%）を主体として構成される。土師器の甕類は、甕Aと甕Gのみとみられる。高坏、甕、フラスコ形瓶、平瓶など珍しい器種が揃っている。

図示したものは、土師器坏A 5点・甕A 1点・甕G 1点、須恵器坏B・坏C各1点・蓋B 2点・蓋C 1点・フラスコ形瓶2点・高坏・平瓶・広口壺各1点、の計17点である。

14 住	土 師 器								須 恵 器									
	坏				甕			小 形 甕		不明		須 恵 器						
	A内底	A	B	BC	A	G	不明	E	不明	B	C	高坏	広口壺	甕	フラ瓶	平瓶	甕	不明
	234	181	126	20	1732	339	10524	16	355	81								蓋類 最もくは 甲 類

### 第15号住居址出土土器群

下表の内容で構成される。土師器「坏 BC内黒」欄は全て坏Bに該当すると考えられる。土師器「壺 不明」欄は全てが摩滅の進んだ厚手の小破片であり壺A・壺Gあるいは壺Cに該当する。土師器「小形壺 非ロクロ」欄の「外ハケ」は小形壺Cに該当し、「外ハケナシ」は摩滅してよく観察できないが、小形壺Bないしは小形壺Dになると推定される。

坏・壺類はおもに須恵器坏B (81.8%) によって構成され、他は須恵器坏C (9.9%)、土師器坏Bに該当するとみた「坏 BC」(8.3%) が伴うのみである。土師器壺類は、壺A・壺C・壺Gからなるが、壺Aが圧倒的に多い。

図示したものは、土師器小形壺C 1点・壺A 3点・壺G 1点、須恵器坏B 2点・坏C 1点・蓋C 1点・鉢1点・壺（広口壺）1点、の11点である。

		土 师 器						
15 住	坏	壺				小 形 壺		
	BC内黒	A	C	G	不 用	非ロクロ		
	21	4119	211	402	1420	外ハケ	外ハケナシ	25
須 恵 器								
坏		盖	鉢	壺	不明	量 類		
B	C	C				207	25	149
						312	388	45

### ②その他の遺構出土の土器群

#### 小豊穴1出土土器群

右表の内容で構成される。ただし土師器は摩滅が進んで器形の判別が困難である。本址は内部に多量の石の投棄があった遺構であるが、土器に関しては埋没時の混入品として捉えることができる。

小 豊 穴 1	土 师 器		須 恵 器	
	坏	壺	蓋	壺
	不 明	不 明		
15			45	43

#### 小豊穴2出土土器群

下表の内容で構成される。土師器「坏もしくは壺」欄は、内黒のものは坏Cや壺Aに、そうでないものは坏Dや壺Bに該当する。土師器「壺 不明」欄は、摩滅した小破片でよく分からぬが、厚さなどからみて壺Eに該当すると考えられる。灰釉陶器「碗もしくは皿」欄は小破片でいずれか

小 豊 穴 2	土 师 器					須 恵 器			灰 釉 陶 器	
	坏	壺	坏もしくは壺	壺	壺	蓋	壺	蓋	碗もしくは皿	
	C	D	A内黒	内 黑	—	不 明	E	F	E	C
148	80	104	61	108	606	178	50	347	3	169

判別がつかないものである。

壺・塊類は、須恵器壺E(40.0%)、土師器壺C・D(C:17.0%、D:9.2%)・塊A(12.0%)で構成され、僅かに灰釉陶器碗・皿類がともなっている。

図示したものは、土師器壺C1点・塊A2点・小形甕E1点、須恵器壺E3点、の計7点である。

#### ピット出土土器群

埋土中から土器を出土しているピット名および土器の種別・器種・器形とその量(重量)は、表5に示すとおりである。ピット番号の後に「建2」とあるものは、そのピットが掘立柱建物址2を構成する柱穴の一つであることを表わしている。

元来ピットは、掘立柱建物址のようにいくつかが組になっていることが明確に分かる場合以外は単独で扱うが、規模が小さいため土器の出土があってもごく少量のことが多い。意図的な廃棄や埋納がなされていない限り、土器群として捉え様相や性格をみていくには絶対量が少な過ぎるのである。このためここでは表5を掲げるに留める。尚、表中の「時期」の欄は住居址のように土器群の様相の比較によって導き出したのではなく、土器単体の形式的な特徴に基づくものが多いので、それらについては誤差が大きいとともに、遺構そのものの時期ではなく土器の時期を表わしていることに注意されたい。

ただし、このなかでも比較的多數の土器の出土のあった、P<sub>24</sub>、P<sub>48</sub>、P<sub>149</sub>、P<sub>308</sub>などはその廃棄に意図的なものを感じる。土師器壺Dの完形品の入っていたP<sub>48</sub>は掘立柱建物址2の柱穴でもあり、埋納品である可能性が強い。

表5 ピット出土土器器種・器形一覧表(内の数字および「合計」は重量:単位g)

ピット番号	土 器	須 恵 器	灰釉陶器	合計	時 期
23	甕E(59)、甕E内ハケ(8)、甕不明(28)	壺B(11)、壺C II(9)、壺C IV(51)		166	V・VI
24	甕E(49)、甕E内ハケ(30)	壺C(143)		222	V・VI
27		甕C(43)		43	IV-VI
32	甕不明(8)			8	?
40		壺C(6)		6	IV-VI
48:建2	壺D(102、完形)			102	XI-XII
64:建6		壺C(9)		9	IV-VI
79	壺・陶内黑(5)、小形甕E(12)	甕E(2)、多口瓶?(19)		38	IX-X
80	壺C(34)、壺D(2)、塊A(32)、甕E(95)、小形甕E(3)	甕E(29)、甕(41)	塊(40)	276	IX-XI
79・88	甕A(8)、壺・陶内黑(6)、甕E(35)、小形甕E(4)、器種不明(11)	甕E(7)、甕(19)		90	IX-XI
87	甕・陶内黑(17)、甕E(20)、小形甕E(4)、器種不明(?)	甕(62)		110	IX-XI
95	壺C II(36)、甕E(9)、小形甕E(12)			51	VI-VII
148	甕D(72)、器種不明(4)			76	IV-VI
149	甕E(165)、小形甕EかF(23)、小形甕F(28)	壺C(47)、董甕(10)		273	V-VII
156	甕E(30)			30	VI-XI
157	甕D(26)			26	IV-VI
162:建2	甕E(27)			27	VI-XI
166	塊C(9)			9	VI-XI
168:建3	壺C(13)		瓶類(18)	31	VII-XI
169	甕E内ハケ(50)、器種不明(2)			52	V-VII
398	甕E(416)、甕F(218)			634	VI-VII
総 重 量				2279	

#### (4) 土器群の時期

土器群のなかの器種・器形の組成の構成比を土器群間で比較することによって、それぞれの相対的な時期差を導き出す操作を、かつて南葉遺跡第3次調査報告（文献7）で行い成果を得たが、今回もこれに準じて考えてみたい。具体的には、食勝具の主体をなす壺類と、煮沸具の土師器壺類の組成の器形別構成比の比較、言換えれば一つの器形の発生と消滅およびその間の漸移的な増減をたどることによって行う。壺・壇・皿類の遺構別出土量並びに出土比率は表6に示す。

##### ① 壺・壺類の構成

###### 土師器壺Aをもつ土器群：①段階の土器群

土師器壺Aは製作段階でロクロを用いない、古墳時代後期に通有の器形で、これを壺・壺類の組成にもつ土器群は今回出土したもののなかで最古に位置するものである。第14号住居址出土土器群（以後「14住土器群」というように略す）、5住土器群、1住土器群が該当するが、1住のものは比率が低く（2.6%）混入品である可能性がある。

14住土器群においては土師器壺A43.1%、須恵器壺B42.3%の比率をもち、この二者で実に8割以上を占めている。これらに続くのは須恵器壺C7.2%、同壺D3.2%であるが格段に少ない。

次いで5住土器群は土師器壺Aは9.3%に減じて、かわりに須恵器壺B45.4%、同壺C33.5%と上位を独占するようになる。須恵器壺Dはみられない。土師器壺Aの現象傾向が時間の流れに順行するものなら、14住土器群から5住土器群への変化は、土師器壺Aの減少・須恵器壺Bの優勢・同壺Cの増加、という形で捉えられる。

1住土器群は主体を占めるのが土師器壺C・須恵器壺Eでこれに土師器壺Aが伴い、前述の14住あるいは5住土器群とあまりに様相を異なる。むしろこれは後に触れる④段階の土器群の様相に等しい。この点からも1住土器群の土師器壺Aは混入品と判断する。従って1住土器群は①段階に含まれない。

###### 須恵器壺Bをもつ土器群：②・③段階の土器群

壺・壺類の組成にある程度以上（10%以上）須恵器壺Bをもつ土器群で①段階以外のもの。比率の高いほうから、15住土器群、9住土器群、12住土器群、10住土器群、が該当する。①段階において須恵器壺Bは組成のなかで優勢に現状維持をしていたが、ここでは減少傾向に転ずる。

15住土器群においては、須恵器壺Bは81.8%と異常な高率を示す。壺・壺類組成の須恵器壺B占有の頂点を表わすものとみることもできるが、前段階の5住土器群と並んで、壺・壺類全体の出土量が少ない土器群なので、統計的な誤差も大きいと考える。

9住土器群は先に指摘したように④段階に相当する器種・器形が一定量混じってしまっているため、それら（土師器壺・壺、灰釉陶器碗）を除外して考えてみたい。須恵器壺Bが34.6%で首位を占めるが、同壺Cも30.5%で両者の間の差はかなり縮まっている。また同壺Dが17.6%と量を伸ばしていることも重要であろう。

表6 供應形態・壺・皿類出土量ならびに出土比率一覧 上段出土量(枚)、下段遺構内での比率(%)

遺構名		1住	2住	3住	4住	5住	6住	7住	8住	9住	10住	11住	12住	13住	14住	15住	暨1	暨2	合計
壺		A 黒 40 2.6				8 3.9									234 21.9			282	
						31 5.4									227 21.2			238	
		B 黒 225 12.0								92 10.3	24 2.7							341	
										29 33.2								291	
		C 黒 420 26.8	840 44.5	471 60.3	20 2.3	223 24.5	177 16.4	178 6.4		291 21.4	80 10.7							2700	
		65 4.2	16 13.2	109 5.8	50 6.4	13 1.5	47 5.1	106 9.9								148 17.0		554	
		B 黒 122 7.8				160 18.2	216 23.7	147 13.8		10 1.1	6 0.7				21 8.3			37	
		C 50 41.4	69 3.7				114 51	124 84	96 7.9		79 5.8	208 27.6			20 1.9			61	
		A 黒 123 7.9							110 10.3	45 3.3							104 12.0	834	
		C 34 2.2																258	
土器端		205 13.1	349 18.6	85 10.9		109 11.9	144 13.5	34 1.2		132 9.7	32 4.3				61 7.0			1151	
		36 2.3	64 3.4	39 5.0		85 9.7	148 16.2	81 7.6	11 0.4	125 9.2	71 9.5				70 12.4			768	
		A 黒 119 6.3							49 1.8									119	
		X 19 1.2																19	
須恵器		鉢 50 2.7							49 1.8									99	
		B 48 3.1	12 9.9			92 45.4	23 2.5	966 34.6	128 14.3	186 21.3	453 42.3	207 81.8						2115	
		C 5 0.3	20 16.5			68 33.5	22 2.5	12 1.3	852 30.5	440 49.3	15 1.1	235 26.9			77 7.2	25 9.9		1771	
		D 19 1.2	23 19.0	13 0.7	85 10.9				493 17.6	193 21.6	30 2.2	10 1.1			34 3.2			900	
		B-D 10 0.6				24 11.8			85 3.0	30 3.4	82 9.4				6 0.6			237	
		E 419 26.7	43 2.3				10 1.1			356 26.4	149 19.9				347 40.0			1324	
		不明													19 1.8			19	
灰陶器		甕				578 65.8	21 2.3	90 8.4		25 1.8									714
		甕・皿							6 0.6	30 1.1	24 1.8	5 0.7				21 2.4			86
		計	1565 100	121 100	1881 100	781 203	878 100	913 100	1069 100	2794 100	893 100	1357 100	875 100	750 100	1070 100	253 100	869 100	16272	

12住土器群は土器壺Bが33.2%と最多であるが、これは先に説明したように特殊な統成のものがあるためで、ひとまず除外して考えたい。須恵器壺Bは21.3%を示すが同壺Cが26.9%と勝つ。しかし同壺Dは1.1%と少ない。本址や9住の土器群は、須恵器壺Bが多数を占める点では①段階に後続する資料とみて間違いないと信じるが、そのなかでの前後関係については、須恵器壺Bの減少（9住：34.6%→12住：21.3%）と同壺Dの増加（12住：1.1%→9住：17.6%）が整合しない。これは、壺Dの増加率のはうが際立っていること、壺Bと壺Cを一組にしてみた場合9住と12住の両者の量的な差は5%前後に過ぎず、組成の首位を独占している状態に変化はないこと、の二点から12住→9住という形で理解したい。

10住土器群は、須恵器杯Cが49.3%、同杯Dが21.6%と量を伸ばして同杯Bは14.3%で3位に下がっている。これは上記の、須恵器杯Bと同杯Cの組み合わせで、杯Bと杯Dの交代が進んでいることを示す。また、土師器杯Bが一定量をもつくるようになる。本址土器群は9住土器群に後続するものとみることに矛盾はない。

#### 土師器杯Cをもつ土器群：④段階の土器群

土師器杯Cが20%以上の比率を占めるもの。1～4・7・8・11住土器群が相当する。このなかでも50%以上の高比率をもつものと、20～30%台のものに分かれる。

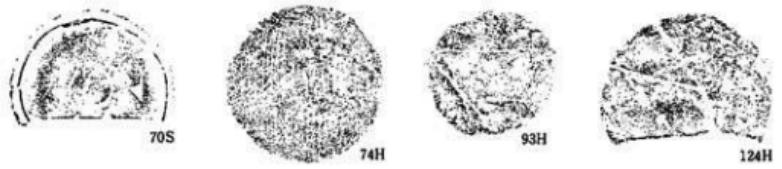
50%以上の比率をもつものに、4住土器群（土師器杯C：66.7%）、3住土器群（同：62.7%）がある。3住土器群には土師器杯Bが16.7%で伴い、③段階に後続する要素をもっているが、須恵器の様相は一変している。また土師器塊類は全くないが、皿Aに一括品があり、伴ってくることは確かであろう。4住土器群には須恵器杯Dが10.9%で伴い、やはり③段階とのつながりを感じさせるが、他の様相は大きく異なる。土師器塊Aの型式的に古い外形のものを少量ともなっている。

土師器杯Cが20～30%台のものには、1住(31.0%)、2住(25.9%)、7住(29.6%)、8住(26.3%)、11住(21.4%)の各土器群が該当する。これらの土器群では組成比率の上位を占めるものの組み合せがいくつかある。まず土師器杯Cと須恵器杯Eが上位1・2位を占めあうものとして、1住土器群（土師器杯C：31.0%、須恵器杯E：26.7%、土師器塊A：7.9%、土師器杯D：7.8%）11住土器群（須恵器杯E：26.4%、土師器杯C：21.4%、土師器杯D：17.3%、土師器塊A：5.8%）が挙げられる。次に上位3種が土師器杯Cと同杯D・塊Aで構成されるものが、

7住土器群（土師器杯C：29.6%、土師器杯D：23.7%、土師器塊A：11.4%）

8住土器群（土師器杯C：26.3%、土師器塊A：19.5%、土師器杯D：13.8%、土師器塊B：10.3%）であり、土師器杯Cと同塊Aの組み合わせが、2住土器群（杯C：25.9%、塊A：10.5%）である。

本段階は土師器杯Cの比率により前段（3・4住）と後段（1・7・8・11住）に時期が分けられることは疑いのないところである。しかし後段が、組成に須恵器杯Eをもつものとそうでないもので更に細分できるかどうかについては、今のところ明確にできない。須恵器杯Eを持つものでも、それのみを除くと持たないものの組成とほとんど等しくなること、須恵器杯E自体の出自や出現と



70Sは須恵器杯Cの底部。中央にへり切り痕を残し、その外周を回転ケズリされる。  
74Hは小形盤Eの底部。静止永切りがみえる。93H、124Hは小形盤Dと盤Aの底部。  
木葉压痕がある。

第32図 土器底部拓影

終末の様相を知る良好な資料に恵まれていないこと、がその理由である。

#### 土師器壺Dをもつ土器群：⑤段階の土器群

土師器壺Dが20%以上あり、前段階には含まれないもの。13住が該当する。土師器壺A(27.6%)、同壺D(27.3%)、須恵器壺E(19.9%)、土師器壺C(10.7%)が主要な組成となっている。土師器壺Dの増加と同壺Cの減少という傾向は、④段階からのあまり断絶のない移行を示している。逆に本段階を基に④段階の後半を眺めると、7住、あるいはそれに続いて11住あたりが本段階の直前に位置してくることが推定される。

#### ②土師器壺の構成

土師器の壺は小破片になっていることが多い、壺・壺類にくらべて外形を知りうるもののが少ない。しかし、各造構の土器群のなかに必ず多量に含まれており、先の難点を補うことによって土器群の比較検討には適した器種といえる。

#### 壺Aをもつ土器群

土師器壺Aは、古墳時代後期からの伝統的な器形で、雑な作りの胴部と強いヨコナデが施される口縁部に特徴があり、新しいものには外面にハケメが施されるものもみられる。この器形を土師器壺類の主体にもつ土器群は今回の調査では最古に位置する。該当する土器群は、5・12・14・15住土器群で、壺・壺類の検討で導き出した①・②段階と一致する。9住土器群には明らかに壺Aと判定されるものはないが、前述のように器形判別困難な壺片の中に厚手のものが多量にあり、実際にはかなり壺Aがあるものとみて、これも含めたい。

#### 壺Eをもつ土器群

土師器壺Eは平安時代に非常に優勢になる器形で、胴部外面の縦のハケメと口縁内面のカキメが特徴である。出自については現在のところ、壺Aの外面にハケメをもつものが壺Dなどの影響を受けて変化してきたものと考えており、先に内面に横のハケメをもつもの(壺E内ハケメ)が現われて、やがてそのハケメが失われ定型化する。土師器壺類がこの壺Eばかりで占められる土器群を取り上げると、1・2・7・8・11・13住土器群が該当する。これは壺・壺類の検討で導き出した④段階の後半と⑤段階にほぼ一致する。

#### 壺Fをもつ土器群

土師器壺Fは胴部外面に強いケズリが施されて非常に薄手に仕上がる、いわゆる武藏型壺と言われるものである。きわめて特徴的な土器なので、かなり小さい破片でもたいていは識別できる。土師器壺の組成の中に壺Fをもつ土器群は3・4・9・10住土器群で、この組み合わせは壺・壺類の②～④段階の前半に相当し、連続性を有するまとまりとして捉えることが可能である。即ち、壺Fは、壺Aから壺Eへ土師器壺が移り変わる時期の土器群の組成の中に一定の時間幅をもって存在すると言える。このことは、9住に伴う壺D、4・10住に混じる壺E内ハケメが壺Eの前駆的なものであることからも理解できる。

以上のように土器器窓の構成の違いによってたどれる土器群の推移は、画期が異なるものの、順番は杯・塊類で導き出したものとほとんど一致する。

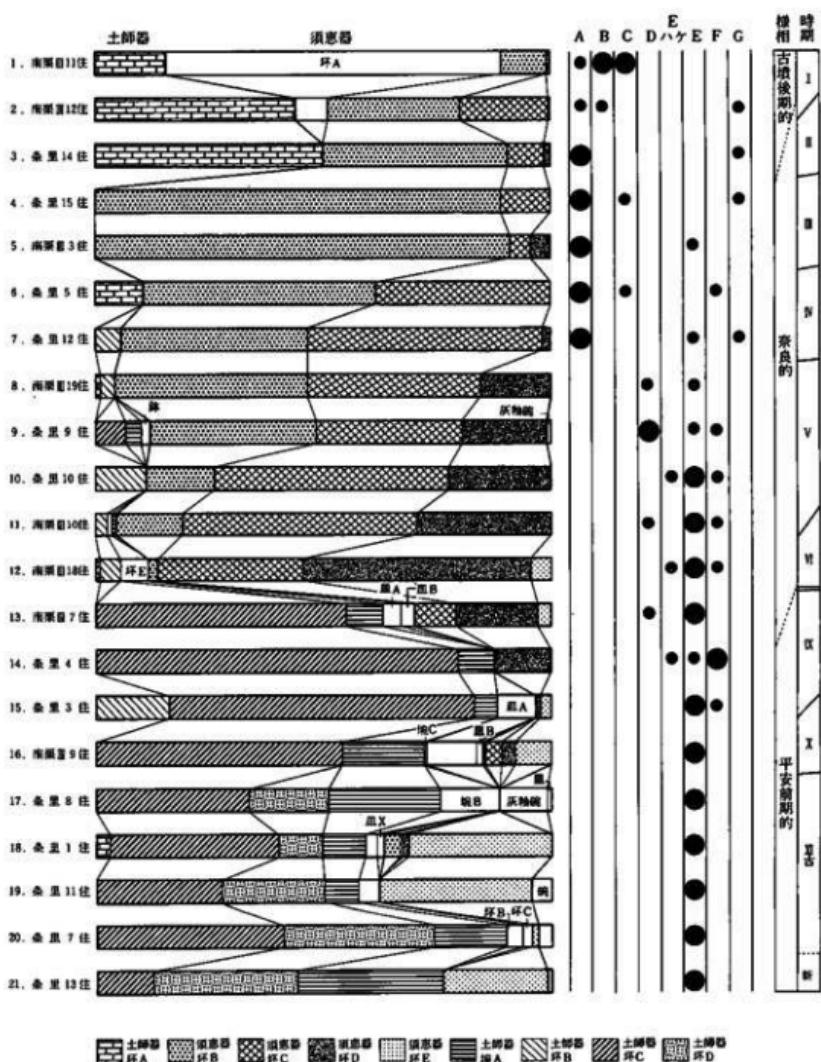
### ③土器群の様相と時期区分

各住居址出土土器群を器種・器形別に計量して提示したのは、今回と南栗遺跡第三次（文献7）のみである。ここでは双方の計量結果を用いて、南栗遺跡第二次（文献6）以来使用している松本市教委の島立地区のI～XIII期の時期区分を再考してみたい。第33図は、上記①の内容に基き、そこに南栗遺跡第三次での結果を挟み込んで、前後の各器種・器形の量的な関係に無理が出ないよう並べたものが左列の横帯グラフ、上記②の土器器窓の構成の変化を、その住居址で主体をなす窓に●印、存在するものに●印を付けて示そうとしたものが右列である。

左列の帶グラフについてさらに触れるなら、前後関係の設定の要因は次のように説明できる。1～3の前後関係は須恵器杯Aと同杯Bの減少・消滅と増加に基く。4・5は前後差ではなく、3と4・5の前後関係は須恵器杯Bの増加に基く。4・5から6、7への移行は須恵器杯Bの減少と同杯Cの増加に基く。8・9はほとんど前後差をもたず、7から8・9への移行の理由は須恵器杯Dの発生・増加である。8・9から10への移行は須恵器杯Bの一層の減少と同杯C・同杯Dの増加による。10と11の前後関係は須恵器杯Dの増加によるが、約6%の伸びは誤差のうちと捉え同時と扱ったほうがよいかもしれない。11と12の前後関係は須恵器杯Bの減少・消滅と同杯Dの増加に基く。ここまで土器群の変遷は、以上のように主要器種・器形の量的な変化が漸移的で整合性を欠くものではなく、妥当なものといえる。ところが13では様相が一変する。今まで扱った資料にこの12と13の間を埋めるものが欠落しているためと考えられる。13以降は器種・器形が増えて複雑な様相を呈し出すが、須恵器杯Dの存在を唯一の12とつながる要素とみて、前後関係の設定ができる。13から15へ向かい須恵器杯Dの減少・消滅、15から17への土器器窓Cの減少、17～20は前後差をほとんど感じないが、土器器窓Dの発生・増加は明らかであり、土器器窓Cがさらに減少する21を最後にもつてくる。

この前後関係設定の操作によって得られた結果に、南栗遺跡第二次（文献6）で定めた時期区分を当時の考えを尊重しながら当てはめると右端欄のI～Xになる。土器器窓を加えた各様相の特徴は次のとおり。

- I：須恵器杯A（蓋杯）がかなりある様相。須恵器杯Bは少量。窓B・C・A・G。
- II：須恵器杯Aがなくなり、土器器窓A・須恵器杯Bが大部分を占める様相。2はI～IIへの移行期。須恵器杯Cはこの頃から存在する可能性が高い。窓はA・B・G。
- III：須恵器杯Bが大部分を占める様相。大局的にみると、II期自体がI期からIII期への移行期とも言える。窓はA・C・E・G。EはAとの中間的なもの。
- IV：須恵器杯Bと同窓Cによって大部分が占められる様相。まだ底面が回転糸切りの須恵器杯Dは出現しない。ここまでに少量ある須恵器杯Dは発掘の段階あるいは本来的な誤差の内にあるもの



第33図 器種組成の変遷

とみる。要はA・C・E・F・G。EはAとの中间的なもの。

V：須恵器壺Dが発生し、これに須恵器壺B・同Cが加わって、3者で大半を占めるもの。壺Bと壺Dの比率の逆転をもって、V期前半とV期後半に二分出来る。本期を中心とした前後する時期に土師器壺Cの前身となる同壺Bが出現している可能性がある。要はD・E・Eハケ・F。

VI：須恵器壺Bが消滅し、同壺Cと同壺Dで大部分が占められる様相。V期から本期の頃、土師器壺Eが少量ともなう可能性がある。要はE・Eハケ・F。

#### VII・VIII：欠落

IX：土師器壺Cが多数を占めるが須恵器壺C・同壺Dもその半分くらい残っている。土師器壺Aは発生している。要はE・F・D。16はX移行期の様相。要はEばかりになる。

X：土師器壺Cが過半を占めるが、同壺A・同皿Aもその半数程度を占める。須恵器壺Eは確実に発生している。要はEのみ。南栗遺跡第二次（文献6）ではこのX期を広く置き過ぎ、次のXI期との断絶が出てしまっている。ここでXI期以降の見直しを図ってみたい。土師器壺Cが多数を占めながらも、同壺Dが発生してある程度の量を占めてくる土器群をもってXI期の前半としたい。帶グラフでは17・18・19が該当するが、17は須恵器壺Eがなぜか欠損しているので、18・19を典型とする。要はEばかりである。後半は土師器壺Dの量がさらに増して同壺Cに入れ替わる。21を一応典型とする。要はEである。

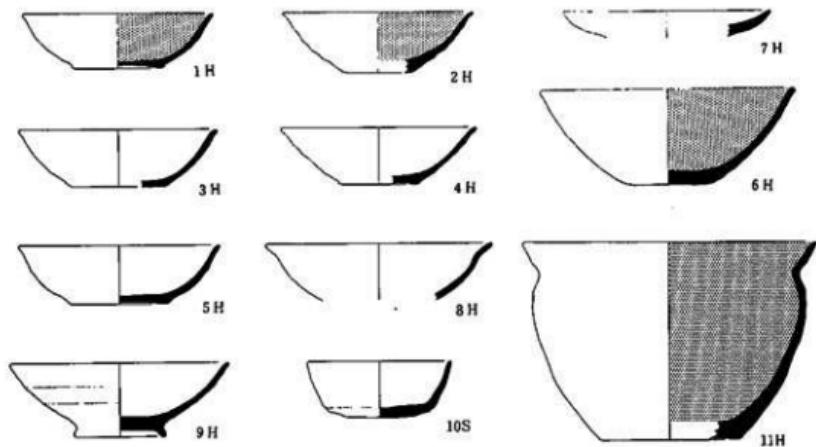
欠落するVII・VIII期の資料は、土器群の計量を経ていないので正確ではないが南栗遺跡第二次（文献6）提示資料、または北栗遺跡（文献8）35住、5住をもって充てられる。そこでは、土師器壺Cの出現・増加・須恵器壺C・同壺Dの減少が語られよう。

以上のI～X（XI）期の区分は、単なる発掘調査で捉えられる土器群の現象面の分析であって、遺構・遺跡の時間上での考察のための物差し、もっと俗に言えば発掘現場のための物差しに過ぎない。土器の様式という内容的により意味をもったものとして捉えるなら、もっと巨視的になる。即ち、土師器非ロクロ壺・須恵器蓋壺の古墳時代後期的様相（I期）、次期移行期（II期）、須恵器壺・有台壺を中心とする奈良時代的様相（III～VII期）、次期移行期（VIII～IX期）、土師器壺・壺・皿を中心とする平安時代前期的様相（IX～XI期）、に統合できる。しかしこの様式的な理解も先の物差しの提示がなければ、仮説に止まり、物語で終えよう。

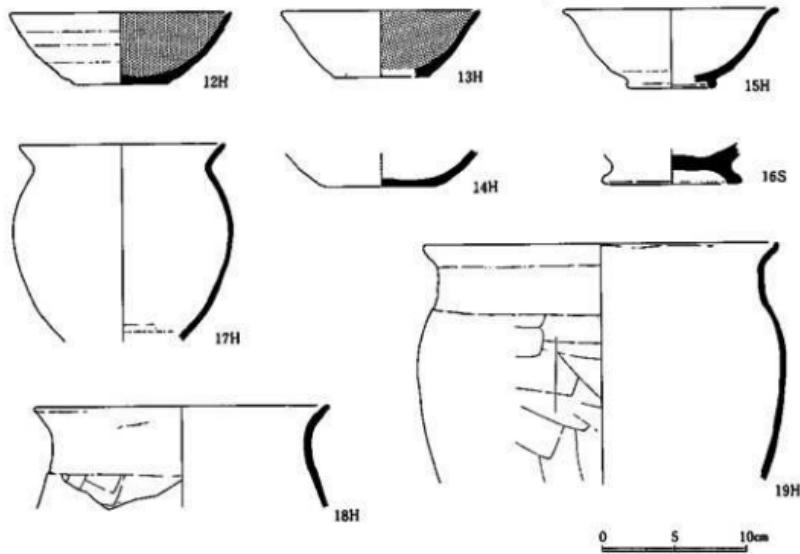
#### 参考文献

- 1 松本市教育委員会 1981「松本市新村条里の遺構」
- 2 松本市教育委員会 1981「松本市御賀戸遺跡」
- 3 松本市教育委員会 1983「松本市新村秋葉原遺跡」
- 4 松本市教育委員会 1984「松本市下神・町神遺跡」
- 5 松本市教育委員会 1984「松本忠島立南栗遺跡」
- 6 松本市教育委員会 1985「松本忠島立南栗・北栗遺跡、高橋中学校遺跡、条里の遺跡」
- 7 松本市教育委員会 1986「松本忠島立南栗遺跡」
- 8 松本市教育委員会 1987「松本市鳥立北栗遺跡、条里の遺跡」
- 9 松本市教育委員会 1987「准備教科書府第一五次調査報告書」
- 10 長野市教育委員会 1983「吉田向井」
- 11 福井市教育委員会 1986「君石遺跡」

第1号住居址

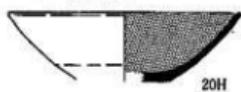


第4号住居址

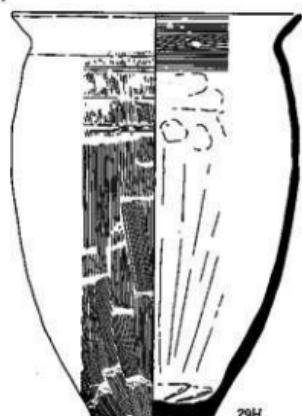
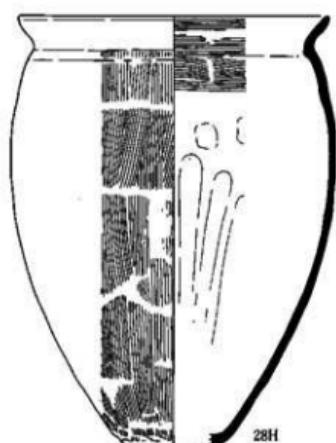
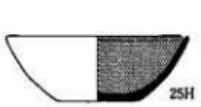
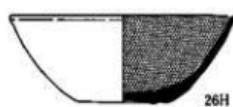


第34図 出土土器(1)

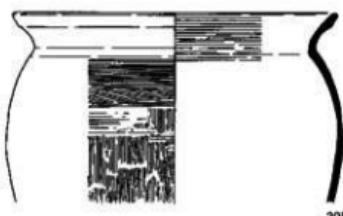
第2号住居址



第3号住居址

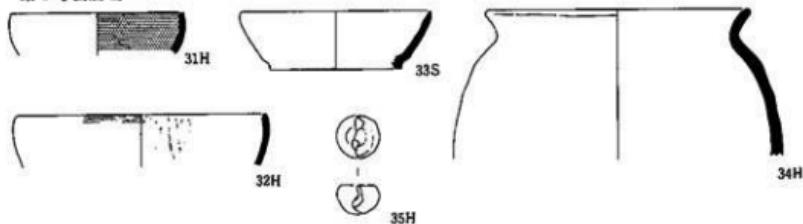


0 5 10cm

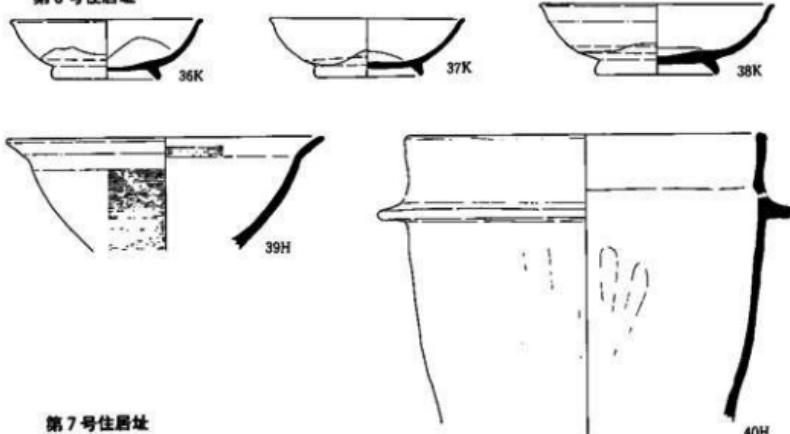


第35図 出土土器(2)

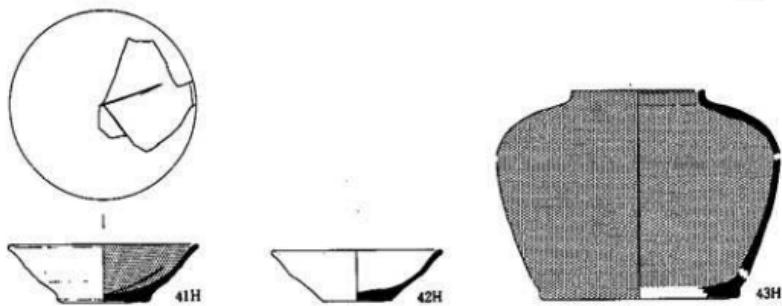
第5号住居址



第6号住居址



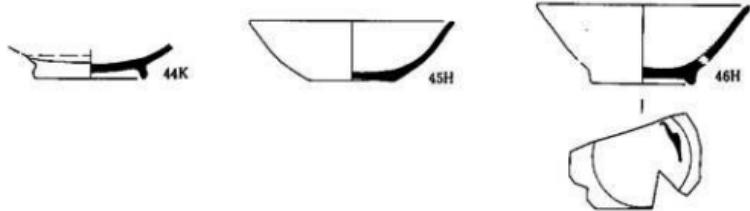
第7号住居址



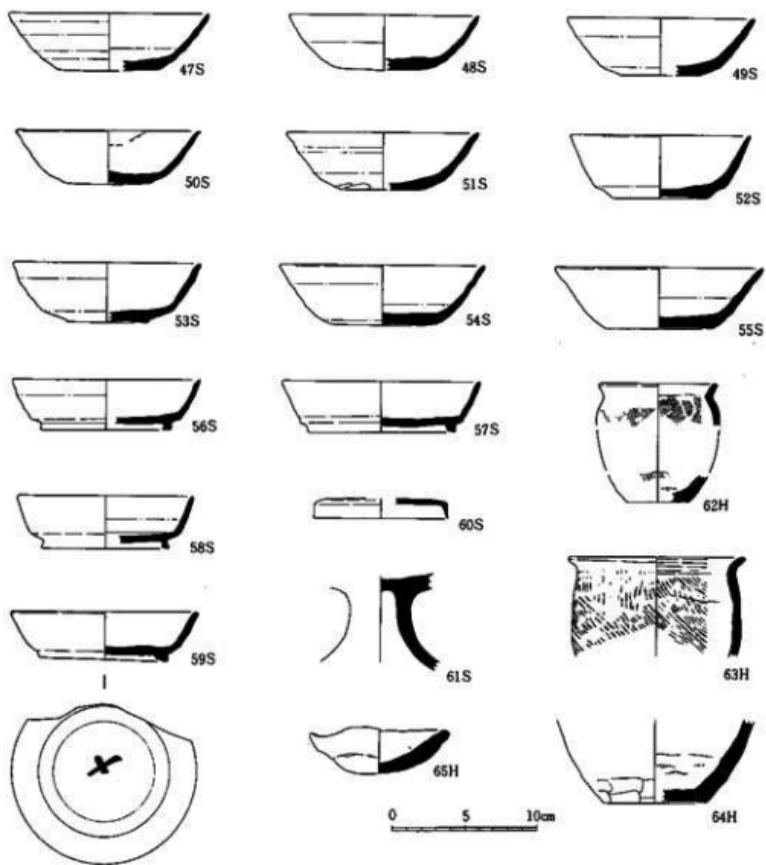
0 5 10cm

第36図 出土土器(3)

第8号住居址

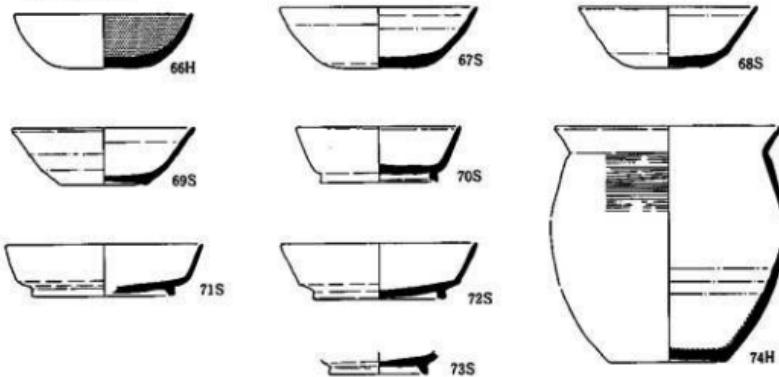


第9号住居址

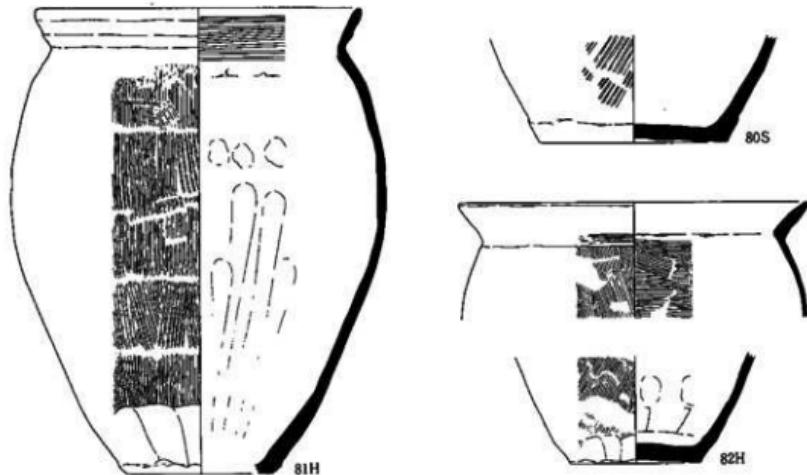
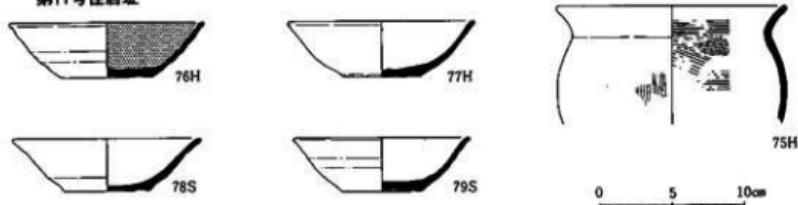


第37図 出土土器(4)

第10号住居址

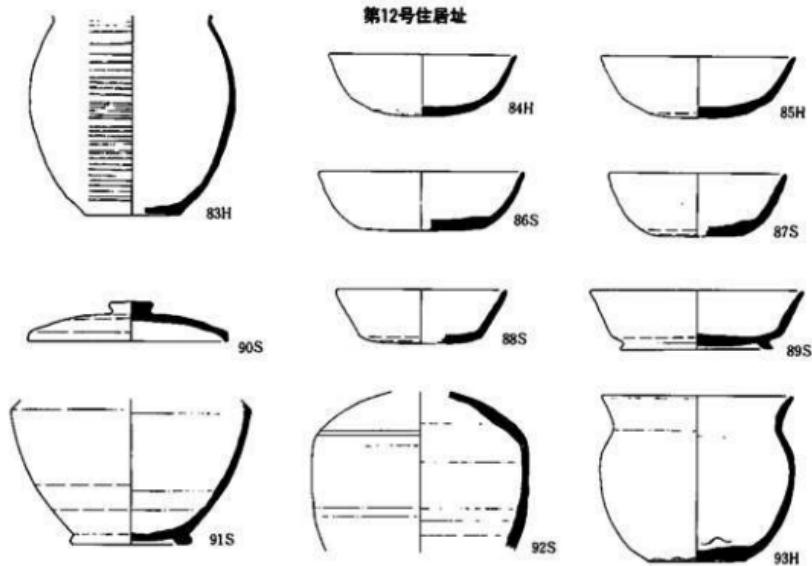


第11号住居址

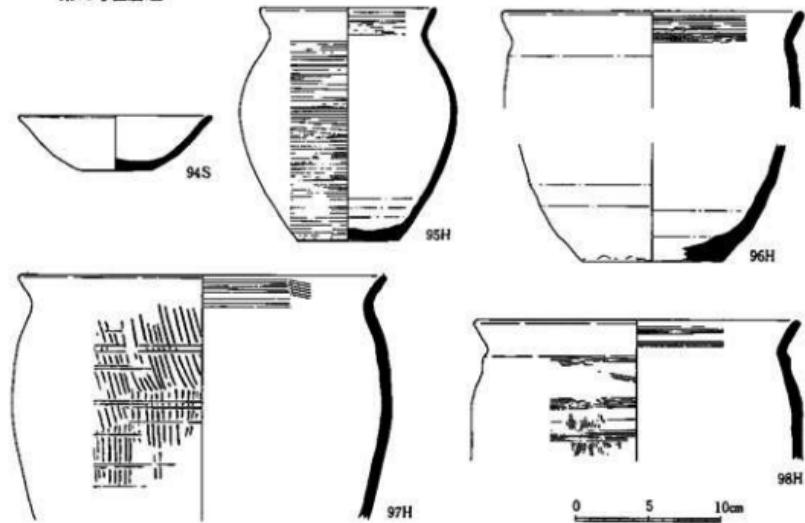


第38図 出土土器(5)

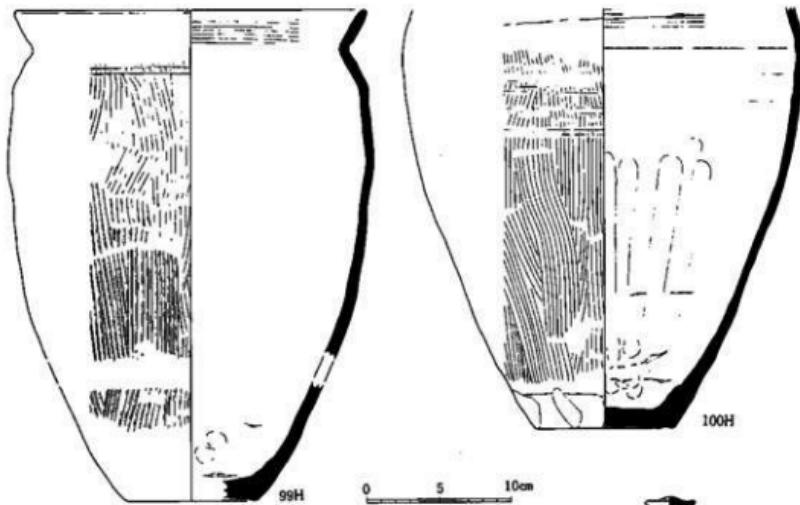
第12号住居址



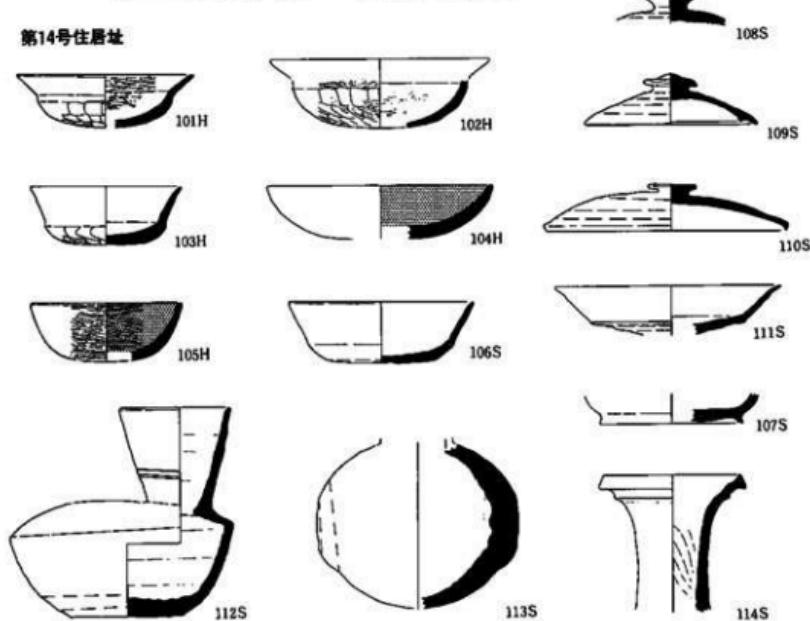
第13号住居址



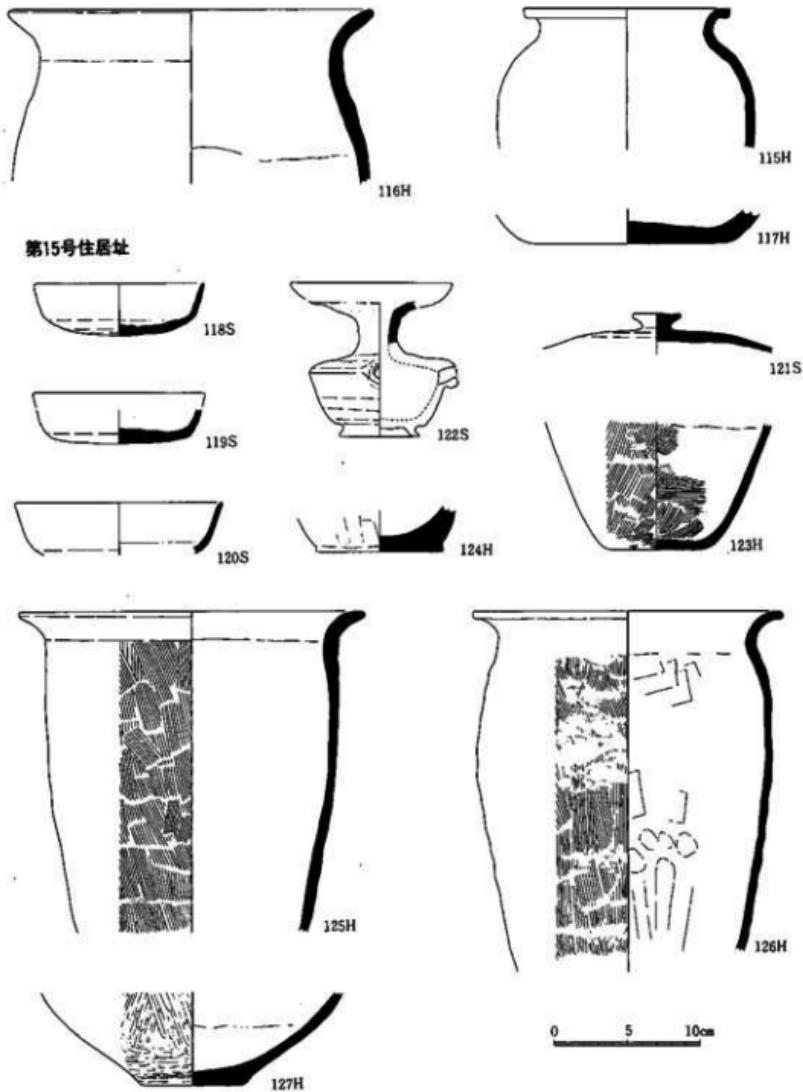
第39図 出土土器(6)



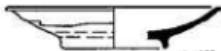
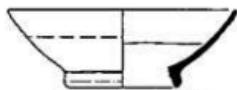
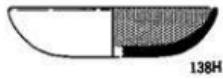
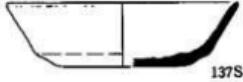
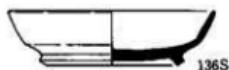
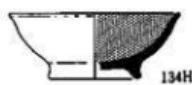
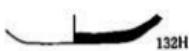
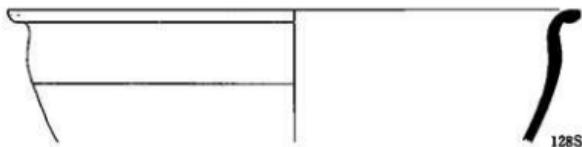
第14号住居址



第40図 出土土器(7)



第41図 出土土器(8)



0 5 10cm

第42図 出土土器(9)

表7

## 出土土器觀察表

No.	出土地點	種 別	形 性	寸 法(cm)	残存度 口部 縁部 壁部 (度数 度数 度数)	色 調		成形・調整・修理の状態	備 考
						外 面	内 面		
1	1住 土器場	Hf-C	13.2 6.4 3.8	%	黄褐色	黄褐色	黄褐色	マクロナゲ、底面削除あり。内面擦れなし。白色毛刷	
2	1住 土器場	Hf-C	13.2 4.8 4.2	%	黄褐色	黄褐色	黄褐色	マクロナゲ、内面：ガサ・白色毛刷	
3	1住 土器場	Hf-C	13.8 6.6 3.95	%	黄褐色	黄褐色	黄褐色	マクロナゲ、底面削除あり。内面擦れなし。白色毛刷	
4	1住 土器場	Hf-D	13.6 5.6 3.9	%	黄褐色-灰褐色	黄褐色-灰褐色	黄褐色	マクロナゲ、底面削除あり。	
5	1住 土器場	Hf-D	14.0 6.6 4.0	%	黄褐色	黄褐色	黄褐色	マクロナゲ、底面削除あり。	
6	1住 土器場	Hf-C 1	17.8 4.8 6.6	%	黄褐色	黄褐色	黄褐色	マクロナゲ、底面削除あり。内面：ガサ(下部剥離状・上半部)・黑色毛刷	
7	1住 土器場	瓦?	14.4	%	灰褐色	灰褐色	灰褐色	マクロナゲ	
8	1住 土器場	Hf-C	15.8	%	灰褐色	灰褐色	灰褐色	マクロナゲ	
9	1住 土器場	Hf-A	15.2 6.4 5.1	%	褐色-棕褐色	褐色-棕褐色	褐色-棕褐色	マクロナゲ、底面-テラコッタのち回転。ダメ	
10	1住 土器場	Hf-B	10.0 7.0 3.9	%	灰褐色-茶褐色	灰褐色-茶褐色	灰褐色	マクロナゲ、底面削除あり。内面擦れなし。白色毛刷	
11	1住 土器場	小罐F	20.4 9.8 13.6	%	灰褐色-茶褐色	灰褐色-茶褐色	灰褐色	マクロナゲ、底面削除あり。内面擦れなし。白色毛刷	
12	4住 土器場	Hf-C	16.6 6.4 4.4	(5)	灰褐色-茶褐色	灰褐色-茶褐色	灰褐色	マクロナゲ、底面削除あり。内面擦れなし。白色毛刷	
13	4住 土器場	Hf-C	13.8 6.6 4.55	%	灰褐色	灰褐色	灰褐色	マクロナゲ、内面：ガサ・白色毛刷	
14	4住 土器場	Hf-C	7.8	%	棕褐色	棕褐色	棕褐色	マクロナゲ、底面削除あり。内面：ガサ(底面・不定方向)・白色毛刷	
15	4住 土器場	Hf-A	15.0 6.2 5.4	%	灰褐色	灰褐色	灰褐色	マクロナゲ、竹葉台・内面：ガサ(底面・不定方向)・黒い斑点も	
16	4住 土器場	壁	9.8	(C)	灰褐色-灰褐色	灰褐色-灰褐色	灰褐色	マクロナゲ	
17	4住 土器場	小罐F	14.2	%	灰褐色-茶褐色	灰褐色-茶褐色	灰褐色	マクロナゲ	
18	4住 土器場	壁F	26.4	%	灰褐色	灰褐色	灰褐色	口縁擦傷・ヨコナゲ、調節用箋タグ・内面ナゲ	
19	4住 土器場	壁F	24.6	%	灰褐色	灰褐色	灰褐色	口縁擦傷・ヨコナゲ、内面擦れなし。内面下から側面削除タグリ痕が複数。内面：ガサ・黑色毛刷	
20	2住 土器場	Hf-A	16.2	%	灰褐色	灰褐色	灰褐色	マクロナゲ、底面削除あり。内面下から側面削除タグリ痕が複数。内面：ガサ・黑色毛刷	
21	3住 土器場	Hf-C	12.5 6.5 4.1	%	灰褐色	灰褐色	灰褐色	マクロナゲ、底面削除あり。内面下から側面削除タグリ痕が複数。内面：ガサ・黑色毛刷	
22	3住 土器場	Hf-B	12.7 5.4 3.95	%	灰褐色-茶褐色	灰褐色-茶褐色	灰褐色	マクロナゲ、底面削除あり。内面下から側面削除タグリ痕が複数。内面：ガサ・黑色毛刷	
23	3住 土器場	Hf-C	13.4 6.2 4.3	%	茶褐色	茶褐色	茶褐色	マクロナゲ、底面削除あり。内面擦れなし。白色毛刷	外表面基層(大)
24	3住 土器場	Hf-C	13.4 5.0 4.4	%	茶褐色	茶褐色	茶褐色	マクロナゲ、底面削除あり。内面擦れなし。白色毛刷	
25	3住 土器場	Hf-C	12.6 5.7 4.5	%	茶褐色	茶褐色	茶褐色	マクロナゲ、底面削除あり。内面擦れなし。白色毛刷	
26	3住 土器場	Hf-C 1	15.7 6.2 6.0	%	茶褐色	茶褐色	茶褐色	マクロナゲ、底面削除あり。内面：ガサ(下部剥離状・上半部)・白色毛刷	
27	3住 土器場	Hf-A	13.4 7.0 3.25	%	茶褐色	茶褐色	茶褐色	マクロナゲ、底面削除あり。内面：ガサ・白色毛刷	
28	3住 土器場	Hf-E	21.5 6.6 29.6	%	茶褐色	茶褐色	茶褐色	口縁擦傷・ヨコナゲ、内面擦れなし	
29	3住 土器場	Hf-E	20.0 8.3 28.0	%	茶褐色	茶褐色	茶褐色	口縁擦傷・ヨコナゲ、内面擦れなし	
30	3住 土器場	Hf-E	22.5	%	茶褐色	茶褐色	茶褐色	口縁擦傷・ヨコナゲ、内面擦れなし	
31	5住 土器場	Hf-A	12.0	%	灰褐色	灰褐色	灰褐色	ヨコナゲ、内面擦れ・白色毛刷	
32	5住 土器場	Hf-A	17.4	%	灰褐色	灰褐色	灰褐色	ヨコナゲ、内面擦れ・白色毛刷	
33	5住 土器場	Hf-C	13.2 9.2 4.3	%	灰褐色	灰褐色	灰褐色	ヨコナゲ、竹葉台	

No.	出土場所	種別	縦形	寸	生(cm)	根深さ 口徑 (底面) (底面)	外・内面		成形・開削・形成の特徴		備考
							表面	底面	表面	底面	
34	5住	土器物	壺G	18.4	—	(2.6)	X	無	無	無	ナメコナデ
35	5住	土器物	手平わ	(3.8)	—	(2.6)	無	無	無	無	ナメコナデ、外周部底下と底面内周部底下を切り取る。面削り跡
36	6住	武藏物	壺	13.4	7.5	4.1	X	無	無	無	ナメコナデ、外周部底下と底面内周部底下を切り取る。面削り跡
37	6住	武藏物	壺	13.5	7.5	4.0	X	無	無	無	ナメコナデ、外周部底下と底面内周部底下を切り取る。面削り跡
38	6住	武藏物	壺	15.3	8.5	4.8	X	無	無	無	ナメコナデ、外周部底下と底面内周部底下を切り取る。面削り跡
39	6住	土器物	舟形	22.0	—	X	無	無	無	無	ナメコナデ、外周部底下と底面内周部底下を切り取る。面削り跡
40	6住	土器物	舟形	25.0	—	X	無	無	無	無	ナメコナデ、外周部底下と底面内周部底下を切り取る。面削り跡
41	7住	土器物	壺C	13.2	6.2	4.0	X	無	無	無	ナメコナデ、底面底を切り、内面底を削り、周辺部にカット痕
42	7住	土器物	壺D	11.9	4.8	3.5	X	無	無	無	ナメコナデ、底面底を切り
43	7住	土器物	瓶形	9.2	13.4	14.3	X	無	無	外曲	ナメコナデ、内面底を削り、外周部黑色基質
44	8住	武藏物	壺	9.6	7.4	—	X	無	無	無	ナメコナデ、外周部底下と底面内周部底下を切り取る。面削り跡
45	8住	土器物	壺D	14.2	6.0	4.1	X	無	無	無	ナメコナデ、底面内周部底下を切り取る。面削り跡
46	8住	土器物	壺C	14.8	7.0	5.4	(X)	無	無	無	ナメコナデ、底面底を切り、内面底を削り、外周部
47	9住	土器物	平B	12.8	5.8	3.7	X	灰	灰	無	ナメコナデ、底面底を削り
48	9住	土器物	平B	13.1	6.3	3.8	X	灰	灰	無	ナメコナデ、底面底を削り内面底を削り
49	9住	土器物	平B	13.0	5.6	3.9	X	灰	灰	無	ナメコナデ、底面底を削り内面底を削り
50	9住	土器物	平B	14.8	6.0	3.7	X	無	無	無	ナメコナデ、底面底を削り
51	9住	土器物	平B	13.1	5.9	4.0	X	灰	灰	無	ナメコナデ、底面底を削り、外周部底下を削り
52	9住	土器物	平D	12.4	6.6	4.35	X	無	無	無	ナメコナデ、底面底を削り
53	9住	土器物	平D	13.0	5.6	4.1	X	無	無	無	ナメコナデ、底面底を削り
54	9住	土器物	壺D(?)	14.2	7.6	4.15	X	灰白	灰白	無	ナメコナデ、底面底を削り
55	9住	土器物	壺D	14.4	7.4	4.2	X	無	無	無	ナメコナデ、底面底を削り
56	9住	土器物	壺C	13.0	9.0	3.5	X	無	無	無	ナメコナデ、底面底を削り
57	9住	土器物	壺C	23.8	10.3	3.55	X	灰	灰	無	ナメコナデ、底面底を削り
58	9住	土器物	壺C	12.2	8.8	3.8	(X)	灰	灰	無	ナメコナデ、底面底を削り
59	9住	土器物	壺C	13.0	8.8	3.25	X	無	無	無	ナメコナデ、底面底を削り
60	9住	土器物	壺E	9.4	—	X	灰白	灰白	無	無	ナメコナデ、底面底を削り
61	9住	土器物	壺E	—	—	—	無	無	無	無	ナメコナデ、内面底を削り
62	9住	土器物	小壺C	6.2	4.2	0.2	X	無	無	無	ナメコナデ、内面底を削り
63	9住	土器物	小壺C	12.2	—	—	X	無	無	無	ナメコナデ、内面底を削り
64	9住	土器物	小壺D	—	—	—	(X)	無	無	無	ナメコナデ、内面底を削り
65	9住	土器物	手平ね	9.7	—	3.1	完	無	無	無	ナメコナデ、内面底を削り
66	10住	土器物	壺	12.4	5.5	3.8	X	無	無	無	ナメコナデ、底面底を削り

No.	出土地点	種 別	形 状	寸 法(cm)	質 様 (通常)	横断面		成形・開性・別種の特徴	
						外 壁	内 壁	外 壁	内 壁
67	10住	瓦器類	坪B	13.6 6.9 4.2 (5)	灰	灰一側斜面	灰一側斜面	ロコロナギ、底面へラ切りのち底面レギリ	
68	10住	瓦器類	坪D	12.4 4.8 4.2	X	底灰	灰灰	ロコロナギ、底面斜面を切り	
69	10住	瓦器類	坪D	12.7 6.3 3.9	X	灰	灰	ロコロナギ、底面斜面を切り	
70	10住	瓦器類	坪C	11.4 6.2 3.8	X	灰白	灰	ロコロナギ、底面中央にへたり頭を残し底は斜面レギリ・付高台	
71	10住	瓦器類	坪C	13.6 10.0 3.6	X	灰	底灰一灰	ロコロナギ、底面斜面レギリ・付高台	
72	10住	瓦器類	坪C	13.5 9.3 3.4	X	底灰灰	灰灰	ロコロナギ、底面斜面レギリ・付高台	
73	10住	瓦器類	坪C	6.8 (8)	灰	底灰灰	灰灰	ロコロナギ、底面中央に斜面を切り灰・外側に付高台	
74	10住	土器類	小切邊E	15.0 8.1 16.2	X	削薄一端	底灰	ロコロナギ、断面外斜面カギナ、底面斜面丸み付リ	下半部特に多量の鉛分
75	10住	土器類	小切邊C	15.0	X	底灰	灰灰	ロコロナギ、断面外斜面カギナ・内面側面ハタメナ	
76	11住	土器類	坪C	13.5 6.3 3.8	X	灰	灰	ロコロナギ、底面斜面ハタメ、内面側面ハタメ(下部斜面付・上半部)・底色乳黄	
77	11住	土器類	坪C	13.0 5.3 3.8	X	底灰	底灰	ロコロナギ、底面斜面ハタメ切り・内面側面かみに残りナガナ	
78	11住	瓦器類	坪E	13.0 6.0 3.65	X	底灰灰	底灰灰	ロコロナギ、底面斜面ハタメ	鉛灰不純
79	11住	瓦器類	坪E	12.3 5.5 3.8	X	底灰灰一底灰	底灰灰	ロコロナギ、底面斜面を切り	鉛灰不純
80	11住	瓦器類	四方切?	13.1 (CM)	X	底灰灰	底灰灰	ロコロナギカギナ・内面ナゲ	鉛灰不純
81	11住	土器類	壁E	22.7 10.0 32.2	X	底灰	底灰	ロコロナギカギナ・内面カギナ・断面外斜面ハタメ・内面側面ハタメ・外腹下端側アベリ	
82	11住	土器類	壁E?	29.4 9	X	高灰	底灰	ロコロナギカギナ・内面カギナ・外腹下端側ハタメ・下部斜面ハタメ・付高台	
83	11住	土器類	小切邊E	6.5 (CM)	X	底灰灰	底灰灰	ロコロナギカギナ・内面カギナ・底面回転ナゲ	
84	12住	土器類	坪B	13.0 6.9 4.25	X	底灰	底灰灰	ロコロナギ、底面斜面ハタメ	鉛灰等付
85	12住	土器類	坪B	13.4 6.8 4.7	X	底灰	底灰	ロコロナギ、底面斜面ハタメ	鉛灰等付
86	12住	瓦器類	坪B	14.2 7.3 4.0	X	底灰灰一圓灰	底灰灰	ロコロナギ、底面斜面ハタメ	鉛灰等付
87	12住	瓦器類	坪B	12.3 6.4 4.8	X	底灰灰	底灰灰	ロコロナギ、底面斜面ハタメ	鉛灰等付
88	12住	瓦器類	坪B	11.4 6.8 2.7	X	灰	灰	ロコロナギ、底面斜面ハタメ	鉛灰等付
89	12住	瓦器類	坪E	14.7 10.5 4.1	X	灰	灰	ロコロナギ、底面斜面ハタメ・付高台	
90	12住	瓦器類	壁C	13.7 一 2.8	X	灰	灰	ロコロナギ、底面斜面ハタメ	
91	12住	瓦器類	長板邊B	8.4 (8)	X	底灰	底灰	ロコロナギ、底面斜面ハタメ	
92	12住	瓦器類	長板邊	25.5	X	底灰	底灰	ロコロナギ、底面斜面ハタメ	
93	12住	土器類	小切邊D	13.2 6.8 11.4	X	高灰	底灰灰	ロコロナギ、側面ナゲ	
94	13住	瓦器類	坪E	13.4 5.0 2.8	X	灰灰白	底灰一端	ロコロナギ、底面斜面を切り	
95	13住	土器類	小切邊E	12.2 7.0 16.1 (92)	X	底灰灰	高灰	ロコロナギ、口縁斜面・断面外斜面カギナ・底面斜面	
96	13住	土器類	小切邊?	21.0 9.8	X	底灰灰一底灰	底灰灰一端	ロコロナギ、口縁斜面	
97	13住	土器類	壁E	22.6	X	底灰灰一端	底灰灰一端	ロコロナギカギナ・内面側面ハタメ	
98	13住	土器類	壁E	24.4 9.0 33.8	X	底灰一底灰	底灰一底灰	ロコロナギカギナ・内面側面ハタメ	
99	13住	土器類	壁E	24.4	X	底灰一底灰	底灰一底灰	ロコロナギカギナ・内面側面ハタメ	

No.	出土地點	種	別	形	寸	径(cm) 口径 (底径)	底形	色	質	成形・調製・施加の特徴		備考
										外	内	
100	13住	土器	圓E	直	9.6	(3.6)	直	青釉-青瓷	青釉	側面外腹面のハコツ、下腹側のタブリ、内底に横カキメ、上半周のテグス、下半周のタグ、底部指サナ		
101	14住	土器	平A	12.2	-	(3.6)	X	青釉-青瓷	青釉	口縁コナデ後内腹面(タグ)、先端外腹手舟舟サズリ、内底端(タグ)		
102	14住	土器	平A	-	(3.7)	-	X	青釉	青釉	外腹手舟舟サズリ(タグ)、内底端(タグ)		
103	14住	土器	平A	10.6	(5.0)	4.1	X	青釉-青	青釉	口縁コナデ、側面外腹手舟舟サズリ(位はつきりタグ)、内底(タグ)	内底タム状のもの有る	
104	14住	土器	平A	15.6	-	(4.6)	X	灰釉-灰	灰	口縁コナデ、側面外腹手舟舟サズリ(タグ)、内底(タグ)		
105	14住	土器	平A	10.6	-	(4.0)	X	青釉-青	青	口縁コナデ、側面外腹手舟舟サズリ(タグ)、内底(タグ)		
106	14住	土器	平B	12.8	7.6	4.1	(3.7)	灰白	灰白	口縁コナデ、底面(タグ)切り未施加		
107	14住	土器	平C	-	9.8	(4.7)	X	灰	灰	口縁コナデ、底面端(タグ)・竹台		
108	14住	斎輪物	盤B?	-	-	-	青釉	青釉	青釉	天井部切削(タグ)	無底不肩	
109	14住	斎輪物	蓋B	12.0	-	3.5	(3.7)	灰灰	灰	天井部切削(タグ)、内底(タグ)、かきりセラフ		
110	14住	斎輪物	蓋C	16.4	-	3.3	(4.1)	青-灰	青-灰	天井部切削(タグ)、内底(タグ)	天井部切削自然地	
111	14住	斎輪物	高片	-	15.4	-	X	青灰	青灰	口縁コナデ、牙根部削除(タグ)		
112	14住	斎輪物	平瓶	8.0	8.0	14.4	(3.5)	灰白	灰白	口縁コナデ、側面(タグ)から底面削除サズリ、底部に北派2本、周縁に快	上面施色自然地	
113	14住	斎輪物	フタヨコ瓶	-	-	(3.8)	X	灰	灰	側面(タグ)、口縁コナデ、側面(タグ)		
114	14住	斎輪物	フタヨコ瓶	9.4	-	X	灰白	灰白	口縁コナデ、内底(タグ)、口縁端下に凸筋	自然地自然地		
115	14住	斎輪物	底口盤	14.2	-	X	灰	灰	口縁コナデ	無底不肩		
116	14住	土器	蓋A	20.2	-	-	青釉	青釉	口縁コナデ、脚出サズリ			
117	14住	土器	圓G	-	13.8	(3.7)	青	青	アザ、底面水滴状			
118	15住	斎輪物	平B	11.6	10.0	3.4	X	灰白	灰白	口縁コナデ、底面(タグ)切り後焼成タグ		
119	15住	斎輪物	平B	-	18.0	(X)	青灰	青灰	口縁コナデ、底面端(タグ)			
120	15住	斎輪物	平C?	14.4	-	X	青釉-青	青釉	口縁コナデ			
121	15住	斎輪物	蓋C	-	-	-	X	青	口縁コナデ、天井部削除(タグ)			
122	15住	斎輪物	壺	-	5.6	(1.6)	深鉢形	口縁端(タグ)から底面削除サズリ、内底(タグ)	青釉			
123	15住	土器	小舟持	6.9	(6.7)	青釉-青	青釉	青釉	外腹端(タグ)、内底端(タグ)、底面(タグ)	無底不肩		
124	15住	土器	蓋A	8.8	(3.7)	青釉	青釉	青釉-青	外腹端(タグ)、内底端(タグ)、底面(タグ)	無底不肩		
125	15住	土器	蓋A	24.0	-	X	青釉	青釉	口縁コナデ、側面外腹斜(タグ)・内底(タグ)			
126	15住	土器	蓋A	21.5	-	空	青釉	青釉	口縁コナデ、側面外腹斜(タグ)・内底(タグ)			
127	15住	土器	蓋G	-	7.2	(X)	青釉	青釉	青釉	口縁端(タグ)、内底(タグ)		
128	15住	斎輪物	底E	-	39.6	-	青釉	青釉	青釉	口縁コナデ	無底不肩	
129	小屋2	斎輪物	平E	14.2	6.4	3.5	X	青釉-青	青釉	天井部切削(タグ)、底面(タグ)	無底不肩	
130	小屋2	斎輪物	平E	13.0	6.0	3.5	X	青釉-青	青	口縁コナデ		
131	小屋2	斎輪物	平E	-	5.6	(3.8)	X	青	口縁コナデ、底面(タグ)切り未施加			
132	小屋2	土器	平C	-	7.6	(8.6)	青釉-青	青釉	青釉	口縁コナデ、底面(タグ)切り未施加		

No.	出土地点	種	判別	寸	底(cm)	側面質	色	縁	走歩・調査・整理の特徴	備考	
				口徑	底径	壁高	内面	外面			
133	小塙2	土器	嘴A	6.8	(6.7)	絶厚	黒	ロクロコナガ、底面凹凸あり・付高付、内面滑な「ダヤ(深鉢式)・黑色毛唇			
134	小塙2	土器	嘴A	12.0	6.4	4.5	(4.7)	浅鉢縁・黒	ロクロコナガ、底面凹凸あり・付高付、内面「ダヤ(深鉢式)・黑色毛唇		
135	小塙2	土器	小付縁E	13.2	7.0	10.0	(10.7)	底滑・直縁	黒褐	ロクロコナガ、口縁内面・脚部外腹カヌ、底面削れ切?	
136	P 24	壺	付C	14.4	9.9	3.8	(3.6)	茶灰	絞理・茶灰	ロクロコナガ、底面三セキズ・付高付	
137	P 24	壺	付B	16.2	12.0	4.4	X	灰	ロクロコナガ、底面手ぬちタメリで底盤との境界をせりう、内面下端な「ダヤ(深く脚万円)・黑色毛唇		
138	楕	土器	付B	14.4	9.6	3.4	X	底滑	ロクロコナガ、底面手ぬちタメリで底盤との境界をせりう、内面下端な「ダヤ(深く脚万円)・黑色毛唇		
139	楕	瓦輪輪胎	施	16.0	7.8	5.3	(5.7)	天白	透明	ロクロコナガ、底部外周に半切紙タメ・付高付	
140	楕	瓦輪輪胎	施	15.0	7.2	2.6	(2.7)	灰白	透明・滑	ロクロコナガ、底面外周に半切紙タメ・付高付	
141	楕	瓦輪輪胎	底割窓A	9.2	(8.5)	天	灰	ロクロコナガ、底面中央にみ切引窓を有し底面アキラで田園タメリ・付高付	粗灰色ガラス状自然縫		

## 2 鉄器、土製品、その他

鉄器は16点出土している。これらはすべて住居址から出土、14、15号両住居址で全体の7割を占める。又7号住居址以外の5基は奈良時代後半迄の住居址である。

刀子は5点、2、5、7、12、13である。2は芯金と包鉄が鋸びにより離れて見える。鍛造技術の低さによるものだろうか。又造りにも違いが見え5は刃闌を設けたもの、7は基から闌を造らずに身部へ移ってゆくもの、12は完形の両闌造りのものである。茎が大きく本来は身も長く、使用と研ぎ減りにより短小化してしまったものと推測する。13は長い茎が見え身との間に円形の柄の貴金属らしきものが付いている。

3、4は一見完形のようであるが、3はベルトの尾端としては留針と環状の一部を欠いている。

6は斧である。刃部は着柄部より幅広く、刃先は研ぎ減りにより丸みをもち全体的にごろんとしている。造りは棒状となるが鋸びが厚く、袋の大きさ合せ目など分らない。

8は針としている。緩やかに弯曲し両端は一方細く尖り、一方は平たく蝶風の様を呈する。

14は棒状のものである。一方は完形で片端を欠くが大形のこの種のものは製品というより工具として考えている。

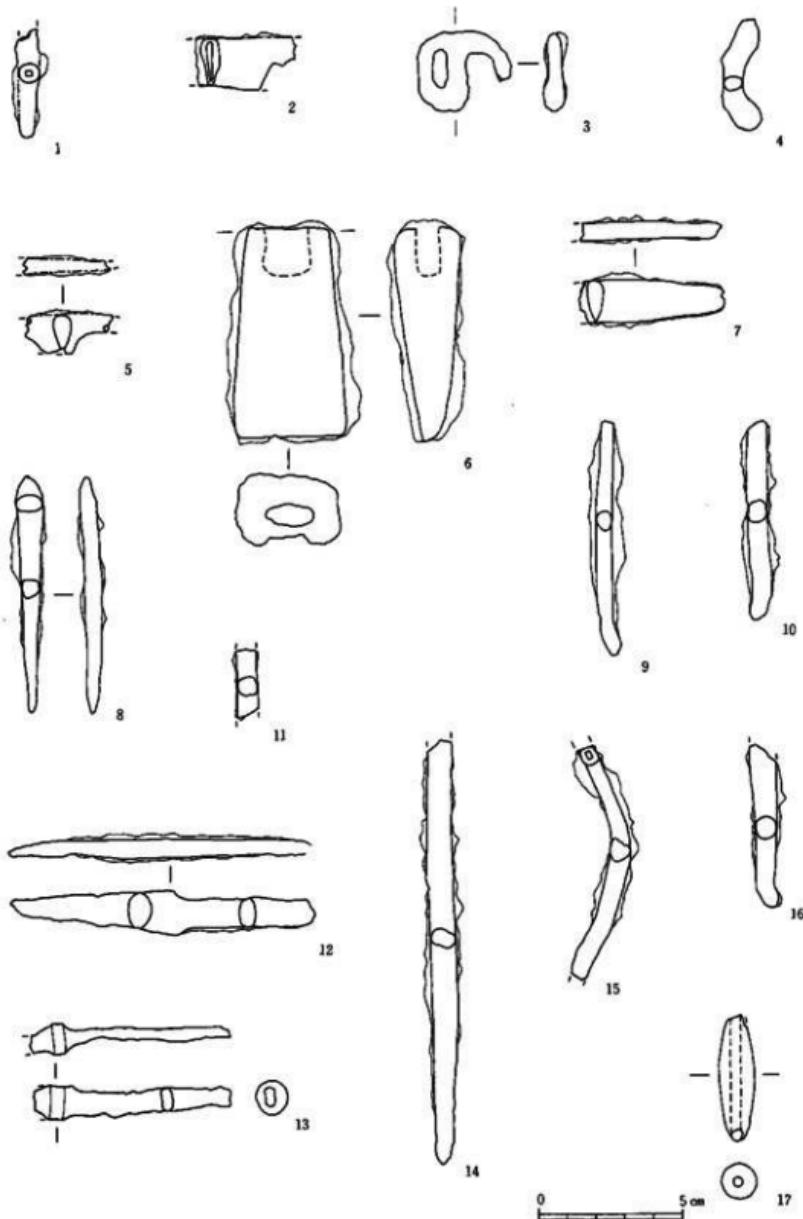
又1、9、10、11、15、16などは棒状を呈しており、9、10は完形である。断面形はほとんどが円形であり頭部を明確に見せていないものもない事から、釘として断定できるものはない。

土製品としては唯1点小形の土錐が14号住居址より得られたのみである。

この他には石器として2地区南側検出面において縄文時代打製石斧片1点を得たのみであり、この時期に時折見かける砥石は今回は1点も出土しなかった。

表8 鉄器、土製品一覧表

図 No.	出土遺構	種別	長さ (mm)	幅(mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備 考
1	5住		(37)	12	8	3.98	断面円形
2	7住	刀子	(35)	18	7	9.10	芯金と包鉄がはっきりわかる
3	7住		27	32	8	5.33	ベルトの尾端風
4	9住		38	11	5	4.28	弯曲したもの
5	12住	刀子	(30)	7	15	3.62	
6	14住	斧	76	46	25	138.56	完形、鍔厚く、穴の大きさ不明瞭、もっと大か?
7	14住	刀子	(50)	14	8	9.84	芯鉄と包鉄の状態が見える
8	14住	針	82	11	8	8.10	完形、鍔か
9	14住		81	12	11	12.20	
10	14住		68	12	8	13.00	
11	14住		(24)	8	7	2.69	
12	15住	刀子	106	15	9	14.75	完形
13	15住	刀子	(68)	11	10	6.45	左側に見える“こぶ”状のものは、裏面を固めた鍔金物か
14	15住		(146)	14	8	21.87	欠損部よりみると芯鉄に包鉄を巻いてる。工具の一例か
15	14住		(82)	12	8	16.23	片断面、四角形(6 mm)片断面円形
16	15住		(56)	11	8	2.63	
17	14住	土錐	43	12	12	(5.71)	



第43図 出土鉄器・土製品

## 第4章 まとめ

今回の調査では北へ行く程西方からの梓川の影響が活発になっており、6・7地区が特にその堆積を高く残している。この南側ではそれに伴った砂質土が4地区まで広がり、北側へは礫と砂質土とが交互に9地区遡現され、松電上高地線を越え更に北へ礫が中心となって続くようである。

遺構は1・2地区に多く中でも2地区的南側では特に集中している。住居址は古墳時代末期の遺物を出土する14を1番古いものとし、平安時代中期の7をその下限とする。個々に見ると14は唯1基他の住居址とは向きを違えるものであった。又2地区北端に離れて所在する10は壁際床面上に石を運らせており、壁板の押さえ用に置いたものと思われる。建物址は9基あり、ビットからの遺物は少ないとその規模と棟方向とにより櫛列を含め大きく2・3時期に分けられよう。

遺物については土器に土師器、須恵器、灰釉陶器、少量の綠釉陶器などを見るがほかに唯1点の越州窯青磁と思われるものがあった。

なお今回も表題に掲げた条里的遺構に関してであるが、3本確認した溝の1・2を見ると、これは溝の項目で触れたように現在境沢から分流した水路の原形と思われるもので溝の東側には5、14、15といい古い時期の住居址とビット群が位置し、西に新しい1～4号住居址が所在する。今回の調査では時期的にこの両者間の平安時代前期の遺構が欠けており、溝2はこの欠陥時期に近いものではなかろうか。付近に先年遡行なわれた長野自動車道の調査でもこの時期に以下の特徴的な傾向を見ている。

『遺構の占地場所が大きく変動する時期である。中略、堀川に近い北地区や遺跡南部の最も標高の高いところに竪穴住居址の重複が著しく、以下略』(南栗遺跡) 『中略、微高地を中心として遺構が集中するのに対し、微高地間の低地部分ではほとんど遺構が検出されない。以下略』(北栗遺跡) 『中略、河川堆積物に由来する微高地を、選択的に住居址として占地するようになる。以下略』(三の宮遺跡)注1

自然環境によるものなのか、或いは居住地域を限定せしめる条件が他に有ったのか、島立地区内全体での検討を必要とする。

なお5地区においても平安時代中期の遺物と遺構を見ている。以後の調査では密度は薄くなるものの2地区から西へ遺構が確認、調査されており、ここに安定した土質から西より北方向へ遺構が続いている。5地区はその北限に近い地と推定する。

注1「長野県埋蔵文化財センター年報3」 長野県埋蔵文化財センター 1986



# 図 版



1地区  
(南から)



2地区 発掘前  
(北から)



2地区  
(南から)



3地区  
(南から)



4地区  
(北から)

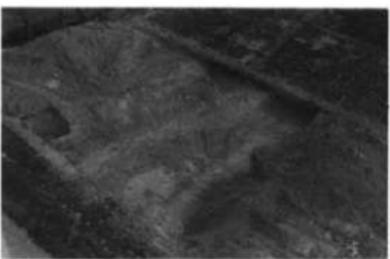


5地区  
(南から)

第1図版 調査地・作業風景



前年度調査分～6地区  
(北から)



8地区



9地区



調査風景



1地区  
(南から)

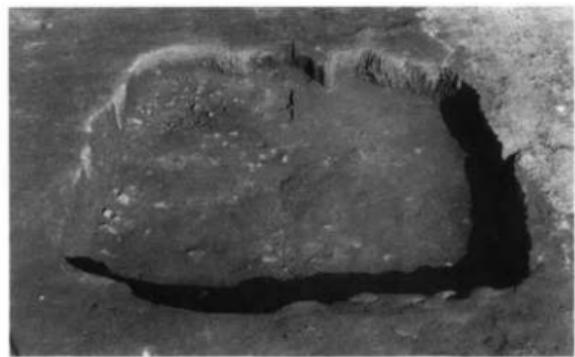


1地区 南側  
(北から)

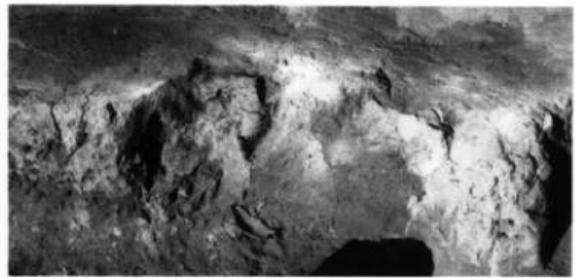
第2回版 調査地・作業風景



1住 遺物出土状況  
(南から)



1住  
(南から)



同 カマド

第3図版 住居址 (1)



2・3住  
遺物出土状況  
(東から)



3住  
遺物出土



4住  
遺物出土状況  
(西から)



2～4住  
(南から)



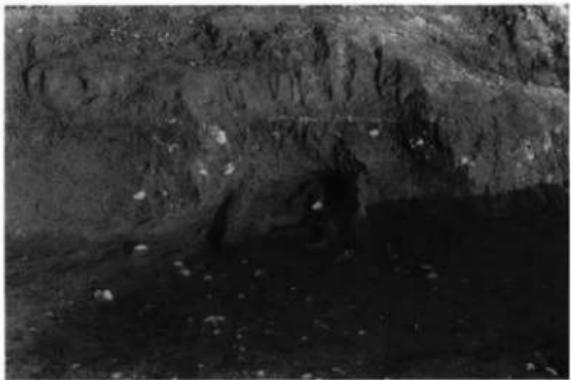
4住  
(西から)



4住  
カマド・煙道



5住  
(西から)



同 カマド



6・7(手前)住  
遺物出土状況  
(東から)



6・7住  
(東から)



6住  
(カマド)

第7図版 住居址 (5)



8住  
遺物出土状況  
(北から)



8住  
(西から)



同 カマド



9住

遺物出土状況

(西から)



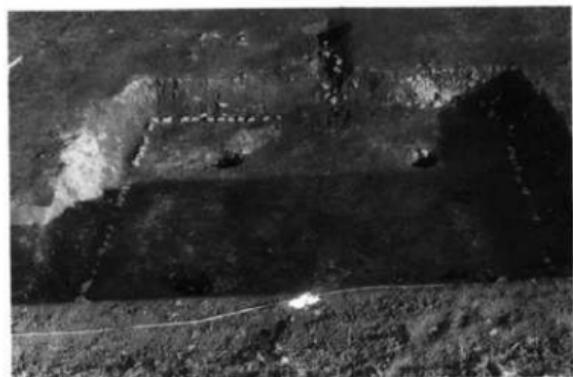
9住

遺物出土

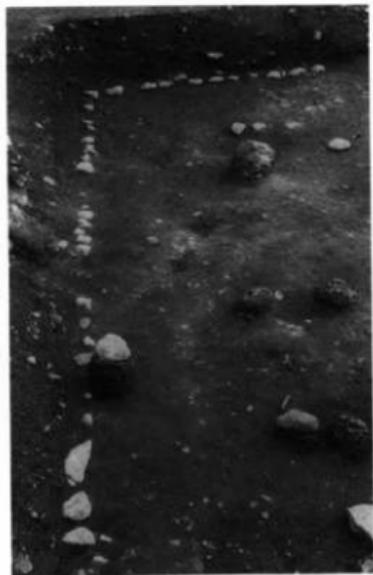


9住

(西から)



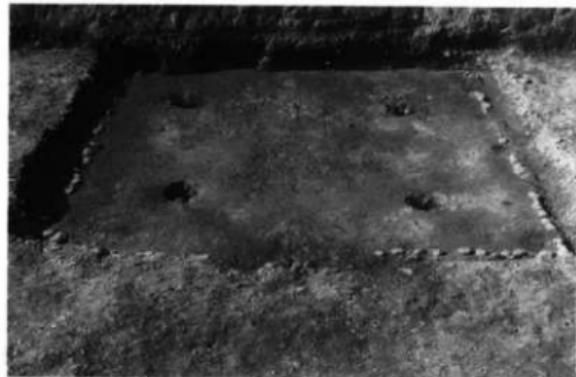
10住（西から）



10住  
北壁側



10住  
東壁側



10住  
(東から)



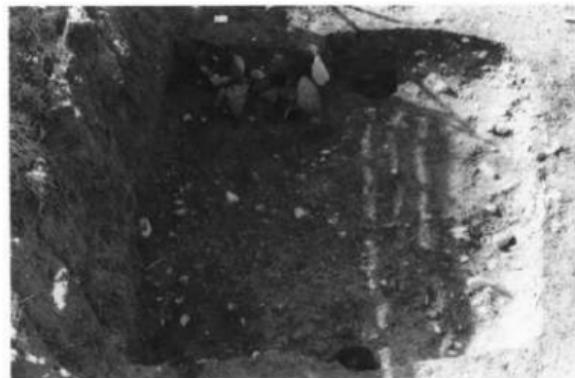
同 カマド・煙道



10住  
遺物出土



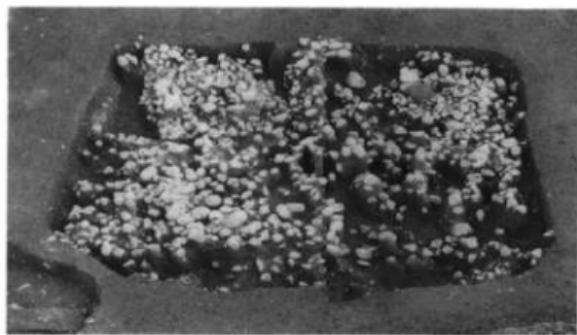
11住  
遺物出土状況  
(東から)



11住  
(東から)



同 カマド



12住

遺物出土状況

(西から)



12住

(西から)



同 カマド



13住  
遺物出土状況  
(西から)



13住  
(西から)



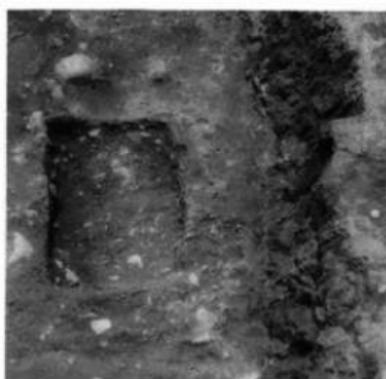
同 カマド



14住  
遺物出土状況  
(西から)



14住  
遺物出土



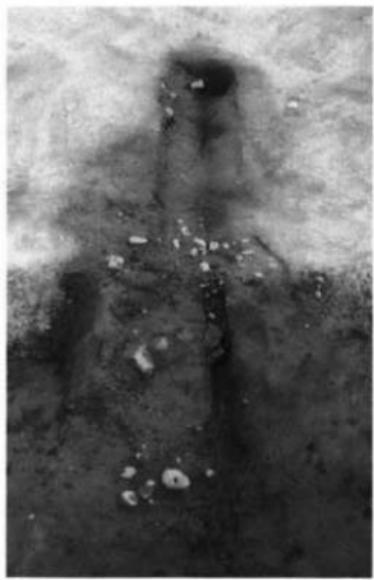
14住 Pit 9 (北から)



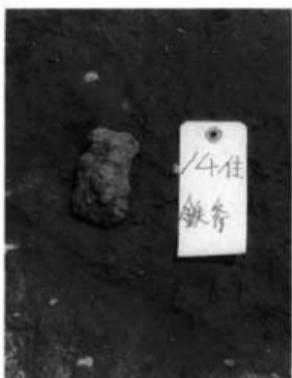
14住  
Pit 9 遺物出土



14住  
(西から)



同 カマド・煙道



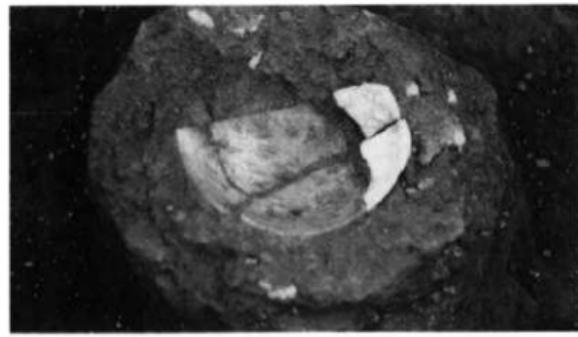
14住 遺物出土



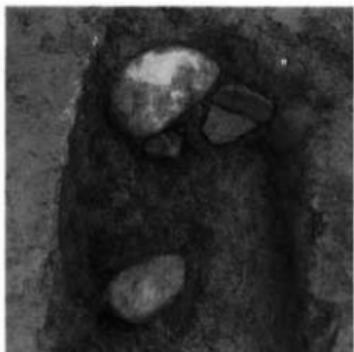
15住  
(北から)



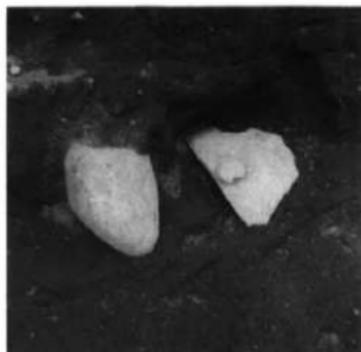
15住  
遺物出土



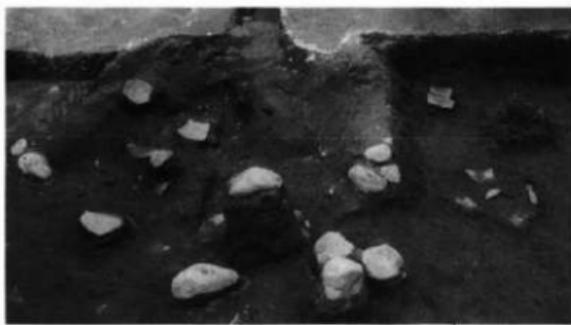
15住  
遺物出土



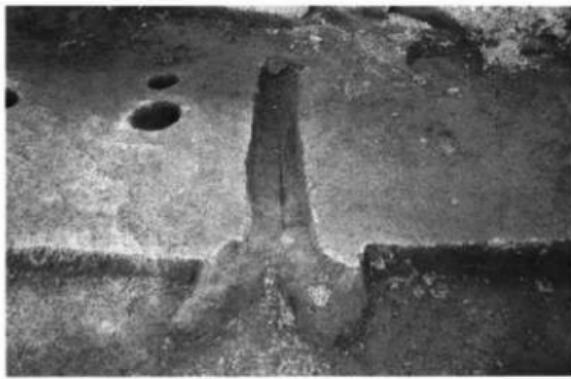
15住 煙出し部分



15住 遺物出土



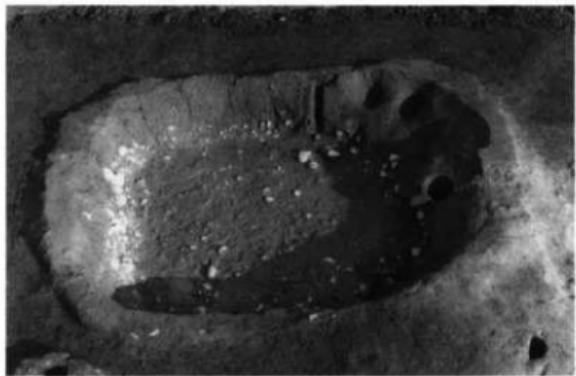
同 カマド



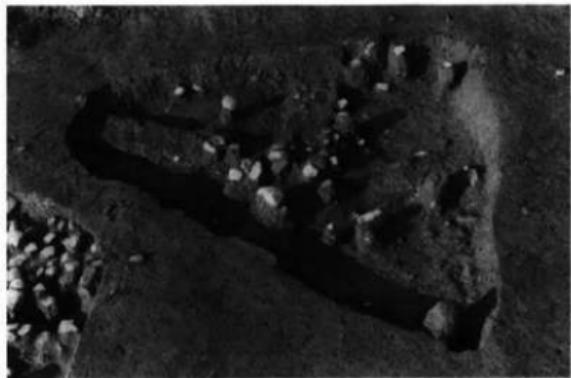
同 カマド・煙道



小豎穴 1  
遺物出土状況  
(東から)



小豎穴 1  
(西から)



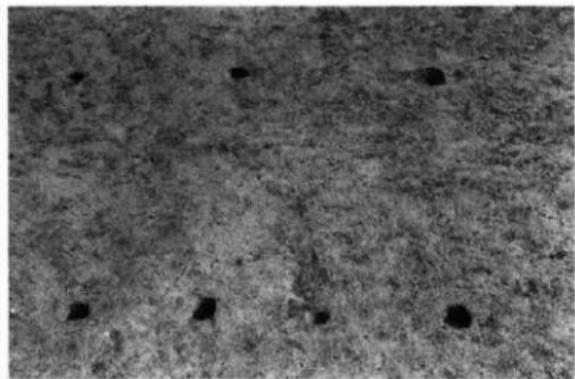
小豎穴 2  
遺物出土状況  
(東から)



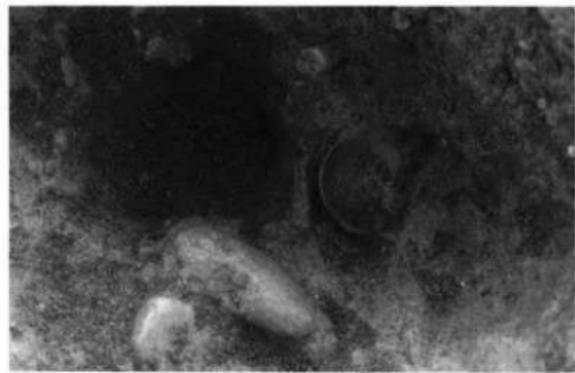
小豎穴 2  
(東から)



建物址 1  
(西から)



建物址 5  
(西から)



P 48  
出土物

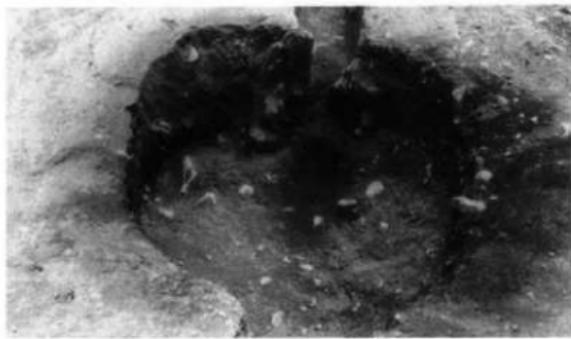
第21図版 建物址・Pit



P 326

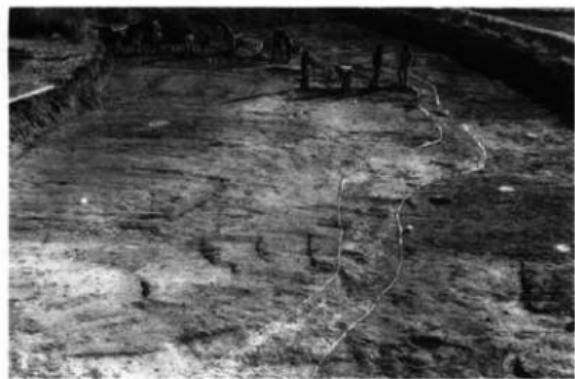


P 310

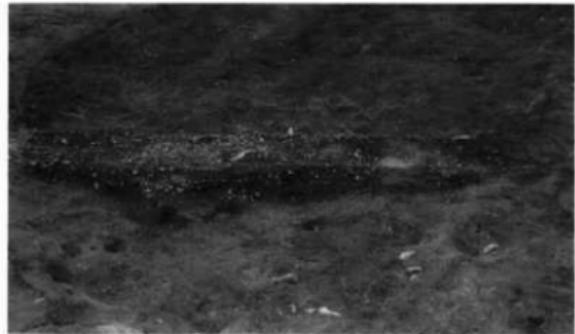


P 379

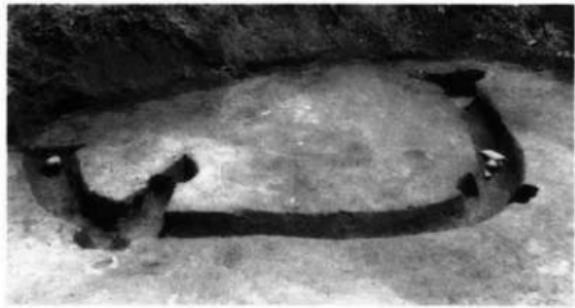
第22図版 Pit



溝1 検出状況



溝3



周溝  
(西から)

第23図版 溝・周溝



23



22



24

第24図版



26



27



36

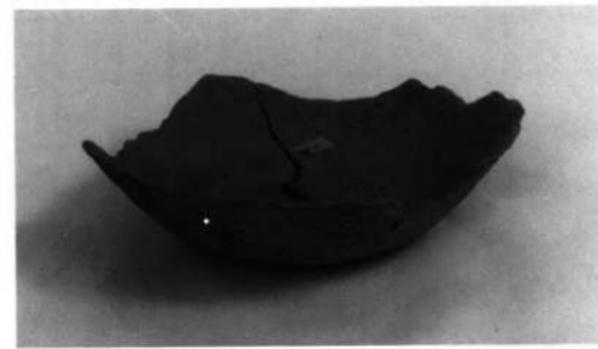
## 第25図版



37



38



39

第26図版



54



55

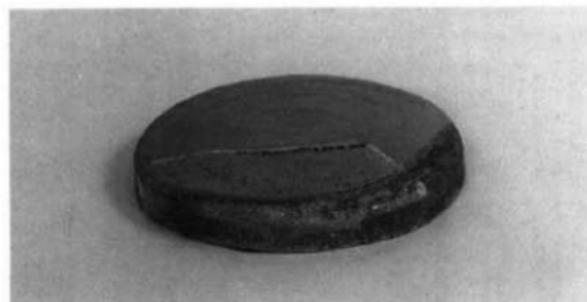


57

## 第27图版



59



60



61



66



69



70



72



76



84



85



89



90

## 第31図版



91



126



103



93



122

## 第32図版



109



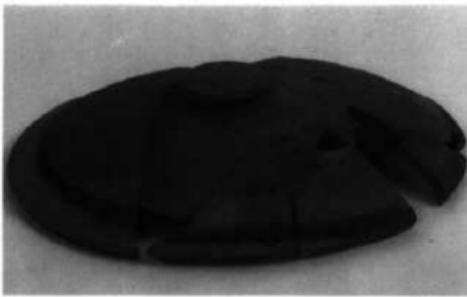
112



118



114



110

## 第33図版



27 体部外面墨書



59 底面墨書

第34回版

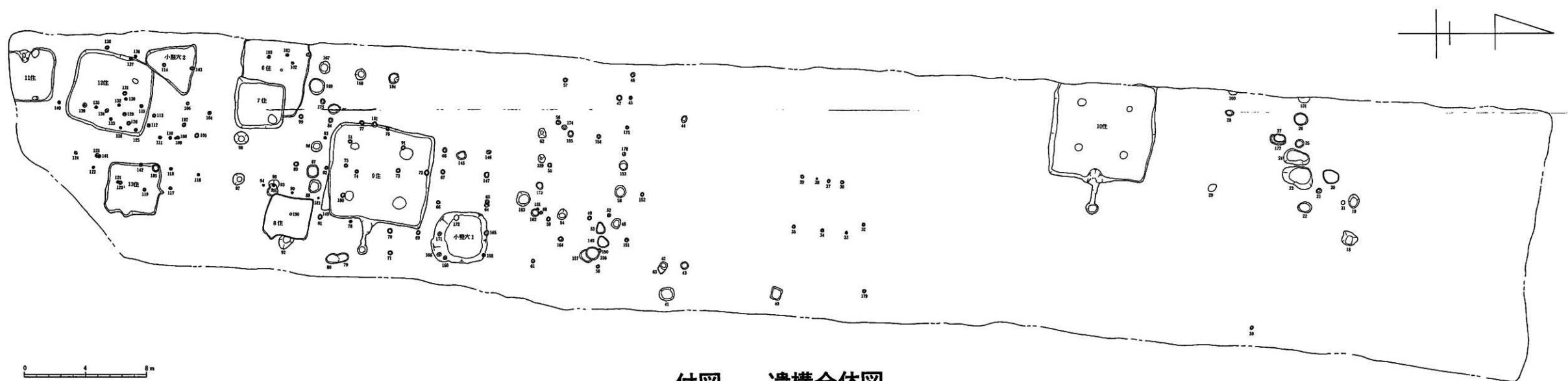
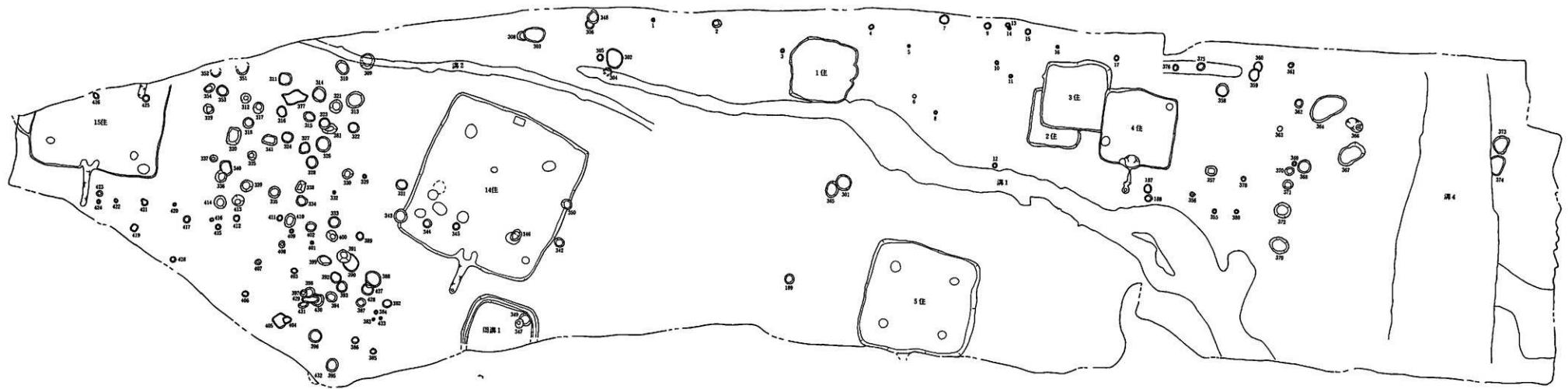


23 体部外面墨書き



鉄器（第43図と並び順は同じ）

第35図版



付図 遺構全体図

---

松本市文化財調査報告No.63

松本市島立条里的遺構

昭和63年3月20日 印刷

昭和63年3月30日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 電算印刷株式会社

---

